
雉野ゆいら
金蘭の王国
月満ちる鏡の里へ
角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

月満ちる鏡の里へ

薙野ゆいら

BEANS BUNKO
15874
角川ビーンズ文庫

金蘭の王国

月満ちる鏡の里へ

薙野ゆいら

15874

角川ビーンズ文庫

金蘭（きんらん）の王国

月満ちる鏡の里へ

序　章	彼方へ行くもの	7
一　章	災厄を告げる使者、来たりて	10
二　章	死者の面影の里へ	47
三　章	鏡の謎と洞窟の再会	68
四　章	鏡の継承の夜に	93
五　章	鷹を知る男	119
六　章	告白の決意	155
七　章	そして、大いなる理（ことわり）の狭間の戸は開き	181
八　章	二人だけの約束	229
あとがき		250


火雷明王(からいみょうおう)
綺理が降臨させた乾ノ神衆。強大な力をもつ。
真羅(しんら)
綺理たちが幼い頃〈契約〉を結んだ大淵妖。妖王の分身。
翔波(しょうは)
綺理たちの幼なじみの正三位乾術師。冬惺に絶対の忠誠を誓う。

登場人物紹介



冬惺（とうせい）
白桜王家・春怜王の弟。綺理のいとこで、護国大将軍の位をもつ。

綺理（きり）
瑛国の大貴族・玉造家の姫だが、毒薬の調合が趣味の型破りな少女。

本文イラスト／香坂ゆう

序章　彼方へ行くもの

蒼天に、一羽の鷹が舞っていた。

初秋の澄んだ空を旋回し、やがて北へと羽ばたきはじめた鷹を眺め、瑛国第一王女千紗は王宮の高楼の窓辺でふくれっ面をした。

「つまんない。冬惺叔父さまったら、また私を置いて北部に行っちゃうんだもの。婚約式なんて王都で挙げればいいのに」

ご機嫌斜めな八歳の娘に、瑛国王春怜はなだめるように言う。

「まあまあ千紗。きっと冬惺たちも、婚約式を挙げるなら昔一緒に暮らしていた場所でしたいんだよ。二人とも、久しぶりに玉造の里に行けると喜んでいたしな」

――王弟の冬惺と、その従妹にして玉造家の二の姫である綺理。

長年『事実上の婚約者』という曖昧な関係にあった二人は、このたびとうとう正式に婚約することとなった。

ところが玉造家側の要請で婚約式を玉造の里で挙げることになり、今朝方冬惺たちが北部の玉造家領へと発ってしまったため、叔父が大好きな千紗はずっと拗ねているのである。

「ほら、千紗。可愛らしい顔をむくれさせるのはもうおよし。冬惺がいない分、お父さまが千

紗とたくさん遊んであげるから」
「お父さまは真面目にお仕事してなきゃ駄目」
「……」
「……って言っておきなさいって、冬惺叔父さまにお願いされた」
すげない返答の二連打に春怜は撃沈した。本気でしょげた父王に、千紗は慌てて付け加える。
「あ、でも、お父さまが真面目にお仕事したら遊んであげるから！」
「……。千紗、お父さまはお仕事を頑張ってくるね」
なにか違う、と思いはしたものの、愛娘にかまってもらう機会を逃したくはない春怜であった。執務室へ行こうと席を立ち、ふと窓の外に目をやる。
窓は北向き。末弟たちの行く先を見やるように琥珀の目を細め、春怜はつぶやいた。
「西山道か……。鏡作家領には入らないからまだいいが……かなり近くを通ることになるな」
危ぶむような口調に、千紗は思わず振り返った。
『鏡作』は、冬惺の従者である翔波の家名だ。鏡作家領は、いずれ翔波が継ぐ地のはずだ。——なのになぜ父王は、そこを行ってはいけない場所のように言うのだろう？
「……鏡作が動かなければいいが」
そう独り言ちて、春怜は部屋を出る。扉が閉まり、千紗が再び空を仰いだときには、鷹の影はもう北の彼方へと消えていた。

大いなる泥の海、淵海に浮かぶ勾玉形の島――北瑛島。
この島の真ん中を南北に走る天剣山脈の、その西側のふもとを鷹は飛んでいた。
鷹の眼下には一筋の街道が延び、北へ行く王弟と玉造家の姫の一行の姿がある。
豪壮な屋形車と騎馬が連なり、数多くの随身が付き従う大行列。鷹はその上を過ぎると、街道を見下ろす断崖にくちばしを向けた。
緑に覆われた崖の上の一点を目指し、そこに立つ男のもとへ滑るように降下する。
「空羽。おかえり」
男は鷹の名を呼び、革手袋をはめた左手を水平に差し出した。鷹がばさりと羽ばたいて舞い降りると、彼は拳に鷹を乗せたまま山の奥へ歩き出す。
「君も見ただろう。白桜の冬惺と玉造の綺理、そして鏡作の翔波は、予定通り西山道を北上している。私たちも早く行かないと出遅れてしまうよ。なにしろ――」
男は鷹に話しかけながら、北へ続く山並みの果てを見やって薄く笑んだ。
「――じきに、鏡作が動く」

一章　災厄を告げる使者、来たりて

屋形車を降りた綺理は、一面に咲く秋草の花に顔をほころばせた。
「わあ……！　素敵、どっちを向いても花ばっかり！」
碧玉の瞳を輝かせてくるりと回ると、明るい金髪がふわりと躍って陽光に光った。綾の上衣に純白の裳という姫君らしい装束も、綺理がまとうと軽やかで、手首や胸元の玉飾りが彼女の動きに合わせて澄んだ音を立てる。
「これだけ咲いてたら、ちょっと多めに摘んでも大丈夫だよね……っと、そうだ」
はしゃいで野原に駆け込む寸前で、綺理は立ち止まった。
王都輪瑛の西山門を発ってから早十日。
乾ノ力が強い南部とは違い、このあたりは空気も土も水気を多く含んでいる。迂闊に野原に入れば、いつ泥に足を突っ込んで装束を汚すかわからない。
ひだのたっぷりした裳の裾をせっせとからげていると、後ろから呆れ声がかかった。
「阿呆か。両手で裳裾を押さえたまま、どうやって花を摘む気だ」
「冬惺」
振り返ろうとした綺理の頭に、冬惺がぽんと手のひらをのせる。彼はそのまま綺理の隣に並

び、花咲ける野を顎で示した。
「とってきてやる。どの花が欲しいんだ？」
そう言って冬惺が琥珀の瞳を柔らかく細め、綺理がぽっと頬を染める。
仲睦まじい二人の様子に、遠くで見ていた侍女や家人たちの顔にも笑みが広がった。
「ふふ。綺理姫さま、嬉しそうですわ」
「そうそう。やはり冬惺さまのお相手はうちの姫さまでなくてはね！」
「しっ。皆さま、声が大きいですわ。お二方のお邪魔にならないよう、きちんと休憩しているふりをしながら観察しなくては。……でも本当に、絵になるお二方ですわよねえ」
色めきたってささやく同僚たちに、綺理の侍女衆の筆頭格である梨英も同調する。
「正しく恋人らしい戯れですね。『花を摘みたいから行列を止めて』なんて、うちの姫さまにしては珍しくまともに可愛らしいわがままをおっしゃると思っていれば。よい傾向です」
「梨英の言うとおり。今までは幼なじみの付き合いの延長といった風情がどこかにありましたけど、正式に婚約なさることになって、お二方のお気持ちも変化したのでしょうねえ」
同じく筆頭格の桂鈴も、穏やかに微笑んで言った。
――だがもしも綺理たちの会話が耳に届いていれば、彼女たちはそうした見立てが大間違いであることに気づいただろう。
侍女や家人たちの気も知らず、綺理は花を指さしてうきうきと語っていた。

「えっとね、妙翅草……その、花びらが鳥の翼の形をしてる黄色い花がたくさん欲しいな。それと玉簾。あのあたりに生えてる、細長い葉っぱの白い花ね。死人花は球根で欲しいからいいとして……ああ！　やった、心中草がまだ咲いてる！」

「つまりそれは全部毒草なんだな？」

「えへ。やっぱりわかる？」

人差し指を頬に当てて小首を傾げてみせると、冬惺がげんなりした顔になった。とはいえ彼もその答えは予想済みだったのか、既に両手に手袋をはめている。

「相変わらずいい趣味をしているな。史上最悪の花束が作れそうだ」

「え？　野に咲く一見可憐な花が実は毒を秘めているんです、っていうのが妖しくてそそられるんじゃない。それに毒草だって便利なのよ。妙翅草の葉の汁に三種の薬を混ぜて精製すると、蛇よけの薬になるの。明日には山道に入るから、今日のうちに作っておきたくて」

徒歩で同行している家人たちをちらと見た綺理に、冬惺はなるほどとうなずく。

「道理でおまえが、わざわざ行列を止めさせてまで欲しがったわけだ。……ならば妙翅草は、花より葉を採集したほうがいいんだな。この花かごに一杯もあれば足りるか？」

そうして冬惺が野に分け入っていくと、綺理はおもむろに振り返った。屋形車の陰に銀髪の少年がひっそりと立っているのを見つけ、声をかける。

「翔波！　翔波もちょっと手伝ってくれない？」

手招きされて、翔波は青銅色の目を瞠った。周囲の目を気にしながらやってきた彼に、綺理は道端に群生する丈の高い草を示す。

「この葉っぱを集めて乾ノ術で乾燥させてほしいんだけど、頼める？」

乾ノ術とは、詠唱によって天上から乾ノ力を受け取り、さまざまに行使する術のことをいう。雨や霧を晴らす、炎を繰り出して泥の妖、淵妖を退治する、といった派手な術もあるが、本来は地上に悪影響を及ぼす湿ノ力を払うためのもの。薬草を瞬時に乾燥させるのにも使えるため、綺理はときどきこうして乾術師の翔波に乾宝薬作りを手伝ってもらっているのだ。

「手伝うのは構わないけど……いいのかい？」

翔波が片眼鏡越しに冬惺に視線をやるのを見て、綺理は目をぱちくりさせた。翔波は綺理と並んで道端に片膝をつき、葉を摘みながら小声で言う。

「せっかく冬惺と二人でいたのに、僕がお邪魔じゃないかってこと。君たち、髪結い紐の交換もできないまま王都を離れちゃったわけだし、せめてこういう機会に……さ」

ああ、と綺理は苦笑した。

（翔波にはずいぶん心配かけちゃったもんね）

翔波はもう何年も前から、綺理が冬惺に寄せる想いを知って応援してくれている。綺理と冬惺が「王都の市を二人で回り、お互いに髪結い紐を選んで交換しよう」と約束をしたときも、我がことのように喜んでくれた。

が、結論から言うと、二人はまだその約束を果たせていない。

一度は二人きりで市に出かけたのだが、人智を超越した方向音痴である冬惺のせいで道に迷い、戻ろうとしたら今度はなにやら事件に首をつっこむ羽目になり、組み紐の店に行けずじまいになってしまったのである。その日は「また二人で市に行こう」と約束をしたのだが、次の機会が訪れる前に、こうして婚約式を挙げるため玉造の里に発つことになったのである。

おかげで翔波がやきもきしていたのは知っていたが、綺理自身はといえば、もうほとんど吹っ切れていた。——いろいろな意味で。

「うん……まあ、そうなんだけど。そんなに焦ることもないし」

「だけどこのままじゃ、なし崩し的に婚約と結婚って運びになるだけじゃないか。あの恋愛音痴な冬惺が自力で君の気持ちに気づくとは思えないし……」

「や、だから、もうそれでもいいかなーって」

言うと、翔波が驚いたようにこちらを向いた。綺理は曖昧に笑って続ける。

「前はね、いつか冬惺と結婚するのが当たり前だと思っていたから、それ以上のものを——冬惺の気持ちを、がむしゃらに欲しがっていたのよ。でも今は、好きな人のお嫁さんになれるんだから、これ以上欲張ることはないんだって思うの」

冬惺と隣国の明花公女の縁談が王宮を騒がせたのは、ほんの一月半ほど前のことだ。

春怜王が綺理の父、玉造公影珀の権勢を抑えるために仕組んだこの縁談は、大騒動の末に無

事ご破算となり、むしろ今回綺理と冬惺が正式に婚約式を行うきっかけになった。

しかし一時は「冬惺がこのまま明花と結婚してしまうのでは」とまで不安になった綺理である。その反動で、正式な婚約が近づくにつれ、なんだか現状に安心してしまったのだ。

「だってよく考えたら私ってすごく幸せじゃない。普通は私みたいな立場に生まれついたら、政略のために好きでもない相手に嫁がされるのが当たり前でしょ」

さばけた口調で言ってみたが、翔波は「それはそうだけど」とは返さなかった。綺理の顔をのぞきこむように、上目遣いにこちらを見つめてくる。

「幸せかどうかっていうのは、他人と比べてはかるものじゃないだろ。……本当に君は納得している？　本気で、今のままでいいと思っているのかい？」

真剣なまなざしに、綺理は目の前の草に視線を戻した。手慰みに葉を摘みながら、答える。

「――思っているわ」

「……」

「そりゃ冬惺は、私を恋愛対象としては見てないのかもしれないけど、それでも私のことをすごく大事にしてくれているのはわかるもの。冬惺がくれる気持ちの分だけ、私が返せているのかどうかもわからないくらい。だから幼なじみとしての『好き』でも嬉しいし、すごく幸せ」

以前は、冬惺が綺理を守ろうとしてくれるのは、禁忌の《契約》に巻き込んだという負い目ゆえだと思っていた。実際あの頃の冬惺は、彼自身、罪悪感からくる思いと親愛の情の区別が

ついていなかったのだろう。——けれど彼は、その罪悪感から解放された今も、綺理を特別な一人として大切にしてくれている。それこそ、生半可な恋情よりもずっと強く。

忠誠を誓う兄王にですら綺理は譲れないと、冬惺がそう吐露したときのことを思い出し、綺理は頬が急に熱くなるのを感じた。照れ隠しに葉をぶちぶちとむしる。

「だ、だからね、こういう片想いもいいんじゃないかなって思って。——翔波、今まで応援してくれてありがとう。でも私は本当にこのままでいいから、心配しないで。ね？」

にこりと笑ってみせると、翔波は絶句した。ちょうどそのとき冬惺が綺理を呼ぶ声がして、綺理は袋についた葉のくずを焦って払い落とす。

「わわ、ごめんね。葉っぱはこのくらいあれば十分だから、あとは乾燥だけお願い！」

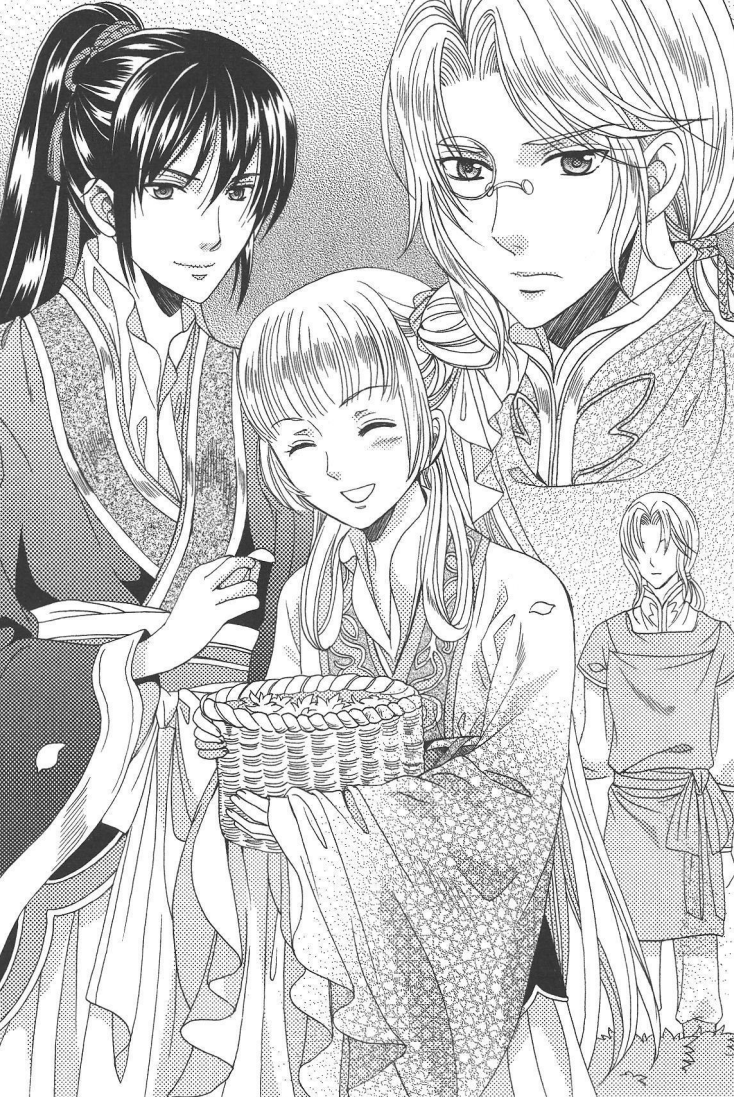
そうして慌ただしく駆けていった綺理を見送り、翔波は呆然と独り言ちた。

「……綺理がいいと言っても、僕は納得できない」

翔波の視線の先では、冬惺が綺理に花かごを手渡している。ふと冬惺が手を伸ばし、綺理の金髪に触れる。絡んでいた花びらを取ってもらって、綺理がはにかんだように笑う。

そんな二人をじっと見つめて、翔波はもう一度つぶやいた。

「——僕が、納得できない」



「――で、君はいったい綺理との婚約をどう思っているんだい？」
「……いきなりなんの話だ。おまえの頭に脈絡という言葉はないのか、この馬鹿従者」
開口一番、据わった目で言った翔波に、冬惺はぐっとこめかみを押さえた。
二人がいるのは、今夜の宿である寺院の本堂だ。ほかに人けのない堂内には乾術師の香がたちこめ、祀られている乾ノ神衆の像が灯明の仄明かりに浮かび上がっている。
王都の玉造邸の家人がほぼ総出で同行している大行列は、生半な宿では収容しきれないため、沿道の貴族の屋敷や寺院にこうして宿泊することはままある。
そして貴人が寺院を訪れた場合、祀る神衆像に祈りを捧げるのが慣例だ。
――この世界は、人の祈りによって支えられている。
乾ノ神と湿ノ神が創りしこの大地は、湿ノ力が強まりすぎるとやがて淵海に沈んでしまう。そこで人は祈りによって乾湿の均衡を保っているのだが、同じ祈りでも乾術師の素質のある者、つまり王族や貴族が捧げたほうが、より多くの乾ノ力を受け取ることができる。乾ノ術を一切使えない冬惺も、血筋上潜在的な素質は高いはずなので、例外ではない。
よって夕餉のあと、先に薬の調合をするという綺理を置いて翔波と本堂に来たのだが――。

祈禱を終えた直後に、先ほどの翔波の台詞である。
わけがわからない。
「いいから答えてよ。正式な婚約の前に、君の気持ちをはっきり聞いておきたいんだ」
「おまえもしつこいな。どうもこうも、俺は綺理を理想の結婚相手だと思っているが？」
「そこをはっきりさせたいんだけど、どういう意味で『理想』？」
本当にしつこい。冬惺はため息をつくと、物分かりの悪い生徒に教えるように言う。
「南部に基盤を持つ白桜王家の王弟と、北部の大貴族である玉造家の姫。政略結婚として申し分ないだろう。乾ノ術を使えない外れ者同士、釣り合いもとれているしな。それに綺理相手なら隠し事の必要もな……」
「そういうことを聞きたいんじゃない」
苛々した声でさえぎられ、むっと翔波を睨む。
「じゃあなんなんだ」
「対外的なことじゃなくて、お互いの気持ちの問題だよ」
「それこそ質問の意図がわからないな。俺は綺理が好きで、綺理も俺が好きだ。いったいどこに問題の生ずる余地がある？」
綺理との十年の絆を軽く見られた気がして、冬惺は語調を荒くした。
――そしてそれだけに、次の翔波の言葉に衝撃を受けたのだ。

「『綺理も俺が好き』？　どうして君がそんなことを自信満々に言えるのさ。綺理の気持ちをなにもわかっていないくせに――、っ！」

翔波がはっとしたように口元を覆う。かっとなった拍子に本音がこぼれた、と言わんばかりのその動作に、冬惺は凍りついた。

（……待て。今のはどういう意味だ）

体の動きが止まった代わりに、頭の中はめまぐるしく動く。

なぜ自信満々に言えるのか、とはどういうことだ。まるで『綺理も俺が好き』というのが、勘違いだと言わんばかりではないか。だが綺理が実は冬惺のことを嫌っている、というのは絶対にありえない。では、なぜ。そもそもなぜ翔波はこの話題にこだわるのだろう。結婚相手として、という部分が重要なのか。そういえば以前綺理に「恋占いをしたことがあるか」と聞いたとき、彼女は否定しなかった。……。

たっぷり十秒後。最悪の結論が出た。

「……まさか綺理は、ほかに好きな男がいるのか……？」

「馬鹿だろ、君」

即座に否定されて、心の底からほっとした。真っ暗になりかけた視界が再び色を取り戻す。

（そうだ。もし綺理にそんな男の影があったら、俺が気づかないわけがない。綺理と翔波が時々ひそひそ話をしているのも、色恋沙汰とは関係ないなにか別の相談事だったに違いない）

……冬惺に聞かせられない相談事とはなんだろう。そして結局、翔波の言葉の意味は。

「動揺しているね、冬惺。やっぱり気になるんだ。綺理に好きな男がいたら嫌かい？」

翔波の声がどこかほっとしているように聞こえ、ますますわけがわからなくなる。

「嫌に決まっているだろう。というか本当にいないんだろうな、そんな相手」

「……。いるかいないか、君はわからないのかい？」

「今の間はなんだ。結局どっちだ！」

ぎょっとして問い詰めると、翔波は逆にこちらをきっと見返してきた。その気迫に思わずたじろいだ冬惺の鼻先に、翔波の指がびしっと突きつけられる。

「ほら。やっぱり君は、綺理の気持ちをなにもわかっていないってことだ。綺理が君との婚約を本当はどう思っているか知らないくせに、よくのうのうと婚約に臨めるね」

反論できなかった。

冬惺と綺理の両方をよく知る幼なじみの言葉は、ほかの誰が言うよりも心に響く。

（綺理が、本当はどう思っているのか）

綺理が冬惺との婚約にためらうそぶりを見せたことはない。冬惺が明花公女と見合いをする羽目になったときも、彼女は真っ向から明花と対決していた。だがそれはすべて玉造家の姫という立場ゆえで、彼女には本当は別の思いがあったというのか。

（……聞いたことがない。綺理も俺と同じ気持ちだろうと、漠然と決めつけていた）

そして冬惺の知らない綺理の本当の心を、翔波は知っているというのか――。
ざわ、と胸の奥でなにかがうずいた。
「――婚約式を挙げる前に、そのあたりをすっきりさせておくことだね」
翔波が突きつけていた手を引き、訳知り顔で片眼鏡を押し上げる。
その様に、冬惺は不安がますます膨れあがるのを感じた。この場にいない綺理が急に見知らぬ女性に変貌してしまったような感覚に襲われ、無性に焦りが募る。
(綺理に、会いに行かなければ)
焦燥に突き動かされて出口に足を向けたそのとき、本堂の扉が開いた。
軽装に着替えた綺理が、顔をのぞかせる。
「あ、よかった。まだいた……って、二人ともどうかしたの?」
微妙な空気を敏感に察して、綺理がきょとんとなった。
冬惺は思わず硬直し、翔波は彼女と入れ替わりに出て行きながら晴れやかに笑う。
「いや、なにも? ただ僕が一方的に冬惺の悪口を言っていただけ。じゃあね」
「ええ!? 一方的って……冬惺が反撃しなかったって、冬惺、どこか具合でも悪いの!?」
「なぜそうなる。おまえのそのずれた反応こそ、頭の具合が悪いように聞こえるぞ」
冬惺は呆れて、駆け寄ってきた綺理の頭をぐしゃぐしゃとかき回した。
「きゃっ。ちょっと冬惺、髪を梳かしたばっかりだったのに!」

抗議する綺理に「はいはい」とわざとなおざりな返事をしながら、手櫛で丁寧に梳いて元通りにしてやる。いつも通りの綺理といつも通りのやりとりに、少し安心した。

「それより綺理はこれから祈禱か。俺もつき合うから、終わったら剣の稽古をしないか？」

「！　うん！　ちょうど今、剣の稽古を頼もうと思ってたところなの。冬惺、よく私の考えていることがわかったね」

「いつも見ていればわかる。おまえは俺たちと違って移動がずっと屋形車だったからな。そろそろ、体を動かしたくてうずうずしはじめる頃だと思っていた」

嬉しそうな顔になった綺理に、こういうことなら簡単にわかるのにと思う。

（綺理。おまえは、俺との婚約をどう思っているんだ？）

聞いたことがないなら聞けばいい。今なら都合よく二人きりなのだし。――翔波が扉を閉める音にそう考える一方で、なぜか言葉がまったく出てこない。

目を閉じて神衆像に祈っている綺理の横顔を盗み見て、冬惺は胸中でため息をついた。

（――婚約式を挙げる前に、か）

「従者。君もたいがい、いい性格をしているな」

聞きなれた声が頭上から降ってきたのは、翔波が本堂を出てすぐのことだった。

月光が射し入り、柱の影が等間隔に並ぶ静かな回廊。そこを歩く翔波の隣に、小さな影が音もなく降り立つ。

「少年は明らかに、君の言葉を誤解していただろう。いいのかね？」

「いいんだよ。このくらい危機感を与えておかなきゃ、冬惺はいつまでたっても――」

翔波はふと言葉を切り、並んで歩く真羅を見下ろした。

影の中でも輝く翡翠の瞳に、金と銀が一房ずつ交じった短い黒髪。腰からひょうたん水筒を下げ、十歳ほどの美貌の少年の姿をした彼は、翔波たち三人と《契約》をしている大淵妖だ。

「真羅。君、僕らの話を聞いていたんだ。……本堂って、寺院で一番乾ノ力が強い場所なんだけど。湿ノ眷属のくせに普通に入れたのかい？」

「私を誰だと思っているのだね？　長居をすれば喉は渇くが、入るに支障はないのだよ」

妖王の分身は呆れ顔で答えた。確かに、彼が乾ノ力の強い王宮にも平然と出入りしていたことを考えれば、当然の返答だろう。だが聖域の結界ですら無意味だと聞くと、彼が本体の妖王とは違って人間の味方だと知っている翔波でも、複雑な気分になる。

真羅は、それはともかく、と肩をすくめた。

「従者も世話焼きだな。興味があるのだが、なぜそこまで少年とキリの仲を取り持とうとするのだね。キリを幸せにするため、なのかね？」

「当たり前だろ。ほかになにがあるんだよ」
「私としては、なぜそこで君が嘘をつくのか興味がある」
「！」
不意打ちに、翔波は回廊を曲がりそこねた。柱に思い切り肩をぶつけてよろめく。
「な、なんで嘘なんて……」
「大淵妖は嘘つきなのでね、他人の嘘にも敏感なのだよ。それにキリを幸せにするためだけだというのなら、キリが今のままで幸せだと宣言した時点で理由はなくなっていたはずだ」
誘導尋問に引っかかったことを知って、翔波は苦虫を噛み潰したような表情になった。からかうような目つきの真羅を、腹立ちまぎれに睨む。
「僕としたことが忘れていたよ。君が、盗み聞きが大好きで意地悪な大淵妖だってことを」
「ふむ。正確に思い出してくれて光栄だ。それで、君がキリと少年を必死で両想いにしようとする、本当の理由を聞いてもよいかね？」
翔波は青銅色の瞳をさらに険しくした。――勘のよすぎる相手は厄介だ。嘘をつけば、嘘で誤魔化そうとした理由ごと見破られる。
「……自分のためだよ。これ以上は言えない」
言い捨てて、追及を振り切るように歩き出す。
早足で回廊を突っ切り、門衛への挨拶もそこそこに中門を抜け、石段を二段飛ばしで駆け下

りる。下りきったところで振り返り、翔波は拍子抜けした。
（なんだ。もっとしつこく聞かれるかと思ったのに）
門衛の目があるから隠れただけかもしれないが、真羅の姿は見えない。
翔波はほっと息をつき、客用の宿坊を目指した。本堂を出る間際に冬惺たちが剣の稽古云々と話していたので、準備をしておいたほうがよいだろう。
（どの道、剣の稽古をするなら宿坊の裏庭を使うだろうし。……やんごとなき姫君が婚約者に剣術の稽古をつけてもらっているところなんて、寺院の人が見たら仰天ものだからなあ）
山中に建てられたこの寺院は、本堂や講堂、五重塔といった主要な建物以外の施設は、地形に合わせてばらばらに配置されている。客用の宿坊があるのはやや奥まった一角で、そこの裏庭は崖と森に面しているため周囲から見通せないのだ。
（ああでも、月明かりだけじゃ暗いな。こっちにもたいまつがいるか）
宿坊内の自室に入った翔波は、そのまま部屋を横切り、裏庭に面する簀子縁に出た。
そして階を下りようと高欄に手をかけた、そのときだ。
（！）
庭の茂みが揺れ、暗がりから一つの人影が現れた。
闇に溶け込む紺色の装束に身を包み、同色の覆面頭巾で顔を隠した小柄な人物だ。
「何者だ？」

翔波はすばやく身構えたが、不審者に敵意はないようだった。簀子縁のもとに歩み寄ると、階の上の翔波に向かってうやうやしくひざまずく。

「鏡作の里、佐鏡家よりの使いです。鏡作家次期当主、翔波さまに内密のお話があって参りました。余人を交えずにお聞き願います」

「佐鏡家……」

鏡作家に仕え、補佐する一族の名に、翔波は瞠目した。

もっともこの寺院は、天剣山脈を挟んで鏡作家領と非常に近い位置にある。翔波が冬惺の従者となって以来、一度も鏡作家領に行っていないことを思えば、この機会に里の者が翔波に接触を図ってきたのは不自然ではない。

問題は、こうして密かにやってきた理由だ。

「……内密の話というのは？」

以前、鏡作の里の出だという紅楓方の間者から「紅楓王家方に戻れ」と誘いを受け、断ったら殺されそうになったことを思い出す。この使者は声や体つきからしてかなり年若い少年のようだが、誰にも見咎められずにここまで忍び込んできたという時点で油断はできない。

（まずいな。夜だから乾ノ術が使えないし、鉄つぶてくらい携帯しておくべきだった）

だが使者の口から出たのは、翔波が予想だにしないことだった。

「半月ほど前より、鏡作の里に化け物が現れ、夜な夜な害をなしているのです」

「！　化け物!?」

「はい。現在は佐鏡の術師が結界を張ることでしのいでおりますが、化け物は日に日に強大になる一方。このままでは遠からず里人が襲われ、里は滅びの道を歩みましょう」

滅びという言葉に、翔波はすっと青ざめた。

――今年の夏、淵妖退治のため訪れた北部で、淵妖に襲われて滅びた里を見た。異形の植物に埋めつくされた広場。朽ちて苔に覆われた家々。畑も道も一様にぬかるみと化し、長年の人の営みのすべてが泥に沈みつつあった地。

あの光景が、五歳の頃まで住んでいた鏡作の里の記憶に重なる。

「王都に報せは送ったのかい!?　急ぎ、乾術師を派遣してもらうよう嘆願して――」

「たとえ嘆願したとして、白桜王家が鏡作を救うとでもお思いですか？」

焦って言った翔波を、使者は静かにさえぎった。

「金蘭王朝よりも古き大家である鏡作を、白桜は九年前に滅ぼそうとしました。翔波さまが白桜に屈従なされて御家取り潰しを免れた今も、彼らはかつて紅楓王家に仕えていた私たちを疑い、翔波さまを人質として手中に置いています」

「待て、僕は別に人質なんかじゃない！」

「では鏡作家の次期当主たるあなたを、白桜が決して里に帰さなかったのはなぜです？」

使者が面を上げた。覆面頭巾からのぞく漆黒の瞳が、翔波を射貫く。

「里に化け物が現れたのも、当主の座が長きにわたって空になっているせいなのですよ」
「え……？」
「化け物とは、遥か古、鏡作家の御祖がその御業をもって封じし、『継承の獣』と呼ばれる妖のこと。これまでは代々の鏡作家当主が、当主継承の秘儀の際に封印を新たにしていたのですが、このたび当主不在が長引いたために封印がほころびはじめたのです」
使者の強いまなざしに気圧され、翔波は我知らず身を引いた。
「本来なら翔波さまが成人されてからお迎えに上がる手はずでしたが、こうなった以上もはや待つことはできません。――翔波さま。即刻里にいらせられ、当主継承の儀にお臨みください。鏡作には当主が必要です。『継承の獣』は、当主位を継ぐ者にしか封印できないのです」
「ちょっと……待ってくれ。当主継承って……即刻？」
突然の話に戸惑い、翔波は前髪をかき上げた。
急に言われても困る。翔波はもともと当主位から遠い存在だったのだ。金蘭王家が白桜と紅楓の二家に分かれて以来の王位争いの内乱で、一族が全滅したために、次期当主の座が回ってきただけだ。いきなり継承の儀などと言われても、それがどんなものかすらわからない。
けれど使者は視線を一切揺らさずに断じる。
「はい。必要な物はこちらでご用意しますので、今すぐ私と共においでください」
「いや、そういうわけにはいかないだろ。事情が事情だからなんとかしようとは思うけど、ま

ずは冬惺公閣下に相談して判断を仰がないと」

「なりません！　白桜がこちらの動きを知れば、あなたを拘束して決して里には行かせないでしょう。手遅れにならないうちにあなたを里にお連れできるのは、今しかないのです」

翔波はため息をついて首を横に振った。相手の白桜王家への不信感は根深そうだ。どう説得したものかと悩みながら、とにかくこの場は退いてもらおうと言葉を重ねる。

「なんにせよ、今すぐ君についていくのは無理だ。それじゃ夜逃げも同然だし、閣下になにも話さずに出立するという選択肢はありえない。だから――」

「わかりました。では仕方ありませんね」

使者があっさりと立ち上がったので、翔波は面食らった。あまりの態度の変わりように反応できずにいると、使者が深々と頭を下げる。

「大変不本意ですが――ご無礼は先にお詫び申し上げます」

瞬間、翔波の背後で空気が動いた。

（――っ！）

後ろから伸びた手に口をふさがれそうになり、翔波はとっさにその場にしゃがんだ。間一髪、頭上で紺装束の腕が空を切る。

（もう一人いたのか！）

翔波は転がるようにして背後の人物から距離をとった。

そこにいたのは、使者と同じ紺装束をまとった大柄な男。いくら使者に気を取られていたからとはいえ、彼が部屋に潜んでいたことに気づかなかったとは！

「翔波さま、神妙に願います！」

再び向かってきた男に、翔波は高欄を飛び越えて庭に逃れる。

が、着地する寸前、使者の放った分銅付きの縄が右足に絡んだ。しまった、と思ったときには縄を強く引かれ、乾いた土の上に転倒する。

「痛っ……。この……っ」

翔波は急いで身を起こし、守り刀を抜いて縄を切ったが、そのときにはもう男が間近に迫っていた。声を上げる間もなく口に布を押し込まれ、両腕をねじ上げられる。

抵抗の甲斐なく、翔波は後ろから拘束されたまま立ち上がらされた。使者が小瓶を手に近づいてくるのを見て、顔面から血の気が引く。

（薬……僕を眠らせて里に連れて行く気か！）

口に押し込まれた布に、吸入性の薬を染みこませられれば終わりだ。なんとか逃れようと首を振る翔波に、使者は頭を押さえようと手を伸ばしてくる。

そしてその指先が、翔波の顎にかかったときだった。

使者の動きが止まった。

「――そこまでだ」

声は、翔波を拘束している男のさらに後方からした。
翔波は、使者の愕然とした視線を追って首をひねった。背後に立つ男の首に、白刃が突きつけられているのが見える。その太刀を構えている人物が、男の陰からすっと姿を現す。
「俺の従者を、放してもらおうか」
そう言って不敵に笑んだ冬惺に、翔波は安堵の思いが全身を満たすのを感じた。

『従者のもとに鏡作の里から客人が来ているのだがね、どうにも危ない展開になりそうだ』
真羅の報せを本堂で受け取った綺理と冬惺は、その足で翔波のもとに向かった。
綺理の先導で本堂の裏手の森に入り、斜面を下って一直線に宿坊の裏庭を目指す。そして二人が駆けつけたとき、ちょうど翔波が紺装束の二人組に捕らえられていたのである。
「すみません、閣下。ありがとうございます」
解放された翔波が、口に詰められた布を捨てて礼を言う。
「ああ。近道までして駆けつけた俺たちの努力が、無駄にならなくてなによりだ」
冬惺は彼を綺理と一緒に背の後ろにやると、男の首に太刀をあてがったまま顎をしゃくった。
男と、後方に下がってこちらを睨んでいる少年とを順繰りに示す。
「で、おまえにふざけた真似をしようとしたこの身の程知らずどもはなんだ？」

「鏡作の里からの密使だそうです。目的は私を里に連れて行くことだけのようですし……あの、できれば私に免じて手荒なことは容赦してもらえますか」

「手荒、ね。おまえが受けた仕打ちの十倍くらい手荒なことをしても、俺の良心は痛まないがな。――まあいい」

冬惺は肩をすくめて太刀を下ろした。太刀は覆面頭巾を裂いて男の肌に直接触れていたが、刃が離れたあとの首には傷一つない。

男はじりじりと仲間のそばまで下がり、うなるように言った。

「護国大将軍、白桜の冬惺……っ」

「ああそうだ。道理知らずの闖入者でも、自分たちの次期当主の主人が誰かくらいは覚えているようだな。その調子で、貴人に対する礼儀も思い出してもらおうか」

「……将軍閣下。翔波さまをどうなされるおつもりですか」

憂慮する声音に、冬惺が眉をはね上げた。

「翔波を拉致しようとした側の台詞ではないな。それに、鏡作の里が不穏な動きを見せたことで翔波の立場が悪くなる、ということに思い至るだけの能があるなら、他の者がこの騒ぎに気づかないうちに尻尾を巻いて帰るがいい」

二人の使者はちらと顔を見合わせ、ためらうように翔波を見る。

その視線に気づいた翔波が、さっと冬惺の隣に出て言った。

「返事は保留にさせてくれ。里の事情はわかったから、捨ておくようなことには絶対にしないけど、もし里に行くことになるなら僕は自分の足で行く」
「……わかりました。里にはそのように伝えます」
使者たちは丁重に一礼し、闇に紛れるようにして去っていく。
木立のさやぐ音が完全に遠ざかると、綺理と冬惺は同時に翔波を見た。
「里の事情って……いったいなにがあったの？」

宿坊内の冬惺の部屋に三人でこもり、使者とのやりとりの一部始終を聞くと、冬惺がため息混じりに言った。
「代々の当主が封印してきた化け物、か。場所が鏡作の里でさえなければ、もう少しもっともらしい嘘を考えてこい、と笑い飛ばして終わりなんだがな……」
綺理は同感とばかりにうなずく。
「なんたって、あの鏡作の里だもんね」
——鏡作の里は、古代の風が今も残る、謎多き地だ。
そもそも鏡作家は、玉造家と並んで瑛国最古の家柄である。志輝王が瑛国を統一して金蘭王

朝を開く以前は、北瑛島の北部は鏡作と玉造の二大家が治めていた。
　時を経て、鏡作家のほうは貴族として没落し、所領もわずかなものとなったが、その本拠地である鏡作の里には、今も古の術や儀式が密かに伝えられているという。
「うん。当主にしか使えない秘術があるっていうことは、昔聞いたことがある。でも詳しいことは、里の中でも、鏡作家の直系と佐鏡家の主な人間以外には秘密にされていたから……」
　言いよどんだ翔波に、綺理は首を傾げた。
「ね、鏡作家の所領と当主権って、今は白桜王家の預かりになっているのよね。それって翔波が成人したときに返還されるんじゃないの？」
「法的にはそうだよ。ただ、鏡作には鏡作なりの基準があって……簡単に言うと、当主の証を受け継いだ者が真の当主ということになるんだ」
「当主の証？」
「神宝、月氷澄の鏡。たぶん、継承の儀でその鏡の所有権の引き継ぎが行われるんだと思う」
（でもたったそれだけの儀式なら、わざわざ秘儀にしないわよね）
　やはり継承の儀に、当主の秘術や化け物の封印といった秘密が隠されているのだろう……とまで考えて、綺理はぽつりとつぶやいた。
「『継承の獣』……。やっぱりそれも淵妖なのよね」
「たぶんね。当主にしか封印できないっていうのが引っかかるけど……」

しばし沈黙が下り、灯明台の明かりが翔波の思いつめたような顔を照らす。
やがて翔波が顔を上げ、差し向かいに座る主人に視線を据えた。
「お願いがあります、冬惺公閣下。私を玉造の里行きの一行から外し、内々に鏡作の里へ赴く許可をください」
「駄目だ」
にべもなく応じた冬惺に、翔波が愕然とした表情になった。
綺理も驚いて冬惺を見やる。だが琥珀の瞳にじろりと制されれば、彼ら主従の問題に口を挟むわけにもいかず、はらはらとなりゆきをうかがうしかない。
「ですが、淵妖の被害が出ているなら放っておくわけにはいかないでしょう！　鏡作の里はよそ者を入れたがりませんし、そもそも件の化け物は当主にしか対処できないと――」
「だから鏡作家の次期当主として、里の者の要請に唯々諾々と応じると？」
「いいえ。……正直なところ私は、当主位へのこだわりもありませんし、当主継承と言われても実感が湧きません」
翔波は一旦詰まったが、すぐに必死の形相で身を乗り出した。故郷を憂うような苦しげな声で、再び言い募る。
「ですが私の不在のせいで里に危機が訪れ、それは私にしか解決できないというのなら、私が行くべきだと思います。このまま故郷を捨てておくことなどできません！　どうか、今ひととき

だけ、おそばを離れる許可を！」

熱心に訴える彼に、冬惺の返答は冷たかった。

「馬鹿めが。決意はご立派だが、主人として絶対に許可できない。おまえは、兄上が今までおまえを鏡作家領に行かせなかった理由を、理解できていないのか？」

「……それは」

翔波は口ごもった。傍目にもはっきりわかるほどうなだれ、膝の上で拳を握る。

鏡作の民は、かつて敵であった白桜王家方に今も反感を抱いている。無防備に鏡作家領に行ったが最後、たとえ継承の儀をすませても、彼らが翔波をただで帰すとは思えない。

「おまえを拉致してでも里に連れて行こうとした連中だ。おまえを里に監禁して、自分たちの思い通りの当主に洗脳しようとする可能性が高い。だから」

冬惺はわざとらしく言葉を切ると、にやりと笑んだ。

「だから、おまえ一人では行かせられない。俺も一緒に鏡作の里に行く」

「は」

翔波がぽかんとした顔で固まる。

「冬惺！　そうこなくっちゃ！」

綺理は思わず歓声を上げた。冬惺が自分と同じことを考えていてくれたのが嬉しくて、口元がほころぶのを抑えきれない。

「私も行くよ、翔波。私たちがついていれば、鏡作の里の人たちも滅多な手出しはできないもの。それに淵妖が相手なら、きっと私たちにも手伝えることがあるはずだし」

「そういうことだ。理解できたなら、一人で行こうとした自分の馬鹿さ加減を深く反省しろ」

翔波は唖然としていたが、すぐに我に返ったように言う。

「だけど君たちは、玉造の里に行って婚約式を挙げないと！」

「だってもともと、到着してすぐに式っていう予定じゃないもん」

「口実を作って何日か寄り道したところで、さしたる問題はない」

そうそう、とひとしきり息の合ったところを見せると、冬惺は真面目な顔に戻った。

「――実を言うと、今回の件は好都合でもあるんだ。鏡作の里には、紅楓方への内通の疑惑がかけられているからな。行って、真偽を確かめる必要がある」

ぎょっとした綺理と翔波に、彼は低い声で問う。

「二人とも。以前俺たちが、北部の異変解決に行くために使った口実を覚えているな？」

「う、うん。『北部貴族の中に紅楓王家方に気脈を通じている者がいる』って噂があったから、実情を密かに探りに行きますと言って――って、そういうこと!?」

綺理が声を上げると、冬惺は「そうだ」と首肯した。

「あのときの調査で多少はあぶりだせたが、隠れ紅楓方の連中はまだどこかで息をひそめているらしい。それで鏡作の里にも疑いがかかっている」

疑惑が晴れなければ、翔波が成人に達しても所領と当主権の返還は見送りにされてしまう。
そしてもし疑惑が本当なら、大事になる前に翔波自身の手で始末をつけたほうがいい。そうすれば酌量も利くし、『当主として領内の問題を解決する能力あり』と主張できるからだ。
「でも里の者が本当に今も紅楓方とつながっていたとしたら、僕はまだしも、君や綺理は里に行ったら身が危ないってことじゃないか！」
「いや。奴らには俺たちに手出しするような大それた真似はできない。もし里人が紅楓方にすり寄ろうとしていたとしても、現段階では次期当主の意志が白桜方にあるからな。紅楓方との信頼関係は築けていないだろうし、そもそも今は化け物騒ぎで手一杯。そんな状態で白桜方と事を構える羽目になるのは、全力で避けたいはずだ」
むしろこちらの安全確保に努めてくれるだろうと、冬惺は言った。綺理が「私も行く」と宣言したときに反対しなかったのは、そうした計算があったからのようだ。
綺理はぽんと手を叩いて、翔波に笑いかける。
「それじゃ決まりね。三人で鏡作の里に行って、化け物も、翔波の当主継承も、里の人たちの真意を探るのも、全部なんとかしちゃいましょ！　みんなで力を合わせれば大丈夫！」
「そうだな。……で、翔波。作戦会議の前になにか言っておくべきことは？」
そう言って傲慢に笑んだ冬惺に、翔波は「でも」と言い募りかけた口を閉じた。二人の幼なじみを代わる代わる見て、ふっと照れくさそうに笑み崩れる。

「――二人とも、ありがとう」

その夜も更けて――、作戦会議を終えてそれぞれの部屋に戻ったあとのこと。
綺理は侍女たちの手で就寝の支度を調えられながら、内心で首を傾げた。
（結局、真羅は顔を見せなかったのよね。どうしたんだろ）
神出鬼没な真羅のことだから、きっと作戦会議の途中で現れるだろうと踏んでいたのに。綺理たちに使者の来訪を告げたあのあと、どこかへ出かけてしまったのだろうか。
（秘術のこととか『継承の獣』のこととか、なにか知らないか聞いてみたかったのにな。火雷明王は夜だから呼べないし……というか、昼間でも人目があるからなかなか呼べないし）
「それでは姫さま、お休みなさいませ」
侍女たちが明かりを消して退出する。静かになった部屋の中で、綺理はしばらく待ってみたが、やはり真羅は現れそうにない。
（やっぱり寺院の中だと居心地悪いのかな。まあそんなに遠くには行ってないだろうし、次に来たときに相談すればいいんだけど……。でも、なんか気になるな……）
綺理は寝台に入りながら格子窓を振り返り、冴え冴えと光る天の銀盤を仰いだ。

月光が枝を透かして降り注ぐ、深い森の中。
真羅は夜露に濡れた草の上に膝をつき、ずきずきと痛む頭を押さえていた。
「――万宵。君もあきらめが悪いな。何度試そうが、私の心は君に塗り替えられたりしない」
頭の中では、本体の妖王のあざ笑う声が響いている。
〈同じ言葉を返そう、私のできそこないの分身。君もたいがいあきらめが悪い〉
妖王万宵が意識に介入してきたのは、真羅が使者たちを追って森を移動していたときのことだ。北瑛島を淵海に沈めようと企む万宵は、それに背く真羅を本体の意識に従属させようと、これまでに何度も精神干渉を行ってきていた。
もし真羅が万宵に屈すれば、この力と体は万宵のものになる。それは、地上に万宵を解き放つのと同義。――そうとわかっていながら、真羅はこの件を綺理たちに明かせないでいる。
〈真羅。君が何度私の意識をはね返そうと、私はまた何度でも魂の糸をたぐり寄せて君に近づけるのだよ？　早くあきらめたまえよ。君の抵抗に終わりはない。君の反抗に勝利はない〉
痛いところを突かれて、真羅は黙った。
終わりはない。

妖王の本体は淵海に在らねばならない。それは世の理。ゆえに今淵海にいる万宵が地上に上がってくることはなく、真羅や綺理たち《調停者》には万宵を滅ぼすすべがない。

綺理たちに関していえば、万宵が《調停者》のいる間だけでも地上への手出しをあきらめてくれれば、それで勝利といえるかもしれない。少なくとも「大事な人たちを淵妖から守る」という願いは叶ったことになり、《契約》は完了するだろう。

しかし真羅は――未来永劫、同胞に追われながら本体への反抗を続けるしかないのだ。

〈……それでも君が地上を守ろうとするのは、やはり《調停者》への執着ゆえなのかね？〉

不意に万宵の声音が変わり、真羅はぎくりとした。

なにか仕掛けてくる、と身構えた直後、本体の意識が急激に迫ってくる！

〈ならば君の持つ《調停者》との記憶、――奪わせてもらう！〉

「無駄なことを！　そうやすやすと奪えるほど、瑣末な記憶と思ったかね！」

万宵の意識の手が、真羅の魂から記憶をえぐり出さんと伸びてくる。そのぞっとする感覚に、真羅は大切な記憶を守ろうと心に防壁を張り――。

それゆえに、一瞬、それ以外の部分がひどく無防備になった。

「な……っ!?」

その隙に、記憶の中から予期せぬ一部分を掠め取られ、真羅は両の目を大きく開いた。

万宵が即座にこちらの意識から去る。静寂に放り出された真羅は、呆然と記憶の欠落部分を

確認した。

（……やられたな。万宵の狙いは、初めから私の知識を奪うことだったのか）

魂のすべてを乗っ取ることに比べれば、感覚を鈍らせたり記憶のごく一部を奪ったりすることは易しい。そして大事な思い出を奪うより、単なる知識を奪うほうがさらに易しいのだ。

（記憶のかけら自体は、また万宵が意識に介入してくれば取り戻せるだろうが……それにしてもなぜ万宵は、わざわざ鏡作の秘儀に関わる知識を奪っていった？）

自問に、自答する。――その知識を真羅が持っていたら、万宵にとって都合が悪いからだ。つまり、と真羅は顔をしかめた。使者たちの帰っていったほうを、剣呑な目で見すえる。

「……万宵が次に狙うのは、鏡作の里なのだね？」

翌早朝。綺理は、昨夜できなかった剣の稽古を冬惺につけてもらっていた。

刃をつぶした剣が朝日に煌めき、鋼の打ち合わさる小気味よい音が宿坊の裏庭に響く。

太刀を最も得意とする冬惺も、稽古のときは綺理に合わせて剣を使う。綺理が打ちかかるたびに、彼は剣の腹で難なく斬撃をいなし、時折こちらに鋭い一手を見舞う。

「……っ！」

綺理は反射的に体が動き、冬惺の剣をなんとか受け流した。が、ほっとした直後、すばやく返ってきた切っ先が綺理の喉元に突きつけられる。

「かわせたと思って気を抜くからだ。それでは一手ごとに動きがぶつ切りになる。きちんと次の動きにつなげていけ。……そろそろ休憩にするか」

二人は剣を下ろし、簀子縁へと歩き出した。陰から見物して「おお、すごい」「さすが疾いな」「あの将軍閣下に稽古をつけてもらえるなんて、つくづく姫さまがうらやましい」などと言っていた玉造家の家人たちが、そそくさと散っていく。

ちなみに侍女たちは、「未来の夫公認だから仕方ない」ととうの昔にあきらめ、綺理の剣術稽古を容認している。今も梨英と桂鈴が、手巾や飲み物を用意して簀子縁で待っていた。

綺理は彼女たちの隣にいる翔波を見て、ぽつりとつぶやく。

「……ねえ冬惺。また使者が来るとしたら、今日中なのよね」

「十中八九。あまり遅れると、俺たちが鏡作家領から遠ざかってしまうからな」

小声での返答に、綺理は昨夜の作戦会議を思い返す。

あのときまず問題になったのが、綺理たちがどうやって鏡作の里に行くかという点だった。

『寄り道の口実も必要だけど、もっと難しいのは里に入るほうだよね。鏡作の里は滅多なことじゃよそ者を入れないから、君たちが一緒に来ようとしても門前払いを食うだろうし』

そう言って考えこんだ翔波に、冬惺はあっさりと答えた。

『それはなんとかする。――綺理。以前俺たちが北部に行ったときの口実を覚えているな？』
『え？　だから、北部の内情を探りに行くって建前で巡察使に任じてもらったんじゃ……。…あのー、そういえばあの巡察使の証の鏡、まだ返上してなかったよね……？』
綺理がおそるおそる問うと、案の定、彼は満足げに口の端を持ち上げた。
『ああ。だからもう一度向こうから接触がありさえすれば、どうとでもできる』
（……でも次ってどういう形で来るんだろ。今夜もまた、こっそり密使を送ってくるとか？）
つらつらと考えながら、綺理は冬惺と並んで階に腰をかけた。
冷茶で喉を潤し、一息ついたとき、ふと簀子縁の向こうから壮年の男がやってきた。
「冬惺さま、綺理さま。至急お耳に入れたき儀がございます」
一行を取りしきる玉造家の家令だ。彼の硬い表情に皆が静まる。もしや鏡作の里から使者が、という予感が、綺理の胸をよぎった。
――その予感はある意味で外れ、またある意味では的中した。
「この先で崖崩れが起き、西山道が封鎖されたとの報せです」
「崖崩れ!?」
家令はうなずき、被害状況を手短に報告して続ける。
「復旧には時間がかかりそうですし、それを待って長逗留するにもこの寺院ではご不便をおかけしましょう。そこで封鎖地点を迂回して進むよう、行程の変更を検討しているところです」

「！　ここから迂回するといったら……！」

翔波が思わず口を挟むと、家令は彼に視線を移して言った。

「はい。――鏡作家領を通らせていただくことになります」

二章　死者の面影の里へ

北部には北部の流儀がある。

独立心が強く、伝統的に南部と仲の悪い北部の人間にとっては、南部人の打ち立てた王朝である金蘭王朝も、その流れを汲む白桜・紅楓両王朝も、決して絶対の存在ではない。

一番大切なのはあくまで己の主家。身内に甘く、身内の言うことは信じる代わりに、排他的で北部の慣習を解する人間しか信用しない。

――そんな北部人の気質をもっとも強く残しているのが、鏡作の里をはじめとする鏡作家領の民であり、今綺理たちの前にいる老境の男である。

「鏡作の里にて次期当主の留守を預かっております、佐鏡の葉厳と申します」

「白桜の冬惺だ。此度は突然の訪問にもかかわらず、歓待を感謝する」

含みのある言い方をした冬惺に、葉厳の漆黒の瞳に険が宿った。

ここは鏡作の里の手前の町にある、鏡作家の下屋敷だ。

上屋敷、つまり山中の里にある本邸には限られた人間しか出入りできないので、表の政庁や社交場としての機能は、裾野の町に設けたこの下屋敷で果たしているのだ。

今朝方、領内通行の許可を求めた一行は、迂回路の途上にあるこの下屋敷に招かれて宿泊す

ることとなった。そして到着して早々、佐鏡家の長、葉厳の挨拶を受けたのである。

鏡作の民からすれば、冬惺は主家を救った恩人であり、北部育ちで北部の流儀を解する『こちら側』の人間だ。だが同時に、かつての敵である白桜王家の一員で、次期当主を今なお従者の身においている人間でもある。抱く感情は複雑なのか、あまり好意的な様子はない。

儀礼上のやりとりを一通りすませると、冬惺から切り出した。

「昨夜そちらが送ってきた使者の件は、我々も承知している。余計な人間もいないことだし、早く本題に入ってはどうだ」

室内には初めから綺理たち三人と葉厳しかいない。翔波が冬惺の従者としてこの場にいる以上、下手に家人を同席させれば、翔波の席次が家人と同列になってしまうからだ。そうなれば佐鏡家の側は、感情を害するどころの騒ぎではない。

葉厳はぴくりと片眉を上げると、上座から少し下がった位置に座る翔波に目をやる。

「――では。こうして閣下方が鏡作家領に立ち寄ることになったのも、天の采配でしょう。改めて、翔波さまには里にいらせられ、当主継承の儀に臨んでいただきたくお願いいたします」

「……崖崩れが天の采配？」

「もちろんです、翔波さま。保留となっていたお返事をいただけますか」

葉厳は泰然と応じた。綺理は自分に注意が向けられていないのをいいことに、じっと彼を観察していたが、鎌かけに動揺した様子は確認できなかった。

翔波はそんな葉厳を見すえ、はっきりと答える。
「里に行くよ。鏡作の里の危機を放ってはおけない。継承の儀を行って、必ず化け物を封印する。閣下にも事情をお話しして、きちんと許可をいただいたしね」
冬惺が許可を出したと聞いて、葉厳が瞠目した。半信半疑といった体の彼に、冬惺は続ける。
「ただし条件がある。いくら俺の権限内で許可を与えたとはいえ、翔波が兄上……陛下の裁可なく里に戻ることに変わりはないからな。不法行為と咎められ、叛意を疑われれば、当主権と所領の返還の約束が反古になる。それを避けるために――」
冬惺は懐から小さな青銅鏡を出し、背面を見せつけた。
鈕を中心に、四方に羽を広げた二対四羽の鳳凰と、天下を取り巻いて睨みをきかせる慧眼の竜。――巡察使の身分証、四鳳凰竜瞳鏡だ。葉厳が息をのむ。
「俺が巡察使として鏡作の里を監察しに行く、という形を取らせてもらう。監察対象地に潜入するためであれば、巡察使の権限で翔波を同行させられるし、無用な疑いを招く恐れもない」
しれっと言った冬惺に、葉厳の表情が見る見るうちに険しくなっていった。
（向こうから接触があればどうとでもできるって……要するにこれ、脅迫よね？）
綺理はいつものことながら、冬惺の悪賢さに呆れた。
冬惺は、「翔波を鏡作の里に連れて行きたくば、里の内情を調べさせろ」と突きつけている

のだ。拒めば、探られて痛む腹があるからだと見なされるので、里側は承諾するしかない。そして承諾すれば、冬惺たちに里内での行動の自由を与えなくてはならなくなる。

やがて葉厳が、苦々しい顔で口を開いた。

「わかりました。しかし陛下に対してはそのように報告なさるとして、表向きは別の口実が必要となりましょう。そこで」

彼は綺理のほうを向き、漆黒の双眸をすっと細めた。

「――玉造の綺理姫さまにも、ご一緒に里にお越し願います」

鏡作家領から玉造家領へ抜ける道が連日の雨でぬかるんでおり、屋形車で通るのが難しい。そこで道が乾くまで、一行はこのまま下屋敷に滞在するのがよいだろう。

しかし高貴な方々を迎え入れるのにずっと下屋敷で、というのは失礼にあたるので、冬惺、綺理、翔波の三人については、鏡作の里にある上屋敷のほうに招きたい――。

葉厳が『表向きの口実』として提示したのは、そんな筋書きだった。

確かにこの場合、綺理も一緒に招かなければ道理に合わない。しかし葉厳が綺理も共に来る

よう要請した真の理由は、冬惺に対するせめてもの牽制だろう。綺理がいれば冬惺も滅多な行動は取れなくなる、と踏んだに違いない。

だがそれすらも冬惺の計算のうちだ。

（さすが冬惺。本当に、三人一緒に堂々と鏡作の里に行けるようにしちゃった。ただ、あんなやり方じゃ冬惺の心証が悪くなるんじゃないか、ってことだけは心配だけど……）

綺理たちは協議を終えると、佐鏡家からの申し出について一行の者たちに伝えた。

玉造家の家人や侍女たちは、翔波を身内同然に信用しているため、鏡作の民に対しても警戒心が薄い。「迂回してもなお余裕のある行程なのだから、厚意に甘えて何日間か滞在させてもらおう」という流れにごく自然に収まった。

そして翌朝。綺理たち三人は一行から離れ、鏡作の里へと発ったのである。

「どちらかというと、信用されてないのは私のほうかも……」

里へ向かう屋形車に揺られながら、綺理は侍女一同からの文にため息をついた。

「それ、梨英どのが見送りのときに渡していたやつだよね。なにが書いてあるんだい？」

佐鏡家の用意した屋形車はかなり小型だったが、綺理、冬惺、翔波の三人だけなら窮屈なが

らも同乗できた。膝を突き合わせるように座っている翔波に問われ、綺理は肩をすくめる。

「延々と注意書きの羅列よ。――里の人の前で毒薬の魅力を語らないこと。毒草採集は人目をさけて行うこと。毒薬調合は里から帰るまで我慢すること。剣の稽古は、剣舞の練習だと誤魔化せる程度のものにしておくこと。山遊びをするときも身だしなみに気を配ること――」

「おまえの普段の行いと、侍女たちのおまえに対するあきらめっぷりがよくわかるな」

隣で冬惺がぼそりと言った。

「でも、こんなに紙を継ぎ足してまで長々と書くことないと思わない？」

綺理は巻物並みの太さがある巻文を示し、口をとがらせる。だいたい綺理の侍女たちは、綺理たちが三人だけで鏡作の里に行くと伝えたときも、かなり失礼なことを言っていたのだ。

『そうですわねえ。あの鏡作の里ですから、私たち侍女がおいそれとご一緒するわけにはいきませんものね。先方も、翔波どのを私たちと同格にもてなすのに抵抗があるからこそ、こうしてお屋敷を分けて迎え入れることになさったのでしょうし』

『ですがうちの姫さまを野放しにするのは、いろいろな意味で果てしなく心配です……』

（野放しってなによ！　あのあと、梨英たちがなにかこそこそ書いてると思ったら！）

綺理は巻文を左手で広げ、右手で巻き取りながら、順に読み上げていく。

「毒蛇に咬まれないように気をつけること。毒蛇を捕まえないように気をつけること。毒蛇を飼わないように気をつけること。毒蛇にドクちゃんと名前をつけないように――って、もう！

子供の頃の話をいつまでも引きずるんだから！」

「……楽しそうだね、君の侍女たち」

実際、読み進めるうちに面白がっているとしか思えない内容になってきた。かと思えば、いきなり意味不明の注意書きになる。

「なにこの細かい注意。夜着の帯紐は固く結びすぎないこと？　客室が冬惺と続き部屋になった場合は、万一に備えて扉の閂をかけないで……」

綺理はそのあとにずらずらと続く『注意書き』の意味を悟り、言葉をのんだ。ものすごい勢いで顔面に血が上り、膝の上に広げていた巻文をばっと抱えこむ。

「なんだ？　なにが書いてあった？」

「いや――っ！　駄目、見ないでええ！」

隣から冬惺にのぞきこまれそうになり、絶叫する。焦ってその部分をぐしゃぐしゃにしようとして、勢いあまって巻文そのものを放り出してしまった。

（あ……）

狭い屋形車の中だ。内壁に当たってはね返った巻文が、三人の間に落ちる。――『冬惺に迫られたときの心構え』がきわどく書かれている部分が、大きく広がったまま。

しん、と屋形車の中が静まり返る。

綺理は急いで巻文をひったくり、荷物に押し込んだが、明らかに手遅れだった。

（み、見られた、冬惺に見られたあっ！　やだもう、恥ずかしすぎる……っ！）

侍女たちの多大なおせっかいに、胸中で盛大に文句を並べ立ててみたが、そんな現実逃避をしている間にも微妙な沈黙が続く。……気まずい。

この場に冬惺と二人きりでないだけ、まだましかもしれないが、隣との距離が近すぎる。ちょっと屋形車が揺れれば冬惺と肩の触れ合うこの距離を、今さらながらに意識してしまう。

「……あのな、綺理」

「ああっ、そういえば出発してから一度も外を見てないよね！　どのくらい進んだかしら！」

隣で冬惺が身じろぎした瞬間、綺理は反射的に物見窓にへばりついていた。

冬惺に背を向け、外の景色に視線を向けようとした――のだが、物見窓が開かない。

「……ごめん、綺理。うちの里、一応隠れ里を気取っているから、山道に入るまでは客に外を見せないようにしているんだ」

「……」

沈黙。変に誤魔化そうとしたせいで、余計にいたたまれない。

綺理はゆっくりと翔波を振り返った。目で助けを求めれば、彼は即座に察してくれる。

ところが、翔波が「それにしても梨英どのたちも」と茶化して流そうとした矢先。

がたん、と音を立てて屋形車が止まった。

「閣下方。ここからは屋形車ではお進みいただけませんので、馬にお乗り換えください」



外からかかった声に、翔波は咳払いをして「降りようか」と言い直す。
かなり間が悪かったとはいえ、これで気まずい空気から解放されることに違いはない。綺理は先に降りた翔波の手を借り、屋形車から明るい日差しのもとにいそいそと出ていった。

そこはもう、秋の気配が深まりつつある山の中だった。
木々の葉はまばらに色づき、行く手に続く細い山道には落ち葉が積もっている。ひんやりとした森の空気が綺理を包み、遠くでかすかに鹿の鳴く声がした。
だが綺理の心には、穏やかな山の景色を眺める余裕はなかった。
目の前の栗毛の馬をじっと見つめ、手のひらに変な汗がにじむのを感じる。
(さ、さっきの今で、冬惺と同じ馬に乗るの……?)
乗り換え地点に用意されていた馬は三頭きり。身分をかさに案内役の馬を奪うわけにはいかないし、綺理が裾長の裳姿での乗馬にあまり慣れていないのも事実だ。駄目押しに、案内役の男が「お二方はいずれ夫婦になられるのですし」と言いたげな目で見ている。
(うう、まだ冬惺の顔も直視できないくらいなのに)
綺理は冬惺から目をそらしつつ、無理やり明るい声を出す。
「わ、私、やっぱり翔波に乗せてもらおうかな。ほら、体重の兼ね合いがあるし!」
がちがちした動きで冬惺に背を向けたそのとき、ぐい、と腰を引き寄せられた。

「うひゃあぁっ!?」

変な声を上げてしまったのと同時に、抱き上げられる。突然のことに身を硬くしたときには、もう綺理の体は馬上にあった。

冬惺がその後ろにまたがり、綺理の体ごしに手綱を取る。彼は案内役に合図をすると、馬の腹を蹴ってさっさと出発してしまった。

「おまえほど軽ければ、どちらに乗っても問題ない。――俺にしておけ」

背後からささやかれ、綺理は真っ赤になった。背中に感じる冬惺の体温と、彼の腕の間に閉じ込められているような錯覚に、鼓動が急激に速まる。

――そういえばさっきの巻文に、『冬惺が積極的に体を寄せてきた場合』『または体を寄せることを要求してきた場合』のことも書いてあった。

（って、なんで覚えているのよ私――っ！　本当にちらっとしか見てないはずなのに！）

刺激の強い文面が脳裏にまざまざと蘇り、顔から火を噴きそうになる。

いたたまれなさに、今すぐ馬から飛び下りて逃げたくなる一方で、体は強張って動かない。一応密着しないように背中を浮かせてはいるが、綺理の全神経は冬惺に向いている。彼がちょっとでも動けばすぐにわかるだろうし、また上ずった声を出してしまいそうだ。

息の詰まる緊張が続く。

それでも冬惺がなにも言わないし動かないので、綺理は横目でそろりと彼をうかがった。

（……）

冬惺は見事にいつも通りの様子で、景色を眺めていた。

どうやら気まずいと思っていたのはこちらだけだったらしい。それに、綺理が過剰反応して変な声を上げてしまったことも、彼は特に引きずっていないようだ。綺理が常日頃からあんな慎みのないことを考えているなどと誤解されていなくて、ほっとする。……いや、綺理も十六の乙女として、恋しい相手からの口づけを夢見たことくらいは一度ならずあるが。

（ていうか、手、出さないんだ……）

自分に魅力や色気が足りないせいか、と悩みかけて、綺理は慌てて妄念を振り払った。なにを期待していたのだ、自分は！　さっきから恥ずかしいことばかり考えすぎだ。それに冬惺に女の子として見てもらえなくても幸せと決めたのだから、欲張るべきではない。

「――それにしても、崖崩れの件は引っかかるな」

ふと冬惺が低い声で言い、綺理は彼を振り仰いだ。彼が平静を装いながらも周囲の木立に注意を向けていたことに、今さらながら気づき、気を引きしめる。

「うん。偶然にしては時期がよすぎるもんね。ひょっとして里の人が……？」

「いや。そう思えないから気になっているんだ」

「え？　それって……また『符合しすぎていて逆に引っかかる』っていうこと？」

二人は小声で話しながら、案内役や翔波の馬に続いて起伏の激しい山道を進んでいく。

「違う。単純に時期がおかしいだろう。崖崩れ発生から報せが届くまでの時間差を考えると、崖崩れが起きたのは使者があの寺院に来たのとほぼ同じ頃だ。初めから街道を封鎖する気だったのなら、あの場で翔波を拉致しようとしたのは道理に合わない」

第一、翔波一人が目的なら、崖崩れという手段で一行ごと鏡作家領に誘導するのは下策だ。

「それじゃ里の人とは別に、私たちを鏡作の里に行かせたがっている誰かがいるってこと？」

「崖崩れが人為的に引き起こされたものだという前提で考えれば、可能性はある。……どうも一筋縄ではいかない気がするな」

だから冬惺は周囲を警戒していたのだろう。綺理は彼に引きかえ自分の能天気ぶりを反省し、向かう先の里へと意識を集中させた。

綺理が前を向いてくれたので、冬惺は内心でほっとした。

この位置関係で綺理にこちらを見上げられると、顔が近くてなんだか落ち着かない。たぶん、姪の千紗以外の者を同じ馬に乗せたことがなくて、慣れていないからだと思う。

だが少しでも気にするそぶりを見せれば、「やっぱり冬惺もそういうことで頭いっぱいなんだ。男の人って最低」と誤解と軽蔑をされそうな気がして、努めて平静を装っていたのだ。

（だいたい、綺理にあそこまで警戒されるとは思わなかった）

気まずくならないよう、あえて意識せずにふるまったのに、まさか悲鳴まで上げられるとは。あれは思いのほか傷ついた。そんなに自分は信用されていなかったのだろうか。

（それとも綺理は、単に男女の間のこと全般を怖がっているのか？　翔波の忠告もそういうことだったとか？……駄目だ。この話題になると、途端に綺理がわからなくなる）

冬惺はすぐ前にいる綺理を、盗み見るような気分で見下ろした。

前に本堂で聞けなかったことを今聞いてしまえばいいと思うのに、やはり言葉が出てこない。最近の自分はおかしい。綺理に対し、思ったことをそのまま言えなくなっている気がする。

（……）

迂闊にため息をつけば吐息が彼女のつむじに触れてしまいそうで、呼吸がしにくい。

冬惺は妙な息苦しさと緊張を感じながら、葉影の落ちる静かな山道を馬に揺られていった。

道の両脇に置かれた、異形の獣がうずくまった形の境界石。

その間をずっと進んでいった先が、鏡作の里だった。

山間にあるためか、かつての大家の里とは思えぬほど小規模な集落だ。

というより、この里に住んでいるのは鏡作邸に仕える人間だけなのだろう。鏡作家の屋敷と

付属の建物のほかは、古い工房や倉庫と思しき施設しか見当たらず、間を畑が埋めている。
その畑に巨大な爪にえぐられたような跡があるのを見つけ、綺理は馬上でぎょっとした。
（あれが例の化け物の爪痕？　相当大きな化け物みたいだけど……でも、変ね。淵妖の仕業にしてはまわりが泥化していないし、この里自体、湿ノ力が強まっている様子がない……？）
違和感に首を傾げながら、綺理たちは古色蒼然たる屋敷の総門をくぐっていった。

『――鏡作家次期当主、翔波さまのご帰還を、里一同、心よりお喜び申し上げます』
一足先に里に戻っていた葉厳は、三人を迎えてそう口上を述べた。
しかし建前上、翔波はあくまで巡察使の任で来た冬惺のお供だ。主人の冬惺を差し置いて、翔波を屋敷の主として母屋に招き入れるのは差し障りがある。
そこで妥協策として、翔波が当主位を継承するまでの間は、彼は綺理たちと同格の『賓客』として扱われることになった。おかげで部屋を遠ざけられずにすんだのは僥倖だ。
滞在中はこちらを自由に使うように、と通された離れの一棟で、三人は早速密談に入った。
「やっぱり変なのよね。来る途中、馬に乗りながら聞いてみたんだけど、この一帯に淵妖が集まっている気配はないの。空気も特に湿ってる感じはしないし」
綺理は茶を飲みながら首を傾げた。卓を囲む冬惺と翔波も、眉をひそめる。

「だが、化け物が現れたという話がすべて狂言とは思えないんだがな……」
「うん。でも僕もさっき屋敷をざっと見てみたけど、特に湿ノ力がたまっているところはなかったんだ。本当に、『継承の獣』ってどういう淵妖なんだ？」
「さてね。淵妖とは限らなかろう」
ごく自然に割り込んできた声に、三人ははっとした。
「真羅！　おまえ、今までどこをほっつき歩いて――」
声のしたほうを振り返り、固まる。
壺。
部屋の隅の小卓に飾られた一抱えもある青磁の壺から、再び真羅の声がした。
「なに、私は私で淵妖の動向を探ってきたところだ。そうしたら――」
壺の口から、子狐姿に化けた真羅がひょこっと頭を出す。
彼は壺のへりによいせと前足をかけ、その片方を挨拶するように上げた。
「この中が意外と快適だったのでね、君たちを待つ間に少々昼寝を」
（つ、壺入り子狐……！）
うっかり壺ごとお持ち帰りしたくなる可愛さに、綺理はわさわさと怪しい手つきをした。綺理が自分の部屋に壺を置いたら、真羅はそこで寝泊まりしてくれたりしないだろうか。
ときめき壺計画を本気で検討してしまった綺理とは対照的に、冬惺は冷静だった。

「子狐。淵妖とは限らない、とはどういうことだ？」
「せっかちだな、少年は。鏡作の里というこの地は、なかなか特殊でね」
子狐真羅は壺に入ったまま歌うように語る。
「鏡の土地は原初の地。地上の生まれし始めの地。――乾ノ神と湿ノ神、出会わぬはずの二神が出会い、交わらぬはずの天と海が交わった場所だ。ゆえにここは理の揺らぐ場所。出会わぬはずのものが出会い、姿なきものが姿を持つ場所なのだよ」
「……僕も初耳なんだけど。姿なきものって？」
「死霊、生き霊、物の精。魂と呼ばれるものたちが、ここでは仮初めの姿を得ることがある。よって一口に化け物といっても、鏡作の里においては淵妖とは限らないのだよ」
境界石を見たかね、と真羅はそろえた前足の上に顎をのせた。
あの境界石はそうした化け物を象ったものであり、この特殊な場の範囲を示すものだという。
「それじゃ『継承の獣』はなにかの悪霊ってこと？　真羅は詳しいこと知ってる？」
綺理の問いに、真羅の翡翠の瞳がふっと翳った。
「――いや。すまないね、私もこれ以上は知らないのだよ。とにかく現時点では退治するほどの淵妖は見当たらない。ただ……化け物騒ぎを早々に解決しないと、万宵がここを狙いそうな予感がしてね。それは心に留めておいてくれたまえ」
彼らしくない歯切れの悪さと、情報の曖昧さに、綺理たちは怪訝に思いながらもうなずく。

「要するに僕が継承の儀をやって、化け物をさっさと封印すれば問題ないってことだろ？」
「だな。謎だらけではあるが、解決法だけははっきりしている。……ところで真羅。おまえはいつまで壺に入っている気だ？」
冬惺がつっこむと、真羅は自分の入っている壺をしばし見下ろした。
「……地上には妖道、つまり空間と空間をつなぐ淵妖の通り道が、大小無数にある。だから妖道の出口がそこにありさえすれば、淵妖は閉ざされた部屋にも入れるのだよ」
「？　そうなんだ」
綺理はまたたいた。なぜいきなりそんな話になるのだ。
「この部屋につながる妖道の出口がちょうど壺の中だったので、こうなったのだがね……」
真羅は前足を伸ばし、壺のくびれを外側からぽむと叩く。
「困ったことに、私のひょうたん水筒がつかえて出られない」
「……」
「……子狐。おまえ、実はただの阿呆だろう」
冬惺は容赦なかった。
「失敬な。不可抗力と言いたまえ。どうせもときた妖道を戻れば出られ――おや、人が来る」
子狐真羅はぴくりと耳を動かすと、壺の中に引っ込んだ。
少しして、渡り廊下の向こうから足音が近づいてきた。どこかで聞いたような、少女の声が

する。

「失礼します。皆さまのお世話係を言いつかってまいりました」

綺理が入室を促すと、扉が開かれる。

瞬間、三人はいっせいに息をのんだ。

くせのない黒髪に伏し目がちな漆黒の瞳の、十七、八歳の少女。端整ながらも人目を引かない、影のあるその面差しは、綺理たち全員が見知っている人間のもので――。

「――奏珠!?　君、生きて……っ」

翔波が席を蹴り、綺理と冬惺をかばう位置に立つ。

だがすばやく守り刀を構えた翔波とは反対に、冬惺は太刀にかけた手を離した。

「いや……別人？　おまえは、正真正銘の女か」

「……ではやはり、以前綺理さまの暗殺を謀った間者というのは、奏珠で間違いないのですね」

綺理たちの反応に、少女は悲しげに目を伏せた。扉を後ろ手に閉めて一礼する。

「改めまして。私は佐鏡の沙良。佐鏡家の長、葉厳の孫で――奏珠の双子の姉です」

翔波は、かつて死闘を繰り広げた相手と瓜二つの少女を前に、呆然と守り刀を納めた。

（そうだ、奏珠は鏡作の里の出……。縁者に会う可能性くらい考えておくべきだった）

奏珠との対決そのものに、恥じることはなかったと思っている。彼は紅楓方の間者という紛れもない敵だったし、己の意思で翔波を殺そうとかかってきた。

翔波は彼を捕縛しようとして、その寸前で谷川に身を投げられた。それだけと言えばそれだけだ。けれど、その件になにも触れなかった葉蔵――奏珠の祖父の姿が脳裏にちらつく。

「……沙良どの。あなたの弟を自害に追い込んだのは……僕だ」

「私のことは沙良とお呼びください、次期当主。件の間者の末路は聞き及んでおります。不届き者の弟がご迷惑をおかけしました」

「……沙良。君は、僕を」

喉に冷たいものを押し込まれたような心地で言葉を絞り出すと、沙良はその続きを正確に察して「お気になさらないでください」とさえぎった。

「次期当主に刃向かったのは奏珠のほうですので、逆恨みをする者などおりません。それにもとよりあの子とは連絡が絶えて久しく、とうに死んだものと考えておりましたから」

冷淡に聞こえるほど落ち着いた受け答え。だが彼女が、おそらくは無意識に奏珠を「あの子」と呼んだとき、翔波はひどくやるせない思いが胸に迫るのを感じた。

言葉を失っていると、背後で綺理の動く気配がした。冷たく汗ばんだ翔波の手を、彼女のあたたかい手がぎゅっと包んでくれる。

昔から綺理は、翔波が不安定になるとこうして手を握ってくれた。そのぬくもりにほっとしながらも、今は自分からすがってはいけない気がして、翔波は手を握り返せぬまま立ち尽くす。

「――それよりも、未来の話をいたしましょう」

翔波がはっと顔を上げると、沙良は仕切りなおすように表情を改めた。

「今後のご予定ですが、翔波さまには明日継承の儀に臨んでいただきます。ですので夕刻の宴のあとはゆっくりお休みになり、心身ともに調子をお整えください」

「夕刻の宴までの間は？」

まだ昼下がりだ。日は十分高い。

冬惺が窓の外を示して問うと、沙良は相変わらず感情を殺したような口調で答えた。

「翔波さまは鏡作の里に明るくないでしょうから、私が里のご案内をすることになっております。よろしければ、冬惺さまと綺理さまもご一緒にどうぞ」

三章　鏡の謎と洞窟の再会

ご一緒にどうぞと言われたのを断って、綺理と冬惺だけで里の探索に行くわけにはいくまい。綺理は外歩きの装束に着替え、三人一緒に里の主要部を見て回ることにした。

「こちらが鏡作家の氏寺、双鏡院です」

まず案内された先は、屋敷の付属の建物群だった。普通寺院は里の中央に鎮座しているものだが、ここの寺院は屋敷の敷地内に納まる小規模のもののようだ。しかも。

「あのー、どうして本堂が二つあるの？」

綺理がどうしても気になって手を挙げると、珍妙な答えが返ってくる。

「小さいほうの本堂は、乾ノ神衆の像を祀るために造ったものです」

「ええと、本堂ってそもそも神衆像を祀る建物のことでしょ？」

「普通の寺院ではそうですね」

言いながら、沙良は小本堂の前を思い切り素通りした。寺院を訪れたときの習いで、神衆像に祈りを捧げるものだと思っていた三人は、のっけから面食らう。

「翔波。この里は理というより、一般常識が揺らいでいる気がするんだが？」

「うん……。僕も里の一部しか知らなかったから、まさかこんなことになっているとは……」

神衆像ではないなら、いったいなにを祀っているというのか。
その疑問はすぐに解けた。
沙良について大本堂に入り、翔波が乾ノ術で光球を生み出すと、それが照らし出される。
「あ……鏡。そっか、だから双鏡院なのね」
堂の奥、本来なら神衆像の安置される場所に一対の鏡台があり、形も大きさも違う二枚の銅鏡が向かい合うように架けられていた。
一枚はなんの変哲もない円鏡だ。身分証の鏡と同じくらいと、かなり小さい。
特徴的なのはもう一枚で、縁以外が極度にへこんでいるため鏡というより半球状の器に見える。近づいてみると、綺理が腕で円を作ったぐらいの大きさがあるのがわかった。
「この形、古代鏡？　すごいな、この反射率！　金属の成分比がどうなっているんだろ。ええと三角縁で背面の文様が火炎輪、天蓋花、雲居を割る光輝。東天に目覚める金烏、中天を渡り西天に燃え落ち、天空の岩屋に眠る……あ、ごめん。これって触っちゃまずかったかい？」
翔波は自前の手袋をはめてべたべた触りまくってから、我に返ったように問うた。
彼の骨董好きを知る綺理と冬惺は驚かなかったが、沙良は微妙に身を引いていた。
「……いえ、心ゆくまでどうぞ。――それよりですね。この大きな鏡は『陽鳥の鏡』と呼ばれ、乾ノ術の極意を示したものだと言われています。この意味がおわかりですか？」
（謎かけ？　乾ノ術の極意って……？）

綺理はさっぱりわからず、昔から頭のよい従兄を仰ぎ見た。冬惺はすぐにぴんときたようだが、「陽鳥の鏡はヒトリの鏡か」と意味不明なつぶやきを漏らすだけで、教えてくれない。

同じくわからないという顔をしている翔波に、冬惺は肩をすくめた。

「翔波、鏡作家のおまえなら解けるはずだ。これは最大の手がかりだぞ」

（翔波なら解ける、ってことが手がかり？　鏡に関する知識があれば解ける謎ってこと？）

綺理の脳裏におぼろげながら答えが浮かびかけたとき、翔波が先んじて声を上げた。

「なんだ、そういうことか！　陽鳥の鏡は、火採りの鏡。この鏡を太陽に向けると、光を集めて火をおこせるのか。乾ノ術も、天上――太陽から受け取った乾ノ力を練って、火を生み出す。この鏡がそのまま、乾ノ術の仕組みを表しているってことだね？」

「正解です。では次に――こちらの小さな鏡がなにかおわかりですか？」

沙良がもう一枚の円鏡のそばに寄った。

綺理は深く考えずに、思いついた答えをそのまま口にする。

「ここは双鏡院でしょ？　で、一枚が太陽の鏡なんだから、対になるもう一枚は月の鏡……って、あれ？　鏡作の里で、月の鏡で、特別に祀るほどの宝物って……まさか」

おそるおそる沙良に視線をやると、彼女はさらりと言った。

「そうですよ。これが月氷澄の鏡です」

「当主の証の!?　神宝をこんなに無防備に飾っておいていいのかい!?」

翔波が叫ぶと、沙良は月氷澄の鏡を鏡台から外した。
「大丈夫です。これはまだ神宝ではありませんから、紛失しても替えがあります」
「いや、意味がわからないんだけど！」
「ご覧になったほうがわかりやすいと思います」
言うや、沙良が月氷澄の鏡をぽいと投げて寄越したので、翔波は仰天して受け止めた。
「沙良！　君、意外と大雑把!?……て、なんだこれ。本当にただの鏡？」
綺理も彼の手元をのぞきこみ、ぽかんとなる。
「裏側になにも文様がない……？　飾り用の偽物ってこと？」
「偽物とは違います。というより、今はどこにも本物がありません」
「ごめん、沙良。そろそろ本気で通訳がほしくなってきた」
翔波がこめかみを押さえると、沙良は言葉を探すようにしばし考えこんだ。
「つまりですね、継承の儀の中で翔波さまが当主の証の紋を刻むことで、初めてこの鏡が神宝になるのです。それまではこの鏡にはなんの力も権威もありません」
（じゃあ継承の儀は、鏡に紋を刻む儀式ってこと？）
情報が増えたような、謎が増えたような。
沙良は疑問符を浮かべる綺理たちから鏡を受け取り、鏡台に戻した。
「ちなみにこの月氷澄の鏡が、乾術師の身分証の原型となったらしいです。月氷澄の鏡のほう

は、乾ノ術とは関係ないのですが。では次の場所に参りますね」
「え、双鏡院はこれで終わり？」
「はい。あとは特に見所がありませんので」
観光案内人のようなことを言って歩き出した沙良に、綺理たち三人は顔を見合わせた。

鏡作の里に残る数々の伝説を聞きながら、ところどころ石段の見え隠れする山道を上る。
やがて木々の向こうに、門のように組み合わさった巨石が見えてきた。それをくぐると、巨石がぽつぽつと立ち並ぶ開けた広場に出る。
「『里』の近くの高台、ときたら、古代の祭祀場ね」
「古代からの陽の祭祀場です。鏡作の里では、今でも太陽を祀ることで乾ノ力を受け取っておりますので」
綺理が独り言のつもりでつぶやくと、すかさず訂正が入った。
さすが鏡作の里。神衆像に祈るという祭祀法が定着して以来、ほかでは完全に廃れてしまった太陽祭祀を、今も続けているらしい。道理で寺院や神衆像の扱いがなおざりだったわけだ。
四人は秋草の原に踏み分けられた細い道を通り、祭祀場の奥に向かった。

沙良が特に解説も謎かけもしないので、綺理たちは彼女から離れて適当に巨石群を見て回る。

……見て回って、すぐに飽きた。

石はただの石で、なにか暗示的なことが彫られているわけでも、秘密の地下道の入り口になっているわけでも、触ったら急に光ったりするわけでもない。

「俺や綺理にも自由に調べさせているという時点で、この場所そのものには秘密がないということだしな。だがそれならそれで、なぜここに案内したんだか……」

「うーん。翔波に継承の儀をやる場所の下見をしてもらうため、とか？」

「ここなら僕も昔来たことがあるんだけどね。今と目線はだいぶ違ったけど」

なんにせよこの場で新しい発見は望めない。それに巨石の陰に入っても、沙良がこちらを見通せる位置にさりげなく移動してくるので、監視されているようで動きにくい。

（実際あの子、私たちの監視役なんだろうなあ。時々こっちを観察して――あ）

「これ、夢雪草じゃない！」

ふと下を見た綺理は、特徴的な白いつぼみに立ち止まった。巨石のそばに生えているその植物は、一見すすきによく似ているが、穂の間から小さな鐘形のつぼみがぽつぽつと出ている。

「珍しい毒草なのか？」

「ううん、これは無毒よ。北部以外では希少種だけど、花が一面に咲くと雪原の夢を見ているように綺麗だっていうので有名で……覚えてない？　このつぼみ」

後ろにいる彼らにも見えるよう半身を返すと、二人は「あ」と声を上げた。
「前に君が、花を見たがっていたやつか。結局見れずじまいだったけど……」
五年前のことだ。綺理は玉造の里の裏山にこの夢雪草が少しだけ生えているのを見つけ、冬惺と翔波を誘って咲くまで通い詰めた。だが当時は夢雪草の正式名称も、花が夕刻から一晩だけ咲くことも知らなかったため、ある朝行ったら花がしぼんでいてがっかりしたのである。
そこで種を集めて、春になったら屋敷の近くに蒔こうと約束して――。
「――ずっと確かめられなかったが、あの種はあそこで芽吹いたんだろうか」
冬惺が遠くを見るように琥珀の瞳を細める。
「根付いているといいね。そうしたらきっと、私たちが玉造の里にいる間に咲くもの」
綺理は微笑して、夢雪草の種を蒔いたときのことを脳裏に思い描いた。

――春の夜だった。
四年前のその日、玉造公影珀が不在の玉造の里に紅楓方の軍勢が迫っているとの報が入り、綺理たちは寝入りばなを起こされて里から逃げることになった。
「姫さま、お早く舟へ！　急がないと空騅将軍の軍勢がやってきてしまいます！」
いつもはおっとりしている桂鈴が、切羽詰まった声で叫ぶのを背中に聞きながら、十二歳の

綺理は冬惺に手を引かれて森を走っていた。

突然の現実に心がついていかぬまま、慣れ親しんだ風景は過ぎていく。追いかけっこをした小道、筍を採った竹林、笹舟を浮かべて競争した小川。三人で遊んだ森が、過ぎていく。

「冬惺、綺理、こっちだ！　神木の裏手の川に舟を用意してあるって、梨英どのが！」

先導する翔波について、近道を走る。何度となく登った神木、三人の秘密の見張り台にしていた大樹の前に来たとき、綺理は神木に引き止められたように転んだ。

「綺理！　大丈夫か？」

冬惺たちが足を止め、綺理の足に絡んだ木の根をはずす。そのとき綺理は、自分の手元に花の種の袋が落ちていることに気づいた。転んだ拍子に懐からこぼれ落ちたのだろう。

（私、これを持ってきてたんだ。明日一緒に蒔く約束だったから……）

――だが約束は果たされないのだ。

にわかに迫ってきた現実感に、綺理は顔を泣きそうに歪めた。

こんなときに種にこだわっているなんて馬鹿みたいだ。きっと冬惺に呆れられる。だけどこんな現実だからこそ、この種は持っていくべきなのかもしれない。――舟に乗ったら最後、二度と玉造の里に帰ってこられないかもしれないのだから、蒔くなら別の場所にすべきだ。

そうしよう、と綺理が手を伸ばしたとき、冬惺が先に種の袋を拾い上げた。

「――約束より半日早くなったが、ここに蒔こう。俺たちの木のそばだ。場所は悪くない」

反論を封じるように袋を引き裂き、一摑みの種を三人で分ける。
「俺たちは必ずここに帰ってくる。必ずだ。そのしるしを残して行こう」
そう言って冬惺は、決意をこめるように力強く種をばら蒔いた。
あのときの彼は、誰よりも自分自身に言い聞かせていたのかもしれない。けれどその言葉は綺理にとって、確かな希望として心に響いた。
(必ず、帰ってくる)
綺理は胸が熱くなるのを感じながら、渡された種を蒔いた。翔波も胸を詰まらせたようにうなずき、それに続く。——さながら、希望の種を蒔くように。

それから数年、瑛国は戦乱期に入り、綺理たち三人は地方を転々と逃げる日々が続いた。以来、初めて玉造の里に戻ったのは、昨年、冬惺が紅楓方の軍勢を破って内乱に終止符を打ったときだ。しかしそのときは短い滞在であったし、季節が季節だったので夢雪草が根付いているかどうかは確認できなかったのである。
(たくさん生えているといいな。そしたら昔みたいに、夕方こっそり屋敷を抜け出して見に行って……。あ、でも鏡作の里での用があんまり長引いたら、花期に間に合わないかも)
これはますます頑張らねば、と綺理が意気込みを新たにしたときだった。

ざわ、と周囲の草が不気味にそよいだ。

「！」

綺理たちはぎくりとして、互いに背中合わせになるように立った。

淵妖が押し寄せてくるときのような、湿った空気の流れは感じない。ただ、なにか異質なものの気配を感じる。身構えている三人に、沙良も怪訝な様子になる。

そして祭祀場を取り巻く木立からいっせいに鳥が飛び立ったとき、それが現れた。

西日の作る巨石の影が、ぐにゃりと歪んで立ち上がる。

（なに……あれ。黒いもやみたいなのが……）

もやは周囲の影を吸うようにして膨張し、そばの巨石に引けをとらないほどの大きさになった。だがその体は泥とは思えない。淵妖とは違い、輪郭が陽炎のように揺れている。

「そんな……っ。『継承の獣』が、日暮れ前に現れるようになったなんて……！」

沙良の叫びに、綺理たちは化け物の正体を知る。

（あれが、『継承の獣』――！）

そう思って見れば、黒いもやの塊はうずくまった四つ足の獣にも見える。二つの赤い目を備えた頭部がこちらを向き、化け物が一気に跳躍する！

「――っ!!」

綺理たちはとっさに、巨石の陰に飛び込んだ。

盾となった巨石に化け物がぶつかり、祭祀場が鳴動する。
「くそっ……。天にありては万物を照らす御光、地上に来たりて万有を食む牙となれ！」
翔波が巨石の陰から飛び出しざま、火球を放つ。
火球は狙いあやまたず化け物の頭部に直撃した。――だが。
（嘘、無傷!?）
化け物は驚いたようにわずかに動きを止めただけで、再び跳躍してくる。いくら日没が近く、乾ノ術の効力が落ちているとはいえ、この手ごたえのなさは不気味だ。
三人がよけた直後、轟音と共に化け物が降り立ち、今までいた地面をごっそりとえぐった。
「翔波さま、『継承の獣』に乾ノ術は効きません！」
「厄介な！　ならばこれでどうだ！」
冬惺が腰の太刀を抜き放ち、化け物に斬りつける。斬られた前足は黒い花びらが散るようにぱっと散じたが、少しするとまたまわりの影が集まって元通りになった。
「屋敷へお逃げください！　あれを倒すのは無理です！」
「――みたいだね。でも屋敷へと言われても……」
沙良のいる位置からならともかく、三人は化け物のそばを通らなければ里に向かえない。それに逃げ場のない細い一本道を全員で下っていけば、すぐ化け物に追いつかれるのが落ちだ。
逡巡するうちに化け物が綺理たちに向かってくる。

祭祀場の奥へ追い込まれ、まずいと冷や汗が流れたとき、綺理の目に古い石段が映った。
「こっち！　裏手に下りられる道があるわ！」
「……そちらへ行くしかなさそうだな。最悪、境界石の外まで逃げ切るか。――翔波！　俺がこいつを斬ったら、なにか光系の乾ノ術を叩き込め！」
言下に迫ってきた化け物の前足を、冬惺が太刀で両断する。その動きにぴたりと呼吸を合わせて、翔波が光の矢を放つ呪文を唱えた。
「天の座より万物を射る弓取り、輝ける征矢で暗がりを貫け！」
閃光がつかの間、周囲の影を消し、化け物の前足の再生が遅れる。
その隙に綺理たちは古道を駆け下り、祭祀場の裏手の森へと逃げていった。

「も……もう、追ってきてない、よね。なんとか、まけた、かな」
綺理は洞窟の壁に手をついて呼吸を整えると、そろりと外をうかがった。
夕日に染まった森は静かで、化け物の気配はない。それに、もしまた化け物がやってきても、あの巨体ではこの洞窟には入ってこられないはずだ。たぶん。
「さすがに境界石まで逃げ切るというのは無謀だったな。祭祀場からかなり走ったのに、まだ

鏡作の境界内か。途中であの化け物が俺たちを追うのをやめてくれて、助かった」

冬惺の台詞に、翔波は汗で額にはりついた前髪をかき上げながら眉をくもらせる。

「でも化け物が僕らから沙良に標的を変えたんだとしたら……大丈夫かな、沙良は」

「心配は無用だろう。俺たちと違ってあいつには土地鑑がある。俺たちがこれだけ化け物を引き付けていたのに、逃げられなかったとしたら相当間抜けだ」

「間抜けって……。君、世間一般の女の子が綺理ほど身軽じゃないってわかっているかい？」

非難がましく言った翔波に、冬惺が目をしばたたかせた。

「あいつが世間一般の小娘に見えていたのなら、おまえも相当間抜けだな。あの沙良という娘、身の軽さだけならおまえより上だぞ。紺装束の使者の一人も、あいつだっただろう」

「え！　あの使者が!?」

綺理と翔波は異口同音に叫んだ。

「化け物が現れたあとの沙良の身のこなしを見れば、すぐに気づくと思ったが」

そう言われても、化け物と逃走経路確保に気を取られて沙良の動きなど見た覚えがない。

冬惺に彼女の動きを見る余裕があったのは、逃げ道探しを綺理に任せていればこそだろうが、ああした場面での状況観察役を自任している綺理としてはけっこう悔しい。

「沙良については心配ない。屋敷のほうも、あいつがそこに逃げろと言ったからには安全なはずだ。――あちらはそれでいいとして、わかったことを整理しよう」

冬惺が岩壁にもたれて、腕を組む。
「まずあの『継承の獣』という化け物は、絶対に淵妖じゃない」
これには異論の余地はない。綺理と翔波はうなずき、補足する。
「だね。念のため僕の右目で見てみたけど、湿ノ力が一切見えなかったし」
「で、目が赤くて乾ノ術が効かないのよね。冬惺の太刀では斬れたけど、すぐ再生しちゃう」
「真羅の話からすればあれの正体はなにかの魂のはずだが、性質は影と考えていいだろう。光には多少ひるむし、影がないと再生はしない」
冬惺は思案げに顎に手をやり、続けた。
「それともう一つ、重要な手がかりがあったな。双鏡院で沙良は、『当主の証の紋を刻むまでは、月氷澄の鏡にはなんの力も権威もない』と言った。裏を返せば、継承の儀を行ったあとの月氷澄の鏡には、なんらかの力があるということだ」
当主が受け継ぐと力を得る神宝。当主にしか使えない秘術。当主にしか封印できない化け物。
これらをつなぎ合わせると、おのずと一つの答えが浮かび上がってくる。
「化け物を封じる力は、月氷澄の鏡にある。だから化け物を封じる秘術が使えるのは当主だけだし、当主は鏡を受け継ぐだけでそれが使えるようになる。……これでつじつまが合うな」
彼がそうまとめると、全員口をつぐんだ。現時点でこれ以上言えることはない。
三人は手ごろな石に腰を下ろし、しばし黙って休憩をとる。

——と。

「……ねえ。今なにか、物音がしなかった？」

綺理はかすかな物音を聞きとがめて、顔を上げた。

三人は顔を見合わせ、誰からともなく洞窟の奥へ目を向ける。

「……したね。この奥から」

「化け物の気配とは違うようだが、なにかいるな」

どこまで続くとも知れない闇の中から、また物音がした。綺理はおそるおそる言う。

「そういえば沙良が話してたよね。洞窟のこと……」

祭祀場への道すがら聞いた言い伝えの一つを、翔波が一字一句違わず繰り返す。

「『鏡作の地には洞窟が数多くあり、その中には死霊の住む常夜の国へ通ずる岩屋もあるといいます。普段は岩戸によって閉ざされているので死霊が出てくることはありませんが、時々その岩戸が開くこともあるので、洞窟を見つけても奥へは入らないようにお願いします』」

「……その洞窟って、ひょっとしてここ？」

綺理と翔波は半笑いを浮かべた。が、冬惺はその思い付きをばっさりと切り捨てる。

「まさか。ここにいるのは生きた人間だ。よく見ればそこかしこに人の痕跡がある」

指さされて、綺理は地面を見下ろした。注意深く観察すれば、自分たちのものではない足跡や、果物の皮、まだ新しい灰などが見つかる。

（それにこの辺、かすかに蛇よけの薬の臭いがする？　私が作るのと同じ……？）

もっとかがんで確かめようとしたとき、頭上で冬惺が太刀に手をかける気配がした。慌てて身を起こすと、冬惺と翔波は既に臨戦態勢に入っていた。

綺理は二人の後ろに控え、じっと目をこらす。洞窟は途中で折れ曲がっていて、奥まで見通せない。――その曲がり角の向こうから、白い人影が静かに現れた。

（え？　沙良？）

白いのは、彼女のはいている足首丈の裳と、袖口からのぞく包帯だった。祭祀場で別れたあと、とうに屋敷に戻ったものと思っていた少女が、呆然とこちらを見つめている。

「なぜ……あなたがたがここに？」

「あなたこそ、どうしてこっちに逃げてきて――」

目をぱちくりさせて応じたとき、綺理は自分の中で違和感が急速に膨れあがるのを感じた。違う。

装束がさっきと違う。声が微妙に違う。浮かべる表情が違う。

（――沙良じゃない！）

「ここになにをしにきたんです、鏡作の翔波！」

少女が憎々しげに吠え、左手でつぶてを鋭く投げ放った。三連続のつぶてをすべて冬惺の太刀に弾き落とされると、少女、否、少年は女装束の袖口から隠し小刀を抜いた。負傷している

のか、右腕をかばいながら左手で小刀を構える。
対する翔波は、少年の名を愕然と叫んだ。
「奏珠！　君こそなぜここに！――死んだはずじゃなかったのか!?」
「常夜の国から帰ってきましたと言いたいところですが、残念ながら私は死霊ではありませんよ。武器を取って裏切り者を殺せる、生身の体がある！」
（……っ）
綺理は唇をかんだ。紅楓方の間者がここに潜伏していた。それが意味することは。
（やっぱり鏡作の里は、紅楓方に通じていたってこと!?）
奏珠が漆黒の瞳を燃え立たせ、掌中で小刀を一回転させる。
「恥を知らぬなら冬惺公の背に隠れていなさい、鏡作の翔波。――いざ、参ります！」
「下がってください閣下！　天にありては万物を照らす御光――」
翔波が強引に冬惺の前に出て、乾ノ術を放とうとした。
まさに、そのときだった。
「怪我人がなにやってんだ、馬鹿たれ――――っ!!」
「――っ!?」

怒声と共に飛んできた木の棒が、奏珠の後頭部を直撃した。
奏珠がよろめいて頭を抱え、翔波がぽかんと詠唱を止める。その場の全員が啞然として固まる中、怒声を発した人物が洞窟の奥から歩んできた。
木の棒――すりこぎを拾って光の中へ出てきたその人物に、綺理たちは息をのむ。
「ろ、老師……っ」
奏珠の上ずった呼びかけに似合わず、その人物は若い。少なくとも見た目だけは、二十代半ばの洒落者の青年だ。肩のあたりまで伸びた髪は鮮やかな真紅で、瞳は水色。派手な色彩に加え、舞台にでも立てば女性たちから黄色い声が上がりそうな、華やかな顔立ちをしている。
「奏珠。オレを老師と呼ぶんじゃねえって何回言わせんだ。それで、こいつらは……お？」
水色の瞳が綺理たちを映して、ぱっと喜色に染まる。
「綺理じゃねえか！　久しぶりだな。こんな美人さんに成長して、見違えるかと思ったぜ！　ということはそっちは冬惺と翔波か。いやー、おまえら可愛げがなくなったなあ！」
「な、なな、なんで……」
綺理は口をぱくぱくさせた。あからさまにげんなりしている冬惺と翔波の後ろから、びしっと相手を指さす。
「なんで師匠がいるんですか――っ！」
彼女は綺理の薬師の師匠にして、実年齢不詳の男装の麗人、悠蓮だった。

薬師組合の陰の実力者、悠蓮老師を一言で表すとしたら、誰もが口をそろえて言うだろう。

「変人」、と。

放浪癖あり。男装癖あり。というより男装して女性にもてるのが趣味で、常態が男装。伊達や酔狂で世間を渡り歩き、すべて自分基準で生きているため相手の身分もお構いなし。

要するに彼女は、究極の自由人なのであった。

「いやー、怪我人拾ったから手当てしてみたら、偶然そいつが紅楓方の間者だったんだよ。でもオレは別に白桜方でも紅楓方でもねえから、まあいっかと思って」

「はあ……。相変わらずですね、師匠……」

悠蓮のとりなしで双方武器をおさめた綺理たちは、洞窟の奥で話し合いの席についていた。篝火に照らされた洞窟内には、薬箱や調剤器具、包帯や採取したばかりの薬草、それに二人分の生活用具と寝床があるのが見える。

――悠蓮が奏珠を見つけたとき、彼は半死半生で谷川の岸に打ち上げられていたらしい。

悠蓮は一目で彼を訳ありの怪我人と察し、舟で移動しながら密かに治療を施したが、さすがに彼が綺理の命を狙った間者だと知ったときは驚いたという。奏珠にしてみても、彼が任務に失敗したきっかけの一つは悠蓮がもたらした情報だったのだから、奇妙な縁だ。

「奏珠が今でもオレの愛弟子の命を狙ってるってえなら、オレとしてもいろいろ考えたんだがよ、そんなこともねえみてえだからなー」

「……あの、悠蓮どの。僕は出会いがしらに殺されかけたんですけど」

「だからオレが責任持って止めたんじゃねえか。――真面目な話、おまえらここは一時休戦といかねえか？」

不意に悠蓮の声音が変わった。水色の瞳がすっと真剣になり、綺理たち三人を順繰りに見る。

「……一時休戦？」

「お互いに手出しなしってことだ。少なくとも奏珠の怪我が完治するまでは、こいつはオレの患者だ。薬師の誇りにかけて、戦わせるわけにも引き渡すわけにもいかねえんだよ」

悠蓮は口を挟みかけた奏珠を制し、きっぱりと断言した。

（一時休戦……）

三人は顔を見合わせる。「薬師の誇りにかけて」と言ったからには、悠蓮は決してゆずらないだろう。そして悠蓮と争ってまでこの場で奏珠を捕らえる必要があるかといえば、必ずしもそうではない。

「……結論を出す前にいくつか確認したい。なぜおまえたちは鏡作の里に来た？」

「おー、そうそう。奏珠がここの里の出だっていうから道案内させたんだよ。この辺は貴重な薬種が採れるって噂があるから昔から来てみたかったんだが、なにしろ鏡作の里だろ？　表か

ら訪ねていくと門前払い食うんだよ。だからこいつに無理やり案内させて、裏からこそっと」

悠蓮は悪びれずにからからと笑った。その後ろから、奏珠が目をすがめてこちらを見る。

「聞きたいことははっきり聞いたらどうですか？　里の者は私たちがここにいることを知りませんよ。ですから私をかくまったとして里を咎めるのはお門違いです」

「ならばなぜおまえは、先ほど自主的に洞窟の奥から出てきた？　里の者が来たと思ったからこそ、のこのこ姿を現したのではないのか？」

冬惺の切り返しに、奏珠はぐっと詰まった。

「……否定はしません。もし里の者が来たら、身内に私の生存を伝えてすぐにここを立ち去るつもりでした。ですが里にかくまってもらおうとも、かくまってもらえるとも思っていない」

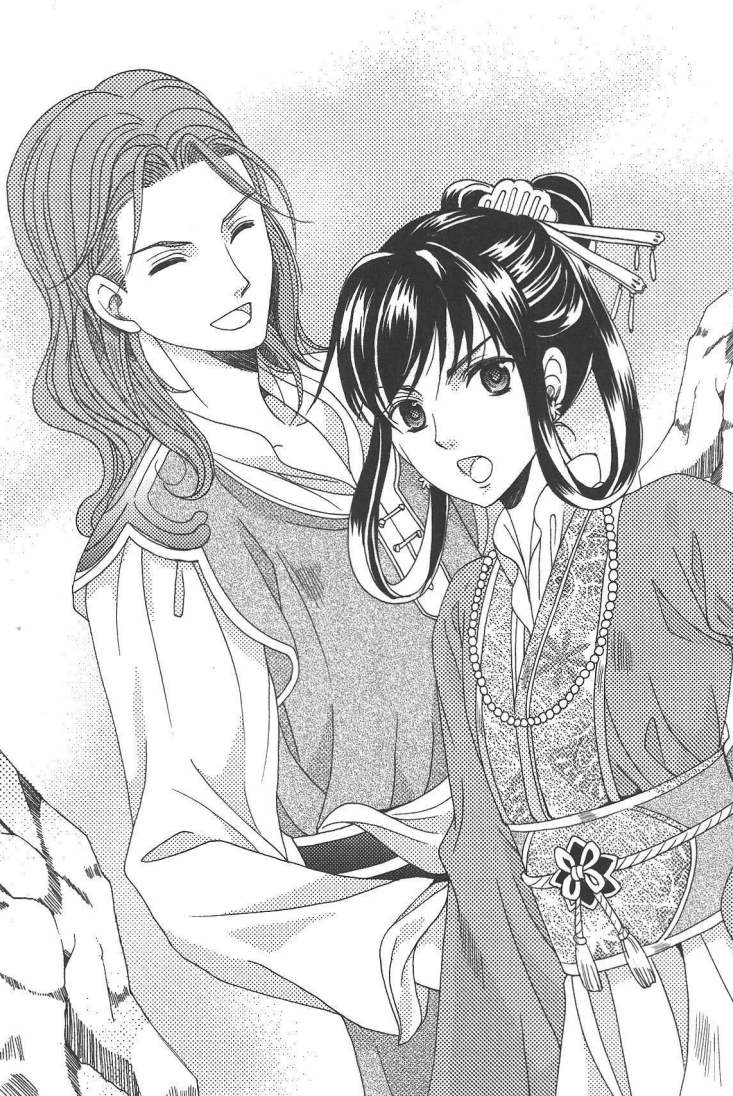
「あ、それは本当だぜ？　こいつ、二言目には里に迷惑かけたくないってうるさくてよ。ここにいるのがばれたらすぐ引き払うっつって……まさか二日目でおまえらに見つかるとはなー」

聞けば、悠蓮たちがここにやってきたのは昨日の暮れ方だという。『継承の獣』のことや里の状況を知っている様子はなく、里が一切関与していないというのは本当のようだ。

そもそも奏珠が里と通じていたなら、いくら頭に血が上って冷静な判断ができていなかったとはいえ、いきなり翔波を殺しにかかったりはしないだろう。

「それじゃ君が女装しているのも、別に双子の姉のふりをするためじゃなくて……」

翔波の言葉に、ひらひらした裳装束姿の奏珠に視線が集中する。



悠蓮が胸を張り、晴れやかに答えた。
「――趣味だ！」
「誤解を招く言い方をしないでください！　これは決して私の趣味ではなく――」
かっと赤くなった奏珠に、翔波が生あたたかいまなざしを向ける。
「ああ、うん。いいよ、言い訳しなくて。そういう趣味の人だってもう知っているから」
主語をわざと省いたのは、翔波なりの意趣返しだろう。
正しくは「悠蓮が、女顔の少年に女装させる趣味のある人だと知っている」なのだが、奏珠は自分が完全に誤解されたと思ったようで、衝撃を受けていた。
任務中の奏珠はまったく隙がなかったが、地は意外と普通の少年なのかもしれない。あるいはこれも、傍若無人な悠蓮に振り回され続けた影響か。
「……っ、わ、私が前に女装していたのは、純粋に任務のためで……っ」
「今は任務中ではないから、純粋に趣味のためか。わかった。もうなにも言うな、近寄るな」
冬惺がしれっと追い討ちをかけた。
元凶の悠蓮はといえば、絶句している奏珠を無視して話を戻す。
「で、確認したいことはそれで終わりか？　おまえらが一時休戦を受け入れるなら、その間はオレも奏珠に休戦を徹底させる。なんならオレの首をかけてもいいぜ。どうだ？」
綺理たちは再び顔を見合わせた。

もし奏珠をかくまっていたのが鏡作の里であれば、その証拠を押さえるという意味で奏珠の身柄を確保する必要があった。だがそうでないなら、今の時点で奏珠を捕らえて里に連れ帰っても、問題がややこしくなるだけである。

……それに沙良の顔が脳裏に浮かんでしまって、どうにも戦いにくい。

三人は互いにうなずき合い、翔波が代表して答えた。

「――わかった。僕たちが里にいる間は休戦にする。奏珠もそれでいいね？」

――綺理たちが里に滞在している間、間者の身柄は悠蓮の監視下に置く。

そうした建前のもとに一時休戦は成り、綺理たちは里へ戻ることにした。

日は既に沈み、残照も薄れつつあったが、ひとまず化け物はいなくなったようだ。遠くから、里の者が綺理たちを捜す声が聞こえてくる。

「困ったなあ……」

捜索隊のたいまつを目指して歩きながら、綺理は翔波が重いため息をつくのを聞いた。

なにが、と相槌を打つと、彼は苦笑いを浮かべた。

「沙良と会っちゃったあとだからかな。……困ったことにさ、嬉しかったんだよね。奏珠が生きているってわかったときと、今はまだ戦わなくていいんだって思ったとき」

影が凝ったような巨大な四つ足の化け物は、森の奥へと駆けていた。
前を行く小さな獣を捕まえるように、風をうならせて前足を振り下ろす。
獣――翡翠の瞳の子狐がひらりとかわすと、化け物の爪は立ち木を裂いて地面をえぐった。
（ここまで引き付ければよいか。いくらなんでも、キリたちはもう屋敷の結界の中に入っただろうし……っと！）
子狐真羅は大きく跳躍すると、淡い浅葱色の光を全身にまとわせた。子狐から童子へ、瞬時に姿を変え、宙で一回転して境界石の上に降り立つ。
化け物は境界石の前で足を止めた。驚いて癇癪が収まった子供のように、それ以上暴れることなく赤い目で不思議そうに真羅をうかがう。
そんな化け物の様子に、真羅は翡翠の瞳を冷たく細めた。
「ふむ。この私を知らないとは、やはり湿ノ神の眷属ではないのだね。――君は何者かね？」
威圧的な誰何に、化け物の輪郭が怖じ気づいたように揺らめく。そして化け物は、花びらが散るように姿を消していきながら、むせび泣くような声を漏らした。
〈……ビシイ。寂……シイ。寂シイ……〉

四章　鏡の継承の夜に

綺理たちが屋敷に戻ったときには、日はすっかり暮れていた。

沙良を始め屋敷の者たちは三人の無事に安堵すると、「今宵はお疲れでしょうから」と夕刻の宴は取りやめにしてくれた。おかげで湯浴みをしたあとは、離れの棟で三人だけで気楽な夕食をとり、すぐに休める運びとなった。

そして客室に引き上げ、沙良の手を借りて夜着に着替えているときだった。

「……綺理さま、なにか？」

ふと沙良が小首を傾げたので、綺理は自分が彼女をじろじろ見ていたことに気づいて慌てた。

ほかの侍女が下がり沙良と二人だけになったので、つい奏珠のことを考えていたのだ。

（奏珠が自分が生きていることを伝えたかった身内って、たぶん沙良よね。できれば教えてあげたいけど……でも、奏珠とは休戦期間が終わったらまた敵同士になるわけだし……）

なんにせよ綺理の独断で明かせることではない。

「ええと、沙良はあのあと一人で大丈夫だったのかなって、気になってて。……あの、私はこれでも薬師なの。もし怪我とかしていたら、傷薬くらいなら持ち合わせがあるわよ？」

半分は誤魔化すため、もう半分は本気で言うと、沙良は虚を衝かれたように目を瞠った。
「……いえ、お気遣いには及びません。今夜は幸い、里への被害もありませんでしたし」
「そっか、よかった」
いくら身軽だから心配ないと言われても、すり傷くらいは作っていたのではないかと気になっていたのだ。ほっとして微笑むと、沙良がためらいがちに口を開く。
「あの……綺理さまは、私がおそばにいてお嫌ではないのですか？」
「え、どうして？　沙良が監視役だから？」
綺理は素で答えてから、さすがに直球すぎて嫌味になってしまったかと反省した。だが沙良はますます不思議そうな顔で言葉を継ぐ。
「それもありますが、それ以前に私の顔が気に障っておられるのでは、と……」
「あ、ごめんなさい。不躾に見ちゃって悪かった？」
「……」
なんだか会話がかみ合っていない。沙良がこほんと咳払いをする。
「その、綺理さまには、ご自身の命を狙った間者の姉に対し、わだかまりがあるのではと」
「ああ……そういうこと。それは思ったことないなあ」
そもそも綺理は、奏珠に対してもいまひとつ恨みの念が薄い。あれこれ被害に遭ったことは確かなのだが、裏で糸を引いていたのは奏珠の命令主や、大淵妖の幻招だったからだろう。

彼が翔波の命を狙ったことに対する怒りはあったが、翔波のあのつぶやきを聞いてしまったあとだと、その怒りさえも続かない気がする。――まさしく『困ったことに』。

「わだかまりがあるとしたら沙良のほうだと思っていたんだけど……。ええと、せっかく歳も近いんだし、仲良くできないかなっていうのは駄目かな？」

夜着を着終えた綺理が上目遣いに言うと、沙良は変な物を食べたような顔になった。

「――今夜はもう遅いですので、お早くお休みなさいませ」

答える代わりに慇懃に一礼した彼女に、綺理は拒絶されてしまったかとしゅんとなる。

けれど客室を出る間際、沙良はこちらを振り返り、なんとも名状しがたい微笑みを浮かべた。

「……また、明日になったら」

沙良の言葉の意味がわかったのは、夜半過ぎの頃だった。

（！）

複数の人間の立ち歩く音に、綺理の意識は急激に覚醒した。

はね起きて耳を澄ませる。争うような物音はしないが、一定数の人間がこの離れの建物に確実に出入りしているのが聞こえる。

（なに……？　あっちは、翔波の部屋のほう？）

綺理は寝台の脇に置いておいた自分の剣に手を伸ばした。

四年前のことが脳裏をかすめ、心臓がどくどくと早鐘を打つ。玉造の里から逃げたあの夜も、こんな風に人の立ち騒ぐ音で目を覚ましたのだ。

そっと寝台からすべり出て、扉に耳を押し当てる。

ややあって、何人かの人間が廊下を歩いてくるのが聞こえてきた。

「……継承の儀は明日だと聞いていたけど？　夜明け前に始めるのは反則じゃないのかい？」

（！　翔波！）

翔波の声に続いて、葉厳の声がする。

「時法の上では既に日付は変わっております。これは秘儀ですから、どうぞご理解ください」

「つまり閣下たちが起きたときには、もう継承の儀が終わっているという寸法？」

「はい。騙し討ちのような真似になりましたこと、翔波さまにはお詫び申し上げます」

彼らは綺理の部屋の前を通り過ぎ、母屋のほうへ向かっていった。足音が遠ざかる。

静寂に取り残された綺理は、ゆっくり立ち上がりながら沙良の微笑を思い出していた。

（『明日になったら』……。私が朝起きる頃にはすべて終わっているから、その後なら監視対象と仲良くしても大丈夫になるって、そういうこと？）

だが里の者の目論見に反して、綺理は今目を覚ました。

そして綺理と冬惺は、翔波の身を案じたからこそ、こうして里に来たのである。
（冬惺に知らせて、様子を見に行かなきゃ）
なにも秘儀の秘密を暴こうというのではない。翔波の安全を確かめたいだけだ。
綺理は決断すると、夜着の上から急いで細袴と上衣を重ねた。外に出る支度を調え、帯剣して静かに部屋の外に出る。
すると廊下には既に、同じく準備を調えた冬惺の姿があった。
「！　綺理、おまえも起きていたか」
「うん。冬惺も、さっきの聞いた？」
鉢合わせになった二人は目を瞠り、すぐに小声で状況を確認し合う。
「継承の儀か……。なんにせよ、こんなやり方で翔波を連れ出すのは気に入らないな」
二人は互いにうなずくと、足音をひそめて翔波たちの行方を追っていった。

前庭に出た翔波を迎えたのは、白い人だかりだった。
篝火の照らす中、槍を手にした白装束の里人が集い、現れた翔波に無言で礼を取る。ある種異様な光景に翔波が戸惑っていると、人垣の中から沙良が進み出てきた。
髪を結い上げ、正装をした沙良が、装束の袖をふわりと翻して一礼する。

「翔波さま。僭越ながらこの私が、試練の補佐役を務めさせていただきます」
さらりと聞き捨てならないことを言われた。
「ちょっと待ってくれ。……『試練』？」
「はい。継承の儀は、当主継承のための試練を受けていただく儀式なのです」
沙良は鷹揚に答えると、さらに聞き捨てならないことを言う。
「ですがご安心ください。本当に当主にふさわしい方であれば、無事にすみますから」
（無事にすまない場合もあるって言ってないかい!?）
翔波は内心で絶叫したが、問いただそうとした矢先に横から杯を突き出された。
「翔波さま。祭祀場へご案内する前に、固めの杯の儀を」
思わず杯を受け取ると、葉蔵がすかさず酒を注ぐ。
見れば、沙良もまわりの白装束の者たちも、いつの間にか杯を手にしていた。瓶子を抱えた侍女が酒を注いで回っている。――ただ、一つ気になるのは。
「あの、葉蔵どの。なぜ私だけ違う酒なんですか？」
「しきたりです。次期当主には、代々この伝来の秘酒を召し上がっていただく決まりなのです。古代酒なので風味が独特ですが、そう強い酒ではないので一息にお飲みください」
しきたりと言われたら引き下がるしかないが、妙に薬臭い酒に疑惑が頭をもたげる。
（……これ、怪しい薬が盛ってあったりとかしないよね）

自分の里の者を疑うのもどうかと思うが、実際に一度薬を嗅がされかけた身だ。こんなとき綺理がいれば頼りになるのに、と思う間に全員に酒が行きわたり、葉厳が厳かに杯を掲げた。

「――鏡の継承の夜に祝いを、鏡の秘密を漏らす者に呪いを」

里人たちが翔波を囲んで唱和する。飲んだふりでは誤魔化せない雰囲気に、翔波はままよ、と覚悟を決めた。みなと共に、酒杯をぐいとあおる。

薬酒と紛うほど風味のきつい酒が、翔波の喉を灼き――、

異変は、それからしばらくして起こった。

綺理と冬惺が異変に気づいたのは、篝火の明かりを頼りに前庭へ向かっていたときだった。

突如、闇の中から聞こえてきた声に、二人は足を止めた。

物音。怒号。悲鳴。――助けを呼ぶ声。

「冬惺、今の！」

前庭からではない。双鏡院のほうからだ。双鏡院でなにかが起こっている！

冬惺がちっと舌打ちし、二人は声のほうへ走り出した。暗い渡り廊下を駆け抜けて、回廊に囲まれた一角を目指す。近づくうちに行く手から剣戟の音がする。

「あそこか！」

二人の視線の先、双鏡院の門前では、門衛の里人と黒衣の襲撃者が激しく争っていた。
襲撃者は四人。どの者も顔を隠し、統制のとれた動きで里人を襲っている。
彼らの足元には負傷してうめく里人が転がり、果敢に応戦する者たちも劣勢に追い込まれていた。里人の最後の一人が蹴倒され、その頭上に襲撃者が刀を振りかぶる。
そこに、冬惺が太刀を抜きながら飛び込んだ。
鋭い金属音。刀を弾き返された襲撃者が、愕然としたように飛びのく。
「新手か！」
襲撃者たちが叫んだ。彼らは里人にとどめを刺そうとした手を止め、冬惺に斬りかかる。
遅れて駆けつけた綺理のもとにも、襲撃者の一人が向かってきた。
「……っ」
綺理はとっさに腰の剣を抜き、初太刀を弾いて軌道をそらす。
相手は意外な手ごたえに驚いたようだったが、すぐに刀を返して斬りかかってきた。
速い。――が、冬惺よりはずっと遅い。ついていけない速さではない！
綺理は相手の動きに集中し、白刃が閃くたびに剣で受け流す。
五合、六合と刃を合わせるうちに、相手の呼吸が乱れる。その隙に突きの一手を繰り出すと、相手は大きく跳びすさってかわした。
（冬惺は――？）

周囲に目をやれば、冬惺は三人を相手取りながら完全に押していた。
ちょうど冬惺が一人の刀を弾き飛ばし、その腕を薙いだところだ。血しぶきが上がる。襲撃者たちは劣勢を悟ったか、いっせいに間合いを取った。
綺理たちと襲撃者たちが睨み合い、一呼吸の静寂が生まれる。
直後、高い指笛の音が夜気を震わせた。
「！」
綺理と冬惺ははっと身構えた。襲撃者たちの背後、回廊の屋根の上に、いつの間にか五人目の人影がある。柿渋の衣に身を包み、大ぶりの袋を背負って、被き布を目深にかぶった男だ。
指笛の主のその男が合図をすると、襲撃者たちはすぐさま退却をはじめた。男のほうも回廊の上からひらりと飛び降り、すばやく身を翻す。
「逃がすか！」
冬惺が地を蹴り、柿渋の衣の男を追う。
だがそのとき、綺理はなにかが暗い空を切って降りてくるのを見た。
「よけて！」
警告と、冬惺がぎくりと足を止めたのと、どちらが早かったか。一瞬後、矢のように降下してきた影が、彼の眼前の空間を切り裂いた。
（鳥!?）

鷹と思しき影はばさりと舞い上がり、柿渋の衣の男のほうへ飛んでいく。
綺理たちが最後に見たのは、鷹が彼の手に舞い降り、共に暗がりへ消えてゆく光景だった。
（鷹使いの、男――）
襲撃者たちの気配が遠ざかり、追跡を断念した冬惺が太刀を鞘に納める。
「あいつら、何者だ？　なにかを盗み出していたようだが……それに、夜目の利く鷹……？」
綺理も剣を納めると、倒れている里人たちに駆け寄った。幸い深手を負っている者はいない。
「綺理さまに、冬惺さま？　なぜ、ここに……？」
「目が覚めたら翔波がいなくなっていたから、捜してたの。そうしたらこっちから声がしたから……。いったいなにがあったの？　さっきの人たちは？」
止血帯を縛りながら問うたが、彼らも綺理たち以上のことはわからないようだ。なんの前触れもなく襲撃を受け、あの鷹を連れた男に双鏡院に侵入されたらしい。
「かたじけない。お二方がいらっしゃらなければ、今頃我々は……」
「あ、ありがとうございました、冬惺さま。先ほどは、かばっていただいて……」
「ああ。これで俺が奴らを取り逃がさなければ、存分に恩に着ろと堂々と言えたんだがな。それより歩ける者がいるなら、屋敷から人を呼んでこい。――綺理、俺たちは行くぞ」
手分けして応急処置を終えると、冬惺は綺理の腕を引いた。緊迫した声でささやく。
「翔波が心配だ。奴らの目的が双鏡院の何であったかは不明だが、継承の儀とまったく関係が

ないとは思えない。翔波たちが狙われる可能性がある」
「！　それじゃ急がないと！　もし翔波たちが祭祀場に向かっちゃったら――」
みなまで言わず、綺理は冬惺を先導して走り出した。
あの襲撃者たちが翔波たちを襲うとしたら、祭祀場か、祭祀場へ向かう道中に違いない。彼らが出立する前に警告しなければ、間に合わないかもしれない。
（朝日が昇るまでは翔波は乾ノ術を使えないし……。お願い、まだここにいて！）
そう祈りながら渡り廊下を逆走し、再び前庭を目指す。
――だがほどなくして、綺理たちはその認識が甘かったことを知った。
建物の角を曲がろうとしたとき、向こうからひどく焦った様子の少年が飛び出してきたのだ。
「翔波!?　いったいどうしたの！」
「綺理！　よかった、今呼びに行こうとして――ああ、とにかくすぐ来てくれ！」
翔波は青い顔で綺理の手首をつかみ、そのまま前庭へ駆け戻ろうとする。ただならぬ様子と、手首を引く力の強さに、綺理は慌てて彼に合わせて足を動かす。
「翔波、なにがあった？　俺ではなく綺理を呼びにきたということは、まさか――」
三人で走りながら冬惺が問うと、翔波は切羽詰まった声で答えた。
「儀式の酒に毒が入っていたんだ！　いっせいに酒を飲んだら、しばらくして皆ばたばた倒れて苦しみだして……っ。――僕以外、全員同じ酒を飲んだから！」

前庭は凄惨なありさまだった。

二十数人の白装束の里人がことごとく地面に転がり、脂汗を浮かべてもがいている。

その中に沙良や葉厳といった見知った者の姿を見つけ、綺理はぞっと立ちすくんだ。しかし冬惺と翔波が頼るまなざしで自分を見ているのを意識し、腹をくくる。

（これは毒。毒は私の専門分野よ！）

綺理は手袋をはめ、手近な一人のもとに膝をついて急いで症状を確認した。

（手足のしびれに、汗、熱、発疹。喉の奥はただれてない。脈が速いのと、瞳孔拡散と――）

症状に加えて、この速効性。すぐに二十数種類の毒の名が頭に浮かび、そのうち口にすればすぐわかる刺激性のものや苦味の強いものを除外する。

（まだ特定はできない。けど、少なくとも吐かせて危険な毒じゃないわ）

「――水をたくさんくんできて！　水を飲ませて吐かせる！　できるだけ人手を集めて清潔な布を用意して、あとお湯も沸かしてもらって！」

冬惺と翔波が邸内へ走る。その間に綺理は瓶子を拾い、残りの酒を調べた。

（臭い、じゃわからない。試薬を使えば……って、薬箱は下屋敷に置いてきちゃったんだ！

手持ちの薬だけじゃ……ああもう、この私が肝心なときに毒の種類を当てられないなんて！）

候補はいくつかに絞れても、そのどれかによって対処法は変わる。毒の種類がわからないこ

とにはどうにもできない。
（とにかく応急処置をしないと。それに怪我した人たちも放っておけない）
そうこうするうちに、冬惺たちが人手を連れて戻ってくる。綺理は彼らにてきぱきと指示を下しながら、薬師の紋が刺繍された手袋をきゅっとはめ直した。
毒薬好きの誇りにかけて、絶対に毒の正体を突き止めてみせる。そうして。
綺理は決意をこめて、拳を強く握った。
（――薬師の誇りにかけて、絶対に全員助けてみせる！）

無事な者は里全体の半分もいなかった。その人員で毒に倒れた者たちを屋敷に運び入れ、できる限りの処置をする。負傷者の手当てを並行して行いながら、綺理が体の解毒作用を高める薬草茶を煎じていると、やがて空が白んできた。
そして夜が明けると、綺理は息をつく間もなく屋敷を飛び出し、悠蓮のもとへ向かった。

「――師匠!!　師匠、いますか！」

護衛役に同行した冬惺と二人で洞窟に飛び込むと、綺理は声を張り上げた。
悠蓮はちょうど水汲みに出ようとしていたところらしく、奥からひょいと顔をのぞかせる。
「綺理？　どうした、朝っぱらから」
「力を貸してください、師匠！　鏡作の里の人たちが、毒で倒れたんです！」
綺理が早口で事態を説明すると、悠蓮の表情が見る間に険しくなっていった。彼女は綺理たちについてくるよう合図し、話しながら洞窟の奥に走る。
「毒物を吐かせたあとの処置は？」
「解毒炭と、シブキ茶を。効果があったかはわかりませんが」
「上等。一番無難な対処だ。その毒が入った酒ってのは、残ってんのか？」
「はい。これから調べます。師匠なら試薬を持っていないかと思って――」
綺理が数種類の試薬の名を挙げると、悠蓮は「ある」と短く答えた。呆然としている奏珠の前で、二人は慌ただしく荷物をまとめていく。
「師匠。この辺の調剤器具、全部借りていきますね」
「ああ。つうかオレも行くぜ。……悪いな、奏珠。オレが戻るまでいい子で留守番してろ」
悠蓮は言いながら、承諾を求めるように冬惺を見た。
ここで悠蓮が奏珠から離れれば、「奏珠を監視する」という休戦協定の建前は崩れる。はっきり言えば、その間に奏珠が逃亡する可能性を含めての承諾を求めているのだ。

しかし冬惺が口を開くより早く、当の奏珠が三人の間に割って入った。今朝の彼はきちんと少年の恰好をしており、上半身に巻かれた包帯が単の合わせから見える。

「待ってください。里の者が毒で倒れたとは……。姉上――佐鏡の沙良は!?」

「……沙良も、寝込んでいるわ。里のほとんどの人がやられたから」

綺理が努めて感情を抑えて答えると、奏珠の顔面からすっと血の気が引いた。次いで、意を決したようにまなじりを険しくする。

「わかりました、私も里に行きます。里がそんな事態になっているのに、なにもせずになどいられない。たとえ万全の身でなくとも、私に手伝えることはあるはずです」

「奏珠！」

悠蓮が咎めるように名を呼んだが、奏珠は構わず続ける。

「それに私が証言しなければ、疑いの目は確実に老師に向きます。――里の者が毒を盛られたのと同時期に、里の近くに潜伏していた薬師。疑うなというほうが無理でしょう」

「だけどおまえ、冬惺たちがいるときに里に顔を出しちまったら――」

「ええ。佐鏡家は里が紅楓方と無関係であることを証明するため、自分たちの手で私を冬惺公に引き渡すことになるでしょうね。私はそれで構わない。逃げも抵抗もしません。――ただし事態が解決するまでは、私を里の中で自由に動かせてもらいたい」

奏珠はきっぱりと言った。覚悟を秘めた漆黒の瞳で、冬惺を挑戦的に見すえる。

視線の交錯はわずかな間だった。
冬惺は肩をすくめると、綺理たちのまとめた荷物を背負い、洞窟の外へ足を向けた。
「休戦中は好きにしろ。……どうせ今は、小者にかかずらっている暇はない」

綺理たちが悠蓮と奏珠を連れて戻ると、屋敷は一時騒然となった。
片や里の領域に無断で侵入した旅の薬師、片や身内でありながら追われる身の間者である。
佐鏡家の長以下主要な面々が倒れている今、里の者たちは二人の扱いに戸惑っていた。特に奏珠を連れてきた冬惺の真意をはかるように、ちらちらとこちらの顔色をうかがう。
冬惺が「非常時なので奏珠の詮議は後回しにする。今は自分の権限で奏珠に行動の自由を与えている」と宣言すると、彼らはほっとしたようだった。また奏珠が身元を保証したことで、悠蓮が襲撃者の一味と疑われることも免れ、全員で屋敷に入る。
「翔波！　患者の容態は？」
綺理は廊下で翔波に行き合うと、開口一番に問うた。彼は綺理たちの後ろに奏珠がいることに驚いたようだったが、ぐっと言葉をのんで質問に答える。
「あれから少しは落ち着いたけど、熱と発疹は治まっていない。言われた通り薬草茶を飲ませ

て看病を続けているけど……」
「わかった、ひとまず患者はオレが診る。綺理、おまえは毒の特定を急げ」
「はい！　お願いします、師匠！」
綺理はうなずくと、冬惺と共に離れの一室に薬箱や調剤器具を運び込んだ。
にわか仕立ての薬房となったその部屋にこもり、前掛け布と手袋を身につける。深呼吸を一つすると、綺理は早速毒入りの酒の分析にかかった。
毒薬の正体当てなら、自信がある。既に目星はつけてあるから、調べる手順も頭に浮かぶ。試薬を加えてさまざまな操作を行い、結果を手元の紙に書き込んでいく。
ほどなくしてたどりついた一つの毒の名に、綺理は自分の顔色が変わっていくのを感じた。

「師匠！」
薬房から駆け出た綺理は、患者の寝かせられている広間の前で悠蓮をつかまえ、廊下の端へ引っ張っていった。冬惺と翔波も分析の結果を聞きに集まってくる。
「綺理、どうだった……って、おまえの顔見りゃわかるか」
綺理は硬い顔で顎を引くと、分析結果の紙片を悠蓮に渡した。
「やっぱり解毒炭とシブキ茶じゃ効果がなかったんです。この毒は緋閃湯じゃないと中和でき

ない……。師匠、持ってますか？」

一縷の望みをかけて問うたが、綺理は既に師の薬箱にその解毒薬がないことを知っていた。

案の定、悠蓮は首を横に振る。

だが続く言葉は、絶望を突きつけるものではなかった。

「持ち合わせはねえが、製法は知ってるぜ。緋閃茸さえ採ってくりゃ調合できる。――綺理、おまえには昔、緋閃茸の探し方を教えただろ。あのまわりくどいやつ、覚えてるか？」

綺理は自分の知識をざっと確認し、眉をひそめる。

「探し方は覚えてますけど、緋閃茸は限られた地域でしか採れないんじゃ……。それに緋閃茸を一から調合するには、専用の精製器具が必要だって聞いたことがありますけど」

「そうだ。このあたりもその『限られた地域』のはずだぜ。そもそもこの辺で緋閃茸が採れるって噂を聞いたから、オレは鏡作の里に来たんだよ。――で、器具は簡易的なやつならオレが作れる。臨機応変、現地調達が信条の、放浪の薬師さまをなめんなよ」

悠蓮が胸を張って言った。それだけ聞けば十分だった。綺理はうなずき、決意を言葉にする。

「それなら師匠が精製器具を作っている間に、私が緋閃茸を採ってきます」

「ああ。――それでこそオレの弟子だ」

悠蓮は満足げに笑むと、緋閃茸の最低必要量をすばやく計算して告げた。

「調合する時間があるから、日没までには戻れ。……といっても、焦って途中で倒れたら元も

子もねえからな。ちゃんと昼飯食ってから行けよ」
綺理が「はい！」と力強く応じると、隣で冬惺が片手を挙げた。
「俺も同行する。あの襲撃者たちがどこに潜んでいるかわからないし、『継承の獣』の心配もあるからな。里の外では絶対に単独行動はするな」
「僕も行く！」
即座に翔波が続いたが、冬惺は彼を一瞥するや頭を振った。
「おまえは里に残れ。この状況で俺たちが揃って里からいなくなったら、逃げたと思われる」
「あ……。それじゃ悠蓮どの、僕がその器具作りを手伝います！」
勢い込む翔波の頭越しに、冬惺と悠蓮が目を見交わす。
「いや、それはオレ一人で十分だ。綺理が戻るまでには余裕で完成する」
「だったら、ほかに僕に手伝えることは？　里のためになにかしたいんです！」
「翔波」
冬惺が静かに名を呼んだ。びくりとした翔波に、噛んで含めるようにゆっくりと言う。
「ここでのおまえは俺の従者である前に、鏡作家の次期当主だろう。今に当主になる者が、自分の民の前でも従者根性丸出しでいるな。情けない顔で人の手伝いに右往左往しているところを、里の者に見せてどうする。ましてや今は佐鏡の葉蔵が寝付き、里をまとめる者がおまえ以外にいない状況だ。おまえがうろたえていたら、里全体に不安が波及する」

「……っ」

翔波が息をのんだ。ゆるゆると息を吐き、言葉に迷うように何度か口を開け閉めする。その果てに彼は、搾り出すように問うた。――ただし今度は命令を仰ぐ口調ではなく、助言を求める口調で。

「……冬惺。それなら僕は、どうしたらいい……？」

冬惺は綺理を連れて歩き出し、すれ違いざまに彼の肩に手をのせた。

「堂々としていろ」

綺理と冬惺が足早に去り、悠蓮もいなくなったあと、翔波は廊下に立ちつくしていた。

（ここでの僕は、次期当主……か）

何度も呼ばれてきたその肩書きの意味を、自分は今まで理解していなかったのだ。

継承の儀も『継承の獣』を封じるための手段としか思っていなかった。当主位を引き継ぐというのがどういうことか、なにもわかっていなかった。

自分は偶然次期当主の座が回ってきただけ。当主位へのこだわりはない。実感がわかない。自分は冬惺の従者でいられればそれでいい――。そんな気構えで、どうして恥じることなく継

承の儀に臨もうなどとできたのだろう。
（前に奏珠が聞いてきたのは、そういうことだったのか）
『興味があるのです。なぜあなたが冬惺さまの従者の身に甘んじておられるのか』
『鏡作家の次期当主として、あなたの里の民にお答えいただけませんか？』
あのとき奏珠は、翔波が鏡作家当主にふさわしい器かどうか確かめようとしたのだ。そしてその結果、彼は翔波を見限り、殺そうとした。
『今に当主になる者が、自分の民の前でも従者根性丸出しでいるな』
この九年間、冬惺は翔波をただの従者としては扱ってこなかった。冬惺は、翔波が主の前で畏縮する従順なだけの従者になるのをむしろ止め、普通なら差し出がましいとされる行動や発言を許してきた。その意味を、自分はもう一度よく考えるべきだ。
（……ああ、くそっ。本当に情けない）
翔波は頭を一つ振ると、器具の材料集めに行った悠蓮を追った。
知らない屋敷できょろきょろしている彼女に駆け寄り、水色の瞳を見上げる。
「悠蓮どの、必要な材料を言ってください。屋敷の者に用意させます。そのほうが効率がいいし、あなたや綺理たちが解毒薬を作るために動いていることを、みなに印象付けるべきです」
悠蓮は水色の瞳を軽く見開き、それから口の端を上げた。
「んじゃ今から言う物を薬房の隣に運びこんでもらおうか。数が多いけど二度は言わねえぞ」

そう言って悠蓮が早口で並べた材料の目録は、かなりの数にのぼったが、翔波には一度聞けば十分だ。記憶力にかけては自負している。

正確に復唱してみせると、悠蓮はうなずいて翔波の肩を叩いた。

「よし、頼んだぜ。――おまえ、顔つきが変わってきたじゃねえか」

翔波が人手を求めて広間の前に行くと、そこには不安げな顔の里人たちが集まっていた。彼らは翔波の姿を見るや、わっと駆け寄ってきて口々に言う。

「次期当主、みなは助かるのですか？」

「翔波さま、あの毒はいったい誰が……。双鏡院を襲った者たちは？」

「このままでは……この里はどうなってしまうのでしょう」

「綺理さまやあの薬師の言うとおりにしても、いっこうに熱が下がらないんです！」

「次期当主！　あのよそ者の薬師たちの腕は、本当に信用できるのですか？」

すがるような目が翔波を囲む。希望の見えない状況下で、みな不安と不信が募っているのだ。

（本当だ。ここで僕が少しでも動じたら終わりだ。里全体が恐慌状態になる）

翔波は視線の圧力に怯んでいるのを悟られないように、かすかに震える拳を握る。

『堂々としていろ』

冬惺の言葉を思い出す。あの傲岸不遜な主人ならきっと、解毒薬が間に合う確信がなくても泰然とした姿を見せるだろう。そしてはったりで全員を落ち着かせてしまうに違いない。

（僕はまだ、そこまで自信満々にはなれない。だけどせっかく綺理たちが頑張っているのに、ここでみんなが不信感を持ってしまったら元も子もない。――僕が、しっかりしないと！）

翔波は毅然と顔を上げた。そうだ。自分に自信はなくても、綺理たちを信じる思いなら誰にも負けない。綺理たちは必ず里を救ってくれる。そう信じられるから、堂々としていられる。

（堂々と、できるはずだ。僕ができると思ったからこそ、閣下は僕に里を任せて行ったんだ）

「――大丈夫だよ。容態が急変していないなら、それは応急処置が的確だった証拠だから」

重圧に声が震えないように、腹に力をこめて言う。

それは本当だ。先ほど悠蓮から聞いたが、綺理が急いで毒の酒を吐かせていなかったら、今頃は症状がずっと重くなっていたらしい。その場合、たとえ緋閃湯を処方して毒を中和しても、手足に一生後遺症が残ることになっていたという。

「悠蓮老師は見た目ほど若い御仁じゃない。薬師組合の中でも高名な、経験豊富な薬師だ。綺理姫はその弟子で、正式な資格も取っているし腕も確かだ。心配はいらない」

（僕の言葉を信じさせないと。今に当主となる者が、自分の民に信用されなくてどうする）

ここにいるのは、翔波の民なのだ。翔波にとって鏡作の里の者は、警戒して腹を探り合うべき他者などではなかった。翔波が統べる民、翔波が守るべき民だ。

「それに今、綺理姫と閣下が緋閃茸――解毒薬の材料の茸を採りに行ってくださっているからね。だから大丈夫。解毒薬ができるまでの辛抱だ」

解毒薬、という単語に、人々の顔が希望に輝く。

「綺理さまと冬惺さまが？」

「では、その解毒薬さえできればみんな助かるのですね!?」

「うん。それで悠蓮どのがその解毒薬の調合に必要な器具を作るから、至急材料を揃えてほしい。……そうだな、青嶺、笙麓、架禅、橘花、恵那。君たちは字を読めるかい？」

指名された者たちは、翔波が昨日の今日で里の者の名を下働きに至るまで覚えていることに驚いたようだった。目を丸くして首肯した彼らに、翔波は材料を記した紙を切って渡す。

「ほかのみんなも根を詰めないで、交替で看病しなよ。あの襲撃者たちについては詳しいことはまだわからないけど、もしまた襲ってきても僕が必ず里を守る。――この鏡にかけて」

身分証の銅鏡を、懐から出して掲げる。鈕に通した組み紐から下がるのは、滑石、黒曜石、瑠璃、蛇紋石、金銅、琥珀の六つの丸玉だ。十段階の下から六番目――中級貴族にしては高位の正三位乾術師の証に、おおと頼みにするような吐息が漏れる。

「翔波さま……！」

駄目押しに冬惺を真似して不敵な笑みを浮かべると、人々は目に見えて安堵した。

翔波は彼らをそれぞれの仕事に送り出し、自分は別室で臥せっている葉厳と沙良の様子を見

に行くことにする。

よかった、どうにかぼろを出さずにやれた、僕はなかなか本番に強いじゃないか。——そんなことを思いながら歩いていたら、ふと足がもつれた。

（あ……れ？）

ほっとした拍子に、ずっと膝が震えていたことを体が思い出したのだ。急に膝から力が抜け、廊下の真ん中ですとんとへたりこむ。

「うわ……なんだこれ。……情けない」

「ええ、本当にね」

冷ややかな声にぎょっと振り仰げば、背後で奏珠が腕を組んでこちらを見下ろしていた。

「みっともない……。手は貸しませんよ。自力で立ち上がってください」

「……言われなくても」

むっとした勢いで自分を奮い立たせ、のろのろと立ち上がる。と、廊下の向こうを何人かの里人が行き来しているのが奏珠の肩ごしに見え、かなり腹立たしいことに気づいてしまった。

（僕の醜態が里の人に見られないように、体で隠してくれたってわけか）

情けないから、情けをかけられた。悔しい事実に歯噛みして、せめてそんな表情を見られないようにと歩き出せば、奏珠が同じ歩調でついてくる。

「……奏珠。君さ、なんで来るんだよ」

「姉上の看病に戻るためです。それとも私がのこのこ里にやってきたほうの理由ですか？」
返答に詰まる。奏珠の行動を見れば、彼が身内の身を案じて来たのは明らかだ。しかしそのせいで奏珠の未来は、身内の手によって罪人として引き渡されることに確定してしまった。
沈黙していると、奏珠がまた口を開いた。疑わしげな口調でつぶやく。
「老師の腕は信頼できますが……、玉造の綺理は本当にその茸を探せるんですか？」
「！　当たり前だろ」
今度は翔波は即答した。振り返り、片眼鏡の奥から奏珠を睨む。
「君が僕を馬鹿にするのは仕方ないと思うけど、綺理を馬鹿にしたら僕が許さない。綺理は採ってくると言ったら、絶対に採ってくるよ」
「……それなら、よいですが……」
奏珠が圧倒されたように黙る。それを確認すると、翔波は密やかな決意を胸に前を向いた。
（――だから僕も、頑張っている綺理に恥じないように頑張るんだ。もう二度と、みっともない姿をさらしたりはしない）

五章　鷹を知る男

綺理と冬惺が屋敷を出たのは、正午になる少し前のことだった。それから山道に入ってしばらく進んだが、日はまだ中天に高い。

「綺理。今過ぎたところに一つ洞窟があったが、あれは？」

「目印の木がないから違うわ。……それにしてもこのあたり、本当に洞窟が多いのね」

綺理は落ち葉の積もった獣道を行きながら、ため息をついた。

緋閃茸は洞窟などの岩の割れ目に生える茸だが、どんな洞窟でもよいわけではない。一定の鉱物が地表に分布している場所にしか生えないのだ。

ただ緋閃茸の生える地質の場所には、中毒性のある毒の実をつける低木も生え、中毒になった獣が足しげく通う。よって獣道をたどっていけば、ある程度の目星をつけることは可能だ。

そうして、崖沿いの道に出て少しした頃のことだった。

不意に上方で、小枝がばきぼきと盛大に折れる音がした。

続いて、男の悲鳴。

「う……わぁあああっ!?」

なにごとかと綺理と冬惺が見上げれば、一人の男が崖を滑り落ちてくるところだった。男は

二人の三、四歩先に転げ落ち、あいたたた、とうめき声を上げて上体を起こす。
男はくたびれた旅装姿で、なぜか頭から厚い布を被っていた。というより、布が頭に被さって周りがよく見えていなかったから崖から落ちたのだろう。
(旅人？　師匠じゃあるまいし、なんでこんなところに……)
「あの……大丈夫ですか？」
怪我はなさそうだが一応聞くと、男は自分以外の人間の存在に初めて気づいたように顔を上げた。被っていた布をはぎ取り、こちらを仰ぐ。
綺理のほうも、思わず男をまじまじと観察した。
年の頃は二十六、七。春怜王と同年代だろう。長い褐色の髪を首の後ろでくくり、さらに髪の房に布を巻いて鞭のように細くまとめている。整った顔立ちは優しげだが、左目の下に走った横一文字の傷痕が、穏やかそうな風貌の中で異彩を放っていた。瞳の色は、薄紫。鏡作の里の者は黒髪黒目ばかりなので、里人の縁者とは思われない。
男はその薄紫の瞳で綺理を見つめ、ぽつりとつぶやいた。
「これは……運命かな」
「はい？」
「ここで出会うのがあなたとは。引き寄せられる運命、手に入れるべき運命……」
落ちた拍子に頭を打ったのだろうか、と綺理が心配になったとき、男ががばっと跳ね起きる。

「ああ、そうだ！　鷹は？　鷹はどっちに行きました？」
「鷹？」
「そうです。あなた方は見ていないかな。私の追っている男が鷹使いでね。ようやく追いつめたと思ったら鷹をけしかけられて、その間に見失ってしまったのですが――」
それで鷹の爪から頭を守るために、厚い布を被っていたのだろう。
男はさらに言い募ろうとしたが、綺理の隣で冬惺が太刀の柄に手をかけているのを認め、表情を強張らせた。自身も腰の刀に手をやり、じりじりと下がる。
「もしやと思いたいが……君もあいつらの仲間なのか？」
「あいつら、とは？」
男と、男を用心深くうかがう冬惺とを交互に見ながら、綺理は冬惺の後ろに下がった。
「鷹を連れた男の一味だ。鷹使いの男は……顔は隠しているのでわからないが、柿渋の衣を着て、配下に黒装束の男たちを連れている」
「――それなら残念だったな。俺たちはおまえの探し人じゃない。この近くの里の客だ。その鷹使いの男の一味は、俺たちにとっても敵になる」
冬惺の答えに、男はほっと警戒を解いた。警戒を解いて、また変なことを言った。
「それはよかった。せっかく運命的な出会いを果たしたのに、いきなり敵対関係では寂しすぎる。それはそれで燃えたかもしれないが、よく知り合う暇がないなら意味がない」

「おい……おまえ、なにを言っている？」

最初とは違う意味で不審な面持ちになった冬惺を、男は軽やかに無視した。綺理をまっすぐに見すえ、冬惺に対するときとは打って変わった丁寧な物腰で言う。

「姫君。このあたりにはまだ鷹使いの男の一味が潜んでいるかもしれないし、二人だけでは心もとないでしょう。行き先はどちらです？　私もお供しましょう」

飛雲と名乗ったその男は、本当に強引についてきてしまった。

冬惺はあからさまに嫌そうにしていたが、言い争う時間が惜しいし、まくこともできない。変な男だがとりあえず敵ではなさそうなので勝手にさせている、というのが現状である。

「なるほど。里の者が毒を盛られて、それで姫君たちが解毒薬の材料を探しに。それは一大事ですね。私も材料探しを手伝いましょう」

「……あの、お気持ちはありがたいんですが、飛雲さまは鷹使いの男を追ってらしたんじゃないんですか？　さっき、家宝を取り返さないと、とかなんとか……」

綺理は冬惺と並んで歩きながら、肩ごしに飛雲を振り返った。

彼は北部の下級貴族の出で、奪われた家宝を取り戻そうと鷹使いの男を追ううちに、この地にたどりついたのだという。

「まあ、先ほどまた鷹を見失ってしまいましたからね。――私があなた方についていきたい理

由は四つ。一つ、人命救助が最優先。二つ、ついでに恩を売って今晩里に泊めてもらいたい。三つ、毒を盛ったのが鷹使いの男の一味なら、彼らにとって解毒薬を作ろうとしているあなた方は邪魔なはず。あなた方と共にいれば、敵が向こうから姿を現すかもしれない」

飛雲は理路整然と言って、にっこりと笑った。そうすると左目の下の傷が少し引きつれたようになるが、彼の場合はそれがむしろ愛嬌になって見える。

「そして四つ目の理由は、姫君、あなたに興味があるから」

「……は？」

「――飛雲。おまえ、やはり即刻失せろ」

冬惺が地の底から響くような低い声を出した。彼は綺理に前を向かせ、飛雲との間にずいと割り込む。明らかに不機嫌ぶりに磨きがかかった彼に、綺理はどぎまぎする。

（ええと、たぶん飛雲さまは、私がこの歳で薬師だから珍しがっているのよね。それで冬惺は、私の素性を探られたら面倒だから遠ざけようとしているだけ。うん、それだけ！）

自惚れた妄想をしてへこんだり、いたたまれなくなったりしないように、自分に釘を刺す。

と、後ろで飛雲が続けた。彼は相手が冬惺になった途端、口調が砕けたものになる。

「悪いが失せる気はないな。それに、トウセイだったか。私は君にも興味を持っているんだ」

綺理も冬惺も、家名と字さえ明かさなければ珍しい名前ではないので、そのまま名乗っている。冬惺が「興味？」と胡乱な様子で問い返すと、飛雲はさらりと答えた。

「好敵手に対する興味。いずれ私と君は、姫君をめぐって戦うことになるだろうから」

「――――は!?」

綺理と冬惺の声が重なった。さすがに今の台詞の受け取り方は、一つしかない。

(この人、こんなに軽い人だったの!?)

驚いてぐるんと振り向けば、飛雲が口元だけの笑みを冬惺に向け、冬惺のほうは彼を凍てつくような目つきで睨んでいる。

「あ、あのっ、私たちは急いでいるんです。冗談を言っている場合ではありません!」

「姫君、冗談ではありませんよ?――いずれあなた方はそれを悟ることになる。必ずね」

「俺はおまえの存在自体が冗談だと思いたいね。たわ言をしゃべり散らすしか能のない浮かれ男など邪魔なだけだ。口をつぐむか、疾くと去れ」

冬惺は吐き捨てるように言ったが、綺理は飛雲の薄紫の瞳に本気の光を感じ、反応に困った。とにかく今はそれどころでないのは確かなので、二人を促して先に進む。

そして、行く手に垂れ下がる枝葉を払ったときだった。

唐突に視界が開け、三人は広々とした岩地に出た。予想外の到着地点に綺理は慌ててあたりを見回したが、洞窟も目印の低木も見当たらない。

(……嘘。私、道を間違えてた?)

ここにたどりつくまでの記憶が、脳裏に一瞬で駆け巡る。残っていた足跡の乱れ方や、その

他もろもろの痕跡から、絶対にこの道で正しいと思っていたのに。
だが、戻って別の道を探すという選択肢を取る前に、綺理の目が岩地の一点に止まった。
（あれは……まさか！）
綺理は急いでそれ――小動物の死骸に駆け寄った。追ってきた冬惺と飛雲が見下ろす中、死骸のそばに膝をついて状態を調べる。
「……やっぱりそうだわ。これ、赤酔木の実の中毒で死んでる」
「赤酔木？　おまえが言っていた、緋閃茸を探す目印の木か？」
「そう。だからこの近くを探せば、きっと木が見つかるわ！　手分けして探しましょ！」
ぐっと拳を握って顔を上げれば、冬惺がなんともいえない表情で飛雲を見ていた。
飛雲のほうは冬惺を横目で一瞥してから、完璧な笑みを浮かべる。
「もちろん私も手伝いますよ。――ほら、私がお供していてよかったでしょう？」

「――一つ、確認したいのですが」
絞った布で沙良の首筋の汗をふきながら、奏珠が言った。
毒を飲んだ者たちの容態には個人差があり、沙良はまだ一度も目を覚ましていない。

熱に火照った顔で荒く呼吸する少女のかたわらで、同じ顔の少年が懸命に看病をする。その様を妙な気分で見守っていた翔波は、なに、と先を促す。

「双鏡院に現れた襲撃者たちの頭が鷹使いの男だったというのは、本当ですか？」

「そうだよ。僕は見ていないけど、閣下から聞いた。夜目の利くおかしな鷹だったって」

「！　まさか……！」

「本当だって。襲撃があったのは夜明け前だ」

奏珠は愕然としたように手を止め、やがて紙のように白い顔で布をゆすぎはじめた。しばし水音と、沙良の荒い息遣いだけが部屋にこだまする。

「奏珠。君、もしかしてなにか心当たりが――？」

結局、赤酔木そのものは近くになかったが、手分けして探したおかげで、岩地の向こうの森にさらに獣道が続いているのが見つかった。どうやらこの先が本命らしい。

――付け加えるなら、その道を真っ先に発見したのは飛雲だった。

「姫君のお役に立ててよかった。また私に手伝える機会があると嬉しいですね。……ああ、それが緋閃茸とかいう茸の採集道具ですか？　どうやって使うか前もって教えてください」

飛雲が綺理の隣を歩きながらにこやかに言う。獣道は二人並んで歩くのが精一杯の幅なので、けっこう距離が近い。この距離感にも飛雲の態度にも、綺理としては戸惑うばかりだ。

「いえ、その、道具は二組しかないですし、必要な分は私と冬惺で集められますから……」

「ではなおさら。姫君がお手を煩わせているそばで、私にだけなにもせずにいろなどと」

「――そんなことより」

後ろから冬惺が口を挟んだ。彼は飛雲の同行を認めざるをえなくなった代わりに、相手の調子に乗せられないようにしようというのか、強引に話題を変える。

「飛雲。おまえは鷹使いの男の顔を知らないと言っていたな。それなのになぜ相手を特定して追える？　なにかほかに特徴があるんじゃないのか。――たとえば、あの鷹とか」

飛雲は首をすくめた。あくまで綺理の隣を確保したまま答える。

「そうだ。彼の連れている鷹は玄人には見違えようがない。希少な神の畏鳥だ」

「神の畏鳥？……ひょっとしてそれは、普通は神鷹と言わないか？」

「ああ、君も聞いたことはあるのか。神鷹――遠目や素人目には普通の鷹と区別がつかないだろうが、太陽と月の両方に愛され神秘の鷹だ。賢く勇敢で長寿、昼も夜も空を自在に翔る最高の鷹。敵とはいえ、あの神鷹を連れているとはうらやましく思うよ」

「――詳しいな。玄人とか言ったか？」

「私は分家とはいえ鳥飼家の出でね。鏡作が鏡を知るように、鳥飼も鳥を知る。鳥はいい。美

しくて興味深くて、好きだ。——もちろん姫君、あなたのこともですが」

（そ、そこでそういうつなげ方するの？）

真横から笑顔を向けられて、綺理は微妙に身を引いた。「困ります」と突っぱねるほどではないが、かといって軽くあしらうなどという芸当はできない。足取りも決して遅くなく、さくさく先に進んでいるだけに、「急いでいるので」とかわすのも難しい。

反応に窮していると、後ろからぐいと腕を引き寄せられた。冬惺が己と綺理の位置を無理やり入れ替え、綺理を背にかばうようにして冷ややかに言う。

「飛雲、はっきり言っておく。——綺理は俺の婚約者だ。ちょっかいを出すな」

（——！）

断固たる宣言に、綺理の鼓動が大きく打った。「俺の婚約者」という素晴らしい響きを脳内で繰り返し、こんなときだというのに頬が熱くなる。

（や、でも、嬉しいけど、嬉しいけど、冬惺は当たり前のことを言っただけだって！　別にやきもちとかそういうのじゃ全然なくて、婚約者として普通のこととか、そういう感覚で……）

舞い上がりそうになる自分に慌てて防衛線を張って——張りすぎた気がした。

（……あれ？　婚約者として……婚約者だから？）

なにか、自分が考えずにいようとしたことに触れてしまった気がする。ざらついた思いが胸に残り、すっきりせずにいると、飛雲が綺理と冬惺を見比べて問うた。

「婚約者？　口約束ではなく、親の決めた正式な？」
「ああ。じきに婚約式を挙げる」
引導を渡すように冬惺が言ったが、飛雲は怯まなかった。足をゆるめて再び綺理の横に並ぶ。
「なるほど。ですが姫君、あなたは親に勝手に決められた婚約者がいるからといって、恋をするのをあきらめるわけではないでしょう？　恋愛と結婚が別であることなど、多々ある」
（なっ……!?）
あまりの言いように綺理は絶句した。一般論に見せかけてはいるが、浮気をしませんかと誘っている発言だ。しかもそれを、婚約者のいる前で堂々と言うなど。
「婚約したからといって、心まで相手に捧げなくてはいけないわけじゃない。恋心はそう簡単に封じられるものじゃない。ほかの人を想っていてもいいと思いますよ」
「……綺理をそんなふしだらな女と一緒にするな。それに綺理は、おまえのような男になびくほど安い女じゃない」
冬惺が恫喝するような低い声を出した。対する飛雲は、思わせぶりな言葉を返す。
「さて？　姫君を侮辱するつもりは毛頭ないが、二人とも私の言葉を胸に刻んでおいたほうがいい。これは私のなけなしの好意から言っているのでね」
「なにが好意……っ」
「この道はここで終わりだ。姫君がお探しの木と洞窟はあれかな？」

冬惺が気色ばんだ矢先に、飛雲が前方を示した。
見れば行く手の斜面に、小さな赤い実をつけた低木がしがみつくように群生している。そのそばには、垂れ下がる蔦に半ば隠れて、洞窟がぽっかりと口を開けていた。
「たぶんそうです！　きっとここなら……！」
綺理は歓声を上げて走り出した。斜面のふもとの、森が広場のように開けている場所を突っ切り、低木の一株をもう一度確かめる。特徴的な葉形。間違いない、赤酔木だ。
「それが目印の木ですか？　ああ、確かに獣の食い散らした跡がある」
間近からかかった声に振り向けば、飛雲が横から赤酔木をのぞきこんでいた。彼は決して不躾に綺理に触れたりはしないが、あくまでそばを離れる気はないらしい。
「よかったですね。あとは十分な量があることを願いましょう」
飛雲は人好きのする笑みを浮かべた。洞窟に至る斜面に足をかけ、手を差し伸べてくる。
「では早速採りに行きましょうか。姫君、お手を」
「え？　あ、はい」
固辞するほうが変に思えるほど、自然で下心の感じられない仕草だ。早く洞窟に入ろうと急いていたこともあり、綺理はついその手を取りそうになった。
その、寸前で。
「――綺理に触るな」

横合いから冬惺が、ぱしんと飛雲の手を払いのけた。
（冬惺!?）
そればかりか彼が綺理の肩を強い力で抱き寄せたので、綺理は仰天した。痴漢かなにかから守るような勢いで飛雲から遠ざけられ、慌てふためく。
「と、冬惺っ？　ちょっと、今のはさすがに失礼じゃ……」
「綺理、おまえは俺がなにに苛立っているか、わかっていないのか？」
「え」
「――俺がなぜおまえをこいつに近づけたくないか、説明しないと本当にわからないか？」
琥珀の瞳に至近距離から見つめられる。
――真剣なまなざしにこめられたその『意味』に気づかないほど、綺理は鈍くもなければ彼との付き合いが短いわけでもなかった。心臓がどくんと跳ねる。
（それってつまり……そういうこと、なの？）
冬惺の言わんとすることを正しく理解して、鼓動がぐんぐん速まる。うるさく鳴り止まぬ心臓の音を聞きながら、肩をつかむ彼の手の強さを意識する。
「う……わ、わかった……」
ぎごちなくうなずくと、冬惺が満足したように手を離した。綺理がそろそろと体を離しながら見やれば、飛雲はどこか面白がるような目つきで二人を見守っている。

「ずいぶんと見せつけてくれるが、そんなことをしている場合かな。急いでいるんだろう？」
「ああ。だがその前に一つ――」
冬惺は言いながら、飛雲から隠すように綺理を自分の後ろに押しやった。
「一つ？」
「話をつけておかねばならないことがある！」
次の瞬間、冬惺は太刀を抜き放ち、飛雲に斬りかかる！
キィンッ、と鋭い音が響き渡った。
「――物騒だな。こういう情熱的な『話し合い』は、個人的には嫌いじゃないが」
いつの間に抜いたのか、飛雲は刀で冬惺の太刀を受け止めていた。
刃を十字に組み合わせたまま、冬惺が叩きつけるように言う。
「鷹使い、おまえの目的はなんだ。なぜ鏡作の里を襲った？」
いきなり核心に踏み込んだ彼に、飛雲は目を瞠った。次いで愉快そうに笑う。その笑みはもはや、穏やかなものでも愛嬌のあるものでもなかった。
「なんだ、気づいていたか。参考までに、どこで私に疑いを持ったか聞かせてくれるか？」
余裕を含んだ口調だけがそのまま。優しげな雰囲気が払拭され、彼の印象は一変していた。
薄紫の瞳に鋭さが宿り、左目の下の傷が凄みを増す。
――彼こそが、鷹使いの男本人だ。

二人は互いに刃を弾き合い、距離をとって対峙した。
「おまえの演技は中途半端だ。鷹使いの男の一味を追っている、という演技を貫くなら、山鳥の羽音に警戒するふりや時々空を見上げる真似くらいはすべきだったな」
おそらく冬惺は、しばらく前から飛雲を怪しんでいたのだろう。だが飛雲が綺理のそばにいる状態で、疑っていることを相手に悟られたら、綺理の身が危ない。だから冬惺は婚約者の嫉妬のふりをして、綺理を彼から遠ざけようとしたのだ。
綺理は緊張に速まった鼓動をなだめながら、冬惺の背後から飛雲をうかがった。
生徒の回答を待つ師のような表情の彼に、冬惺が続ける。
「それにおまえは自分の正体を隠そうとするあまり、自分につながる情報を不自然に伏せた。俺に問いただされるまで、敵を特定する重要情報を口にしなかったのは、明らかに怪しい。しかもあれを神鷹だと断じておきながら、事情通なら言うはずのことを言わずに話をそらした」
「言うはずのことって……？」
綺理が眉をひそめると、冬惺はいっそう声を硬くした。
「綺理。神鷹を馴らすすべを知っているのは、鷹居家だけなんだ」
「！　鷹居って、紅楓方の――！」
敵方の有力貴族の家名に、綺理は慄然とした。そこに飛雲の感心したような口笛が重なる。
「若いのに博識だな。鳥を扱う家に縁の者でなければ、あまり知らないかと思ったんだが」

彼の薄紫の瞳に悪戯っぽい光が宿る。

「それなら私の正体もわかるか？　うまく一度で当てられたら、ご褒美に君たちが解毒薬の材料を採るのを邪魔しないでおこう」

冬惺は少しためらった。言葉を選ぶように、ゆっくりと口を開く。

「そう聞くということは、俺が名前を知っていてもおかしくない奴なんだな。鷹居家の中でおまえと年齢が合い、一定以上に名が知られていて、さらに飛雲という偽名――」

そして彼は、不吉な言葉を述べるようにその名を口にした。

「――鷹居家当主の弟、空騅か？」

（！）

瞬間、綺理は戦慄が全身を駆け抜けるのを感じた。

紅楓方の若き名将、空騅将軍。

四年前、軍勢を率いて玉造の里に攻め入り、綺理たちを里から追った将軍だ。綺理たちは彼の放った追っ手から逃れるために地方を転々とし、時に山中を逃げ惑ったのだ。

（『空騅』は空を行く葦毛の馬――飛ぶ雲の比喩ってこと!?　でも、まさかそんなはず……）

果たして、飛雲と名乗っていた男は笑声を立てた。

「正解だ！　いかにも私は、鷹居の空騅。ただ少しだけ訂正させてもらうなら、今は私が鷹居家の当主だ。昨年の戦で君が無能な兄を討ってくれたからな。感謝するよ、白桜の冬惺」

爽やかに笑う空騅に、綺理は呆然と問いかける。
「でも……空騅将軍は、瑛国にいないはずじゃ……」
空騅は紅楓方が勢力を盛り返した時期に南の晶国に渡ったが、その間に白桜方が南部での覇権を完全に取り戻したため、瑛国へ帰還する経路を断たれた。両派が雌雄を決した昨年の戦に馳せ参ずることもできず、そのまま亡命の身となっていたはずだ。その、はずだった。
「私はここにいますよ、玉造の姫？　私のほうこそ、白桜の冬惺だけでなくあなたにも出会えたことに驚きました。ただの深窓の姫君ではないあなたに興味を持ったのも、嘘じゃない」
空騅は視線を冬惺に戻し、心底楽しそうに言う。
「さて、君はさっき私の目的を聞いたな。ではほんの一部だけ答えよう。私がこうして君たちの前に姿を現した目的は、好敵手と見定めた相手に挨拶をするためだ。――四年前、私の手からすり抜けた白桜の若将軍。君の初陣にお付き合いできなくて非常に残念だったのでね」
そうと聞けば、彼の謎めいた台詞も腑に落ちてくるものがある。
『せっかく運命的な出会いを果たしたのに、いきなり敵対関係では寂しすぎる』
『私は君にも興味を持っているんだ。――好敵手に対する興味』
（道理で。ちゃんと本心を混ぜていたから、この人の台詞が本気に聞こえたんだ！）
そのとき、頭上でばさりと羽音がした。綺理と冬惺がぎくりと空を警戒する。その間に空騅は、右手で刀を構えたまま革手袋を取り出し、口を使って左手にはめた。

「改めて紹介しよう。彼女は私の自慢の相棒。神の畏鳥の、空羽だ」
青天を滑り降りてきた優美な鷹が、空騅の掲げた左手に舞い降りる。
彼が腕を振れば、鷹はすぐにでもその鋭い爪とくちばしでこちらに襲いかかるだろう。いっそう緊張をはらんだ空気の中で、空騅だけが悠然としている。
「怖い顔だな、白桜の。そう構えなくても今回は挨拶。どうせ今戦っても、君の気持ちは私との勝負より、早く解毒薬の材料を調達するほうに向いていそうだ。片想いではつまらない」
「……俺たちが緋閃茸を持ち帰るのを、見逃すと？」
「言っただろう？　ご褒美だと。それにもう目的は果たした」
ではこの紅楓方の将軍は、本当に好敵手に自分の存在を印象付けるためだけに現れたのか。
酔狂な、と啞然とする綺理たちの前で、空騅は円を描くようにじりじりと移動する。退路を確保しようとしているのだと気づいて、綺理はとっさに声を上げた。
「空騅将軍！　里の人に毒を盛ったのは――、もしかして崖崩れを起こして私たちを鏡作の里に来させたのも、全部あなたの仕業なんですか!?」
（時間を稼ぎたいのは向こうのほう。今なら無視されることはないはず！）
そんな綺理の思惑を察したように、空騅は軽く目を見開いた。まとう空気がふっと穏やかになり、またあの人好きのする笑みを浮かべる。
「そのとおりですよ、姫君。私は悪人ですから。――では再会のときまで」



言うや、彼はもと来た獣道へ走り去った。

追おうとした冬惺は鷹に阻まれ、舌打ちして薙ぎ払う。鷹が冬惺の太刀筋を逃れて飛び去ったときには、もう空騅の姿は木立の中に消えていた。

「……っ、毎度逃げ足の速い！」

歯噛みするが、もとより深追いしている暇はない。冬惺は得物を納め、苦々しくつぶやく。

「鷹居の空騅……。まさかあいつが、瑛国に戻っていたとはな……」

それに、と綺理は心の中で続けた。

（紅楓方が、鏡作の里でいったいなにを企んでいるっていうの――？）

うそ寒い風が頬を撫ぜ、背筋が冷える。けれど不安が暗雲のように胸を覆いつくす前に、冬惺の言葉が綺理を目の前の現実に引き戻した。

「とにかく今は緋閃苔を持ち帰るのが先だ。空騅のことを考えるのは俺に任せて、綺理は薬師の本分に集中していればいい。行くぞ」

「――うん！」

綺理は大きくうなずくと、冬惺と二人で、今度こそ洞窟へ上っていった。

（そうよ。あの人がなんのつもりで毒を盛ったかはわからないけど、絶対に思い通りになんかさせない！――きっちり解毒薬を作って、里の人たちを助けてみせるんだから！）

幸いなことに、緋閃茸は洞窟の入り口近くだけで十分な量が見つかった。
岩の割れ目に生える鮮やかな緋色の茸を、綺理と冬惺は手分けして掘り出す。
緋閃茸は花と見紛う色と形をした茸で、一本一本がもやしのように細く小さい。黙々と作業をし、両手にあふれるほどの緋閃茸が手に入った頃には、綺理は額に汗をかいていた。
「よかった。これだけ採って帰れば……！」
冬惺は綺理の疲労を見てとったか、なにも言わずに荷物をすべて一人で背負う。
二人が洞窟を出たとき、太陽はずいぶん傾いていた。これからもと来た道を戻るとなると時間が心もとないが、もう一つ幸いなことに、この洞窟は里の近くにあった。
冬惺が「試しに高台に出てみないか」と言うので斜面を上ってみたら、眼下に里が見えたのだ。多少の悪路は覚悟して、二人は下方に見える里へと一心に向かっていった。

近道ができたおかげで、綺理たちは日没よりずっと早くに屋敷に帰ることができた。
しかし材料を持ち帰って終わりではない。薬師の本分は、これからだ。
「師匠、ただ今戻りました！　精製器具はできてますか？」
綺理は離れの棟に駆け込むと、悠蓮に緋閃茸の袋を渡した。彼女が中身を確認し、冬惺に手

伝わせて洗っているうちに、綺理は一旦自室に引っ込んで薬師の作業服に着替える。
細袖の上衣の上から前掛け布をつけ、帯紐を結ぶ。長い金髪は一つにまとめて冬惺のように頭の高い位置で結い、仕上げに薬師の手袋をはめる。――これが薬師の、戦装束。
（――よし、もうひと頑張り！）
出陣する武人のように気合いを入れると、綺理は部屋を出た。空騅の件を翔波たちに報せて対応を練るのは、冬惺に任せ、自分は悠蓮と共に薬房にこもる。
薬房の中には二つ目の作業台が運び込まれていた。南方渡りの玻璃製の道具に管や竹筒や器や革袋やその他さまざまな物が複雑に組み合わさった器具が置かれている。
「精製器具はさっき完成したとこだ。んじゃ、まずこの緋閃茸をすり潰すぞ。有効成分のないとこはわかってんな？　精製の邪魔になるから、要らねえ部分は除いておけよ」
「はい！」
綺理と悠蓮はもう一つの作業台に向かい合って座り、緋閃茸の処理をはじめた。
「精製の仕方は実施で教えるが、緋閃茸を煮詰める間にほかの材料の下準備をするからな」
手を動かしながら、悠蓮が今後の作業を一通り説明する。聞いているだけでめまいがしそうなほど面倒な手順だったが、書き留める物も暇もないので、綺理は根性で頭に叩き込む。
（そういえば、こうやって師匠にじかに教えてもらうの、久しぶり）
初めは独学で勉強していた綺理は、玉造の里に悠蓮が訪れたのを機に彼女に弟子入りした。

しかし悠蓮は、薬師の資格が取れるだけの知識と技術を綺理に叩き込むと、また放浪の旅に出てしまった。今回のようにひょんなところで遭遇することもあったが、その場合も座学か、野外での薬種採集法の伝授ばかりで、悠蓮の調剤の手並みを見るのは実に久方ぶりである。

（――やっぱり師匠はすごい。一つ一つの手つきが速くて正確なだけじゃない。一番効率のいい手順を、全部頭の中で組み立てて動いてる）

綺理は師の技を盗むように、必死で悠蓮の手際を真似る。何種類もの薬種の処理を分担して行っていると、薬房にこもって初めて、悠蓮が指示や注意以外のことを口にした。

「……綺理。おまえ、夜明け前からぶっ通しで働いてんだろ。相当疲れてんじゃねえの？」

「え!?　私、そんなに作業効率落ちてました？　興奮系の薬茶を飲んで出直してきます？」

疲れているのは確かだが、まだしばらくは気力で保たせられる。興奮で頭は冴えているし、少なくとも、もう引っ込めと言われるほど手つきが怪しくはなっていないはずだ。

そう身構えた綺理に、悠蓮は「違えよ」と否定する。

「おまえの手際は問題ねえが、かなり無理してんだろ？　緋閃茸を採って帰ってきたとき、あとはオレに任せてもう休もうとは思わなかったのかよ」

「冬惺にもそう言われました。でも、もし私が手伝わなくても問題ないんだとしても、だからといって途中で放り出して師匠任せにしちゃうのは違うかなって」

薬草の根を細かく切りながら答える。心配してくれた冬惺の気持ちは嬉しいが、これは綺理

の薬師としてのけじめだ。冬惺にもそう伝えると、彼はわかったと言ってくれた。
『わかった。なら、好きなだけ頑張れ。――倒れる前に、俺が支えてやるから』
「それに……そういう恰好つけとは別に、単純に悔しくて、恥ずかしかったから」
ぽつりと漏らすと、悠蓮はそれだけで一切を悟ったようだった。
「ああ。おまえ、毒薬は好きでも解毒薬を自分で調合するのはあんまりやってねえんだろ。なまじ王都やら玉造の里やらに住んでっと、たいていの薬は買えちまうからな」
綺理はうなずく。玉造邸の綺理の薬房には、万が一に備えて一通りの解毒薬が揃えてあるが、それは綺理自身が調合した物ではない。
「よく考えたら私、調合の仕方をちゃんと知ってる解毒薬って、師匠に教わった基本的な種類のだけなんです。それも実際に調合してみたことはほとんどなくて。その程度の実力なのに、どうせ敵がそんなに特殊な毒を知ってるわけないって高をくくって、毒は自分の専門だからなんとかできるはずって思い上がっていて……それがすごく恥ずかしいです」
緋閃湯の製法は、綺理程度のひよっこ薬師が知っていたら逆におかしいくらい高度なものだったが、もし必要なのがほかの種類の解毒薬だったとしても、綺理にどの程度対応できたか。
「おう、そんじゃ恥ずかしがっとけ、悔しがっとけ。悔しくて、急に解毒薬のことも勉強したくなっただろ。おまえ、成長するよ」
悠蓮は軽い調子で言って、ふと真面目な声になった。

「――薬師が毒を知るのは、薬を知るため。殺す方法を知るのは、生かす方法を知るためだ。おまえは毒の知識や調合については自信を持っていい。だから、そろそろその先にも進め」
「……はい」
綺理は師の言葉を噛みしめるように、神妙に答える。
「よし、それでこそオレの自慢の弟子。――お、そろそろいい具合に煮詰まってきたな」
悠蓮は手招きすると、煮詰めた緋閃茸の液を精製器具に移しながら、精製の仕方と原理について説明をはじめた。そして液を分離させて成分を抽出している間に、別の薬草の煮汁を作る。あまりのめまぐるしさに綺理がへとへとになっていると、悠蓮がからかうように言った。
「すげえ作業量だろ」
「……は、はい。師匠、よくこんなのできますね……」
「できねえよ」
え、と綺理は顔を上げ、そこで初めて悠蓮の顔にも疲労の色が浮かんでいるのを知った。
「これをオレ一人でやってたら、間に合わねえか、オレが途中で倒れる。おまえに教える手間を入れても二人がかりでやったほうがずっと速えから、おまえにもう休めって言わねえんだ」
目を見開いた綺理に、悠蓮はにっと笑う。
「つうわけで、もう少し頑張れ。おまえの手伝いを当てにしてんだからよ」
「――はい！」

綺理は再び全身に気力がみなぎるのを感じ、残りの作業に没頭した。

夜も遅くなってようやく完成した緋閃湯は、てきめんの効果をもたらした。

赤みを帯びたその薬湯を患者に飲ませると、しばらくして荒い呼吸が落ち着いてくる。見守っていた者たちから安堵の息が漏れた。

「よし、もう安心だ。朝になる頃にゃあ、熱も下がって発疹も消える」

悠蓮の断言に、おお、と静かながら確かな歓声が広間を満たす。

そうして手分けしてすべての患者に緋閃湯を服用させると、綺理は悠蓮の「お疲れさん」というねぎらいを機に、自室に戻ることにした。

（よかった……。これで、毒のことは一安心……）

すれ違う里人からかけられる感極まった感謝の言葉を、朦朧としてきた頭で聞く。ぐったりした足取りで渡り廊下を歩いていると、ふっと気力が途切れた。――視界が回る。

あ、倒れる、と思ったとき、横から伸びた腕に抱きとめられた。

「綺理、大丈夫か？」

「冬惺……」

見上げれば、気遣わしげな琥珀の瞳に出合う。しっかりと支えてくれる力強い腕にすがったまま、綺理はこれ以上頭がぼんやりしないうちに問うた。

「ね、なにか新しいことわかった？……奏珠は？」

それは紅楓方の空騅将軍が動いていると判明したときから、懸念していたことだ。奏珠が姉の身や里を案じていたのは本当に思えたが、果たして彼はどちら側なのか、と。

「ああ……。あいつには鎌をかけたり問い詰めたりしてみたが、現時点では白だと判断した」

なんでも奏珠は、空騅が瑛国に戻っていたことは承知していたが、悠蓮に拾われたあとは紅楓方と一切連絡を取っておらず、紅楓方も奏珠の生存を知らないはずだという。そして紅楓方が鏡作の里に攻撃を仕掛けたという事実に、誰よりも衝撃を受けていたのも奏珠らしい。

「少なくとも空騅が俺たちの前に姿を現したのは、奴がこの地に奏珠のいることを知らなかった証だ。一応奏珠には監視をつけて、出歩くのを制限しているが……大した変化はない」

「……そっか」

よかった、と息を吐くと、冬惺が綺理の頭に手のひらをのせた。

「ほかのことはゆっくり休んでから考えればいい。――よく頑張ったな」

「――うん」

労りと感心のこもった優しいまなざしに、綺理は微笑んだ。

やっぱり途中で師匠任せにしようとしないでよかった、と思う。自分は最後まで頑張ったと、

そう胸を張れるだけのことをしていなければ、冬惺の言葉を恥じずに受け止めることなどできなかったから。

『よく頑張ったな』

誰に言われるよりも嬉しいその言葉に、全身を包む疲労がなんだか快いものに感じられてきた。今なら甘えてもいいかなあと思ったら、ずるずると体から力が抜けていく。

歩く元気がわくまで、もう少しこのままもたれさせてもらおう。眠気に覆われた頭でそんなことを考えていたら、すいと膝裏に手を回された。

ふわり、と抱き上げられる。

「疲れているはずだ。それにおまえ、夕食を食べそこねていただろう。部屋に戻ったら、なにか軽く食べるか？」

優しい声がすぐそばでする。冬惺の腕の中はあたたかく、心地よくて、まぶたが重くなる。

「……それより、このまま寝台に連れて行って……」

綺理は冬惺の肩口にことんと頭を預け、泥のような眠りに落ちていった。

すやすや眠る綺理を抱えて歩きながら、冬惺は内心焦っていた。

（今の台詞はなにかこう……まずいんじゃないのか？）

男に抱えられた状態で、甘えるような可愛らしい声で「寝台に連れて行って」だ。今回は自分だったからよいが、もし相手が妙な気を起こすような男だったら危険ではないか。

前に綺理に警戒されたときは傷ついたが、ここまで無防備だと逆に不安が募る。

昼間の一件でもそうだ。綺理は、見ず知らずの男に粉をかけられたという自覚が薄い。冬惺が苛立っていた理由も、純粋に「空騒が敵だから遠ざけようとしただけ」と思っていそうだ。

（やはりほかの男が近づかないように、俺がそばにいないと駄目だ。危なっかしすぎる）

けれど綺理の幸せそうな寝顔を見下ろせば、文句を言う気も失せた。

この長い一日で、もっとも活躍したのは彼女だ。襲撃者と立ち回りを演じたのに始まり、応急処置をして悠蓮を呼びにいき、毒薬の分析を行い、緋閃茸を採りに行った。そこまでも十分過重労働だったはずなのに、さらに毅然として解毒薬の調合に臨んだのだ。敬服に値する。

そんな彼女を、自分はどれだけ支えることができただろう。単純な力仕事を手伝うしかできない自分を歯がゆく思っていたから、最後にこうして頼ってくれてどんなに嬉しかったか。

思ううちに、冬惺は綺理の部屋の前にたどりついていた。

この離れの棟に人けはない。翔波は里の者をまとめるのに忙しいし、悠蓮は夕食を調達しに行っているし、侍女は母屋に出払っている。仕方なく、冬惺は綺理の体を支えたまま取っ手に手を伸ばした。室内に滑り入り、扉を足で閉めようとしたが、ぴったりとは閉まらない。

（いや、この場合、完全に閉めたら対外的によくないのか？）

先ほどの焦りと、さらには里に来る道中の屋形車でのことまで思い出してしまい、綺理を寝台に下ろしながら嘆息する。——昔はいちいちこんなことに気を回さずにすんだのに。

「……と、このまま寝かせるのはまずいか」

眠る綺理は薬師装束のままだ。冬惺は彼女の両手から手袋をはずし、髪結い紐をほどき、——腰の後ろに手を回して前掛け布の帯紐に手をかけたあたりで、変な緊張感に襲われた。

「まったく綺理も、前掛け布くらいはずしてから休めばいいものを。上衣も、こんな厚い布地のを着込んだまま眠る気か？　夜着にするには最悪の装束だぞ、これは……」

誰も聞いていないのに、説明臭い台詞が口をついて出る。できるだけ綺理に触らないよう気をつけながら、一番上の上衣を脱がし、寝入っている彼女の上体をそっと敷布に横たえる。

「襟もこんなに詰まっていたら、寝苦しいだろう。少しゆるめたほうがいいな」

言えば言うほど、なにかやましいことでもしているような気分になってきた。くつろげた襟元から、綺理の白い肌と鎖骨のくぼみの陰影がのぞき、冬惺は反射的に目をそらす。

（……そういえば横着子狐はどこに行った？　あいつ、里が落ち着くまで現れない気か？）

その辺の壺から真羅が出てきて茶化してくれれば、阿呆かと子狐を逆さ吊りにしていつもの調子に戻れるのに。……などと考えることで気をそらし、とにかく寝支度を調えさせる。

だが、これでよしと立ち去ろうとしたとき、綺理の手がいつの間にか冬惺の髪の房を握っていることに気づいた。引き止められたような錯覚に、冬惺はまた寝台のもとに膝をつく。

（昔は……いや、ここ最近までは、余計なことをあれこれ気にしたりしなかったのにな）

自分と綺理との関係に、男だの女だのというものが入ってくると、途端に話が面倒になる気がする。婚約のことがまさにそうだ。

（綺理が俺との婚約になにか思うところがあるというなら、やはり色恋絡みなのか……？）

『姫君、あなたは親に勝手に決められた婚約者がいるからといって、恋をするのをあきらめるわけではないでしょう？』

よりにもよって空雛の声が耳に蘇り、冬惺は硬直した。

さらに、つかの間の縁談相手であった明花のことを思い出す。彼女は、冬惺に会うまで見合いに乗り気でなかった理由として、「まだ一度も恋をしていなかったから」と言っていた。

（……まさか綺理もそうなのか？　婚約式を挙げて束縛される前に、恋をしてみたいとか？）

心の中で言葉にしてみると、急にそれが正解のような気になってきた。

役者に熱を上げるより毒薬にうっとりするような綺理だから、そうした夢見がちな発想はしないだろうと決めつけていたが、考えてみれば彼女も恋に恋してもおかしくない年頃である。

（特定の好いた男がいるというより、遥かにありえる。正式な婚約前に擬似恋愛をするくらいなら、道徳心にも反しないだろうし……待て、ここ数ヵ月の間に綺理の周囲に現れた『憧れの相手』候補が一人いないか？　度量のある大人で、綺理にやたら親切で、強くて割と頼りになり、顔のいい男を見慣れている綺理でも見目良いと思いそうな奴が。……人外の鳥だが）

綺理を『我が姫』と呼ぶ乾ノ神衆の姿が脳裏をかすめ、胸の奥でなにかひどく不快な感情がうずく。

そのとき、綺理が身じろぎをした。「ん……」とあえかな吐息を漏らして、頭を少しこちらに向ける。冬惺はその頬に落ちかかった横髪を払ってやりながら、ため息をついた。

結局、本当のところは彼女に聞かねばわからない。けれどもし推測通りの答えが返ってきたら、自分はいったいどうするのだろう。彼女になんと応じるのだろう。

（……綺理に聞けないのは、俺が、自分がどうしたいのかわかっていないせいか――？）

綺理の頬に軽く触れたまま、彼女の寝顔を見つめる。ずっとそばにいたのに、今もこんなに近くにいるのに、だんだん彼女が自分の知っている綺理ではなくなってきた気がする。

このまま俺の綺理ではなくなってしまうのだろうか――。そんなひやりとした思いが胸をよぎったとき、綺理の桜色の唇からかすかな声がこぼれた。

「……う、せい……」

「……綺理？」

彼女が冬惺の手のひらに頬を寄せるように身じろぎ、わけもなく胸が騒ぐ。――今のは。今の寝言は自分の名だったと思うのは、自惚れが過ぎるだろうか。

再び綺理の唇が動くのを見て、今度はもっとよく聞き取ろうと彼女のほうに身を乗り出す。

――がたん、と背後で物音がしたのは、そのときだった。



（――っ!?）

頭から冷水を浴びせられたような感覚。

ばっと振り返れば、翔波が細く開いた扉のもとに立っている。その表情からして、見られたのは確実だ。冬惺が眠る綺理の頬に手を当て、彼女に覆いかぶさろうとしていた光景を！

「いや、ごめん、その……」

「待……っ、誤解だ！」

冬惺は弾かれたように立ち上がり、綺理の手から自分の髪の房を引き抜いた。超高速で扉へと走り、翔波を廊下に押し出すようにして部屋を飛び出る。

「ごめん冬惺。こういうときは黙って鍵をかけるのが礼儀かなとも思ったんだけど、ほらやっぱり綺理は疲れて眠っちゃったところだし、そういうのは起きているときに合意の上で――」

「だから誤解だと言っている！　俺が綺理に不埒な真似をするとでも思うか！」

冬惺は扉を後ろ手に閉めながら凄んだ。

すると翔波は、赤くなって狼狽していたのから一転、冷静な態度で首を傾げる。

「でも君は、もし本当になにも意識していなかったら、ものすごく冷めた目つきと声と口調で『なにを馬鹿げた誤解をしている。いちいちその手の発想につなげていると品性を疑われるぞ』とかそんなことを落ち着き払って言うよね？」

「……っ」

冬惺は詰まった。これだからこの幼なじみは厄介だ。見抜かれすぎている。

現に、なにをしようとしていたかと問われれば、寝言の盗み聞きなので十分後ろめたい。口が裂けても言えない。これではいくら誤解だと主張したところで、砂粒ほどの説得力もない。

冬惺は冷や汗をかいたが、ありがたいことに翔波はそれ以上追及しないでくれた。

「まあ僕は、君が綺理のことを大事にしているのを知っているからね？　君が慌てているのが珍しかったからつい言ってみたけど、本気で君が綺理の寝込みを襲おうとしていたとは思ってないからね？　さっき見たことも誰にも言わないから、安心していいよ」

「あ、ああ……」

見られたのがこの幼なじみでよかった、と冬惺は先刻と真逆の感想を抱いてほっとする。

翔波のほうはその話題を切り上げると、ふと真面目な顔になった。

「それより本題。ようやく確認が取れたけど、空雛将軍が双鏡院から奪ったのは鏡作家に伝わる秘伝書のたぐいだったらしい。継承の儀についてもある程度書かれていたはずだって。ただし月氷澄の鏡は、予備も含めて全部無事」

「……そうか。ではやはり、現段階で空雛がまた里を襲撃することはないな」

冬惺もすぐに表情を改め、つぶやく。翔波が謎解きを期待する目でこちらを見たが、まだ手がかりがすべて揃っていないからと首を横に振る。

「葉厳に確かめたいことがあるし、明日、綺理もいる場で話す。……だが、それとは別に気に

なるのが『継承の獣』のことだ。今夜はまだ現れていないようだが――」

「いや。例の化け物は、今日も夕刻から出現していたのだよ」

三人目の声にはっと振り向けば、童子姿の真羅が壁にもたれていた。彼はたった今現れたところのようで、杯を出してひょうたん水筒の酒をこぽこぽと注ぐ。

「真羅。化け物は――」

「安心したまえ。今日もあれが消えるまで私が遠くに引き付けておいたのでね、今夜はもう現れまいよ。……しかしだね、もしあれが里に向かっていたら危ないところだったよ」

言って、真羅は杯の酒を干す。すっと表情を険しくした冬惺と翔波を、彼は杯の陰から上目遣いに見た。翡翠の瞳が、警告の光を帯びる。

「佐鏡の術師とやらは、全員毒で倒れたのだろう？――この屋敷を包んでいた結界、既にほころびはじめているよ。明日か明後日には、屋敷の守りは完全に消える」

――長い一日が、終わる。

未来への、確かな不安を残して。

六章　告白の決意

朝の光が射し込む部屋の中で、奏珠はかすかな気配を察してまどろみから覚めた。
「姉上……？」
仮眠していた長椅子から身を起こし、寝台のもとへ行く。
沙良の頬からは高熱による赤みが引き、腕や首筋に現れていた発疹も消えていた。奏珠が屋敷に来てからずっと閉ざされていた彼女のまぶたが、ゆるゆると持ち上がる。
「――お久しぶりです、姉上」
漆黒の瞳が自分を映すのを見て、奏珠は目礼をした。沙良が夢うつつのようにつぶやく。
「……常夜の国への岩戸が、開いたのかしら。それとも私が、常夜の国に来たの……？」
「どちらでもありませんよ。姉上も私も生きている。――ほら」
奏珠は沙良の手を取り、感触を確かめさせるように握った。毒に侵されていた間、力の入ることのなかった彼女の手が、ぎゅっと握り返してくる。
「奏珠……。あなた、生きていたの……！」
沙良の目に涙が浮かび、彼女は崩れるように微笑んだ。奏珠はわずかに詰まった声で応じる。
「姉上も、快復されてなによりです……――」

――きっと今の自分は、彼女とそっくり同じ顔をしているのだろう。



綺理がぐっすり眠って起きた頃には、毒を飲んだ者たちは全員熱が下がって目を覚ましていたという。綺理はその報せを、離れの居間で遅い朝食を食べながら聞いていた。

「症状の軽かった人でもまだ歩くとふらつくみたいだから、悠運どのは『あと二、三日は寝かせておけ』って言っていたけどね。でもとにかく、みんな助かった。綺理のおかげだ」

真向かいに座る翔波に真面目な顔で感謝され、照れ臭くなる。

「でも、師匠がいてくれなかったら私はなにもできなかったわけだし、お礼は師匠に……」

「うん、悠運どのにもお礼を言った。そして君がなんと言おうと、僕は鏡作家の次期当主として、玉造の綺理という薬師にお礼を言いたいんだ。――本当にありがとう」

丁寧に頭を下げられて、綺理はどぎまぎした。顔を上げた翔波に、つぶやく。

「……なんか翔波、急にすごく大人になったみたい。私と同い年なのに」

「へえ？　綺理にそう言ってもらえると嬉しいな。けど、もし僕が変わったように見えるなら、それは君と冬惺のおかげだと思う。こっちにもお礼を言うよ」

と言われても、綺理は特になにもした覚えがない。むしろ、心細かったはずの翔波を完全に

放置していたはずだ。だかそう言う前に、「君がなんと言おうとね」と笑顔で先手を打たれた。
「……ええと、そういえば師匠は？」
「悠蓮どのは奏珠の監視役を買って出ているから、今は一緒に沙良の部屋の続き部屋にいるはず。里を救ってくれた恩人として、しばらく滞在してもらうことになると思う」
「そっか。じゃ、真羅は？」
真羅が化け物から里を守ってくれていたことも含め、一通りの話は聞いているが、自分だけ彼の姿を見ていないのは寂しい。またその辺の壺から出てきてくれないだろうか。
「真羅ならいつも通り見当たらない。……壺のぞいても、いないよ？」
ちょうど食事を終えたので見に行こうとしていた綺理は、しょぼんと椅子に腰に下ろす。
翔波がくすりと笑った。
「それと冬惺は、さっき悠蓮どののところになにか質問しに行ったよ」
「……っ、そ、そう？」
昨夜のことが気になって自分の口から冬惺の名を出せずにいたのを、見すかされた気がする。
綺理はつい明後日の方向に目をやってから、思い直して口を開いた。
「あ……あのね、翔波。昨日のことでちょっと聞きたいことが――」
あるんだけど、と言おうとした矢先、扉が開いた。
噂をすればというのか、やってきた冬惺の姿に綺理は質問をのみこむ。

「ああ綺理。よかった、朝食を終えたところか。昨日の疲れは取れたか？」
「う、うん……」
昨夜の礼を言うのが気恥ずかしくて口ごもる。だが彼の表情を見た途端、そんな場合ではないのだと察し、綺理は気を引きしめた。
冬惺は真剣な顔つきでうなずくと、綺理と翔波に向けて顎をしゃくった。
「二人とも、佐鏡の葉厳と話をしに行くぞ。――たぶんそれで、空騅の目的がはっきりする」

綺理たち三人と葉厳。以前、鏡作の里に行くために下屋敷で交渉したときと同じ顔ぶれだが、今はあのときとははっきりと空気が違った。
「病床にて失礼いたします。まずは綺理姫と冬惺公にお礼申し上げます。お二人が里のためにしてくださったことと……奏珠への今ひとときの猶予の件、聞き及んでおります」
寝台の上で身を起こした葉厳は、そう言って深々と頭を垂れた。以前のような敵意をはらんだ態度はどこにもない。そのまなざしは綺理たちを信頼に足る人間と認め、恩人への敬意を示していた。寝台のそばに椅子を寄せて対面しているこの距離感も、今では自然に感じる。
「それに次期当主もご立派であったと、みなが申しておりました」

漆黒の目が翔波を映してふっとやわらいだ。翔波は照れたように頬をかき、それから居ずまいを正して言う。

「葉厳どの。今回空騅将軍が里に襲撃を仕掛けたことに関連して、冬惺公閣下がいくつか下問したいとのことです。答えられる範囲でいいので、どうか答えてさしあげてください」

葉厳は少し目を瞠った。この場で翔波が仲立ちをするのは、冬惺の命ではなく鏡作家次期当主の命によって答えてほしいという意味だ。同時に、「冬惺といえども翔波を通さずして直接鏡作の民に命令することはない」という、北部の流儀に則った臣従関係の明示でもある。

「わかりました。では、私に答えられる範囲のご下問であることを願いましょう」

全員の視線が冬惺に集中する。綺理と翔波もまだなにも教えてもらっていないのだ。

そして冬惺は、綺理にとっては呪文のように聞こえる文句を口にした。

「――この里に、『月の祭祀場に赤い解毒の花がある』という言い伝えはないか？」

途端、葉厳の体が雷に打たれたように震える。

「なぜ閣下がそれを!?　いったい、どこで……！」

「では、本当にそうなのか……」

冬惺がゆるく息を吐き、目を伏せた。

「先に言っておくが、里の誰かが俺に漏らしたわけではない。――綺理。緋閃茸のあったあの洞窟に入ったときのことを覚えているか？」

「うん。入ってすぐに緋閃茸が見つかったから、とりあえずそこにある量を確かめて……その間に冬惺が、洞窟の奥のほうにも生えてないか探しに行ったのよね」

比較的夜目の利く冬惺は、ほどなくして戻り、なかったと告げた。しかしそのときには入り口付近に十分な量の緋閃茸があると判明していたので、特に問題はなかったのだ。

話すうちに、綺理の脳裏にある可能性が閃いた。

――もしやあのとき冬惺は、洞窟の奥で決定的なにかを見つけたのだろうか？

案の定、冬惺は言った。

「あの奥には境界石が置かれ、縄が張られていた。この鏡作の地の中でさらに特殊な空間ということは、禁域か聖域。縄の先には行っていないが、奥が自然窟のままではなく人の手が入っていたことを考えると、後者。そしてこの地に存在しうる聖域に、一つ心当たりがあった」

沙良に祭祀場を案内されたときのことを覚えているか、と彼は続けた。

「沙良はあそこを『古代からの陽の祭祀場』と言った。普通、祭祀場は太陽を祀る場所。それにわざわざ『陽の』とつけたのは、太陽以外を祀る祭祀場が存在するからだ。そして双鏡院を見れば、鏡作の里では太陽と月を一対で神聖視しているのは一目瞭然。――つまり、『月の祭祀場』がどこかにあるはずだということになる」

洞窟の奥に入ることを禁ずる伝承があるのはなぜ。隠された祭祀場を見つけられないようにするためだ。冬惺はあの洞窟の中で、既にあそこがもう一つの祭祀場だと勘付いていたのだ。

（だから里からそんなに遠くないはずだって気づいて、帰りは近道を探そうって言ったの？）

冬惺は、呆然としている面々を前に言う。

「それにあそこが月の祭祀場だと仮定すれば、空騅がなぜあの毒を盛ったのかも説明がつく」

「？　なぜって、継承の儀を妨害するためじゃ……でも、そうか。本当に継承の儀をさせたくないのなら、そもそも崖崩れを起こして僕たちを鏡作家領に誘導したりはしないのか」

翔波の指摘した矛盾をひとまず措いて、冬惺は言葉を継いだ。

「『緋閃茸しか効かない珍しい毒を盛られたが、運良くここは緋閃茸の手に入る地域だった』？　馬鹿な、それでは話ができすぎだ。すべては逆。空騅は解毒薬を採りに行かせるために毒を盛ったんじゃないか？　解毒薬のある場所が、特殊な場所だと知っていたから」

（――――っ！）

瞬間、綺理の頭の中で空騅の言葉が雷鳴のように閃いた。

『言っただろう？　ご褒美だと。それにもう目的は果たした』

赤酔木に通う獣の跡を追えば、緋閃茸のもとにたどりつくように。解毒薬を採りにいく人間を追って、空騅は月の祭祀場の在り処を知ったのだ！

「――冬惺公閣下。あなたは、恐ろしいほど頭がよい」

葉厳があきらめたように首を振った。彼は覚悟を決めた声音で、答える。

「閣下方がもう確信しておられるのに、これ以上隠そうとするのは無駄でしょう。――そうで

す。閣下方が行かれた洞窟こそ、当主継承の秘儀が行われる月の祭祀場なのです」

『月の祭祀場に赤い解毒の花がある』

それも里の年長者ならたいてい知っている話なのだと、葉厳は語った。

ずっと昔、里の者が珍しい毒によって倒れたとき、その花を飲ませて一命を取りとめたのだという。記録に残っていた症状からして、その毒は今回盛られた物と同一であったらしい。

赤い花とは、一見すると花に見える緋閃茸のことだろう。鏡作の里で緋閃茸が採れるという噂も、実際に緋閃茸が使われた事実があったからこそ流れたのだ。

「里のみんなが今までその話を連想しなかったのは、なまじ僕が解毒薬の材料は茸だって明言しちゃったからか……」

翔波が渋い顔でつぶやいた。葉厳が続ける。

「もしも綺理さま方のような薬師がおられず、月の祭祀場の場所を知る者が全員毒にやられてしまってもいなかったら、里の者が解毒薬を採りに行っていたでしょう。そして、その者が尾行されていたはずです。いわば我々は、命を秘密で購った」

綺理は、昨夜師から教えられた緋閃茸の知識を思い起こした。

緋閃茸はそのまま服用するだけでも解毒効果がある。ただしその場合大量に摂取する必要があるため、洞窟に生えていた緋閃茸をすべて集めても四、五人しか助けられなかっただろう。

――自分たち薬師が居合わせた意味はあった。月の祭祀場の在り処を空騅に知られることなく、里の者を助けるのは無理だった。

頭ではそうわかっていても、みすみす空騅に道案内してしまった自分が悔しい。

綺理が膝の上でぎゅっと拳を握っていると、冬惺が言った。

「空騅の目的が継承の儀にあることは明らかだ。もっと言えば、継承の儀を経て当主の紋が刻まれたあとの月氷澄の鏡が狙いだろう。あれは鏡作家の継承者の証で、大家の権威の象徴。…手に入れれば、紅楓王家再興に利用できるからな」

…

ひやりとした空気が部屋を流れた。

それでは月氷澄の鏡さえ横取りすれば、紅楓方にとって鏡作は用済みだ。むしろ鏡作の里を滅ぼしてしまったほうが、紅楓王家は大家を継ぐ存在になれる。空騅が毒を盛るという手段をあっさり使ってきたのも、いずれ里を滅ぼすつもりだからだろう。

――そもそも、紅楓が鏡作を潰したがっていないと思うほうが、間違いだったのだ。

白桜も紅楓も、同じ金蘭王家から分かたれた存在。金蘭王朝より古き大家である鏡作を、白桜が滅ぼしたがっているというのなら、それはそのまま紅楓にも当てはまる。

ましてや紅楓方にとって、鏡作家は既に敵だ。

「しかし……狙われているからといって、これ以上継承の儀を延期するわけにはいきません」

葉厳がうめくように言った。

「それは、佐鏡家の張っていた結界が破れてしまうからですか？」
「はい、翔波さま。術師が回復して結界を修復できるようになるまでには、数日はかかりましょう。その間にも『継承の獣』は強大になり、里を襲います」
綺理たち三人はちらと目配せをする。真羅に頼めばあと数日くらいは化け物が里に近づかないようにしてくれるだろうが、それをここで言うわけにはいかない。
（それに真羅も、化け物騒ぎを解決しないと妖王がここを狙いそうって言っていたし……）
「あの、延期できないとなると、いつ継承の儀を行うことになるんですか？」
綺理が遠慮がちに手を挙げると、葉厳は苦しげに答えを搾り出した。
「……明日の未明です」

極端な話、形式的な儀式をすべて省略すれば、継承の儀は次期当主と補佐役の二人だけで行えるのだという。
一番の問題は護衛だが、毒を受けた者たちは戦えるほどまでは回復していない。さらに双鏡院で襲撃を受けて負傷した者を除くと、腕に覚えのある者はほとんど残らない。下屋敷から増援を呼ぼうと送った使いも、途中の道が落石で封鎖されていてすぐに戻ってきたらしい。
「さすがは伝統ある隠れ里、呆れるほどの脆弱さだな。断っておくが俺は、危険だとわかっていながらこんな紙より薄い警備で大事な従者をのうのうと送り出せるほど腑抜けではないぞ」

冬惺がそんな言い方で同行を申し出ても、葉厳はもはや断りはしなかった。
「閣下は既に祭祀場の場所をご存じです。となれば我々には、閣下がいらっしゃるのをお止めするすべはありません――」

「なんか翔波、大変な当主継承になっちゃったね……」
葉厳の部屋を出て、沙良のもとに向かいながら、綺理はぽつりと言った。
継承の儀が当主継承の試練を受ける儀式だということは、綺理も先ほど聞いた。その試練の詳細がいまだに謎で、おまけに儀式の場が狙われるとなれば、一番不安なのは翔波だろう。
けれど翔波の返した言葉は、自分自身を案じるものではなかった。
「そうなんだよね。儀式の補佐役って沙良だからさ、具合がどうか心配で」
「沙良か。俺が悠蓮に緋閃苔のことで質問に行ったときは、また眠り込んでいたがな……」
三人は悠蓮に沙良の体調を聞こうと、彼女の部屋ではなくその続き部屋に足を向けた。
そして続き部屋の扉を開けると――。
そこには、すべての緊張感をぶち壊す光景が展開されていた。

「や……やめてください。それだけはお許しを……」
「なんだよ、命の恩人の言うことが聞けねえの？　ほら、観念してこっち向けって」
真紅の髪の青年が、嫌がる黒髪の美少女を壁際に追いつめ、顎に手をかけて無理やり自分のほうに顔を向けさせようとしている。少女のほうは装束の上衣が半ば脱げかけているし、普通なら血相を変えて少女を助けに入る場面だ。
――この二人の性別が、見た目どおりであれば。
「師匠も奏珠も、なにやってるんですか……」
綺理たち三人は、扉口で思い切り脱力した。
「……っ、……なっ」
こちらに気づいた奏珠が、赤くなったり青くなったりしながら口をぱくぱくさせる。悠蓮は彼を壁に押し付けたまま、つまらなそうに口をとがらせた。
「だってせっかく可愛くしてやろうってえのに、こいつ化粧だけは嫌だって逃げようとすんだぜ？　服も綺麗に着付けてやったそばから、脱ごうとするしよ」
「当たり前です、老師！　私はこんな――」
ひゅっ、と風を切る音がした。
長い縄のついた分銅が、悠蓮たちの脇の壁にごすっとぶち当たる。
「……は？」

綺理たちが縄の反対側に目をやれば、そこには夜着姿の沙良が立っていた。続き部屋との境の扉から分銅縄を投げた沙良は、慣れた手つきで縄をたぐり、分銅を手元に戻す。
「そこのあなた、私の弟になにをしているんです……？」
沙良は体調のせいなのかなんなのか青ざめた顔をして、わなわなと悠蓮を指さした。
沙良が悠蓮を見たのはこれが初めてなのだろう。悠蓮が女性であると知らなければ、なおさらいかがわしい光景に見えたはずだ。
「姉上！　そんなに急に動かれては……！」
奏珠が猛然と悠蓮を振り払い、足がふらついている姉に駆け寄る。沙良は、あでやかな舞姫のような恰好の弟に支えられながら、悠蓮をきっと睨んだ。
「奏珠にこんな恰好をさせるなんて、趣味を疑います！　この子に似合うのはこんなけばけばしい装束ではなく、清楚系です！　なぜそれがわからないんですか！」
「あ、あああ姉上……？」
斜め上の怒り方をする沙良に、奏珠が撃沈する。
そこに悠蓮が、真紅の前髪をさらりとかき上げながら流し目で歩み寄った。
「へえ……眠り姫も美人さんだったけど、やっぱり起きてるときのほうがずっとオレ好みだ」
「は……、あ、あの……」
見た目美青年の悠蓮に顎をすくい上げられ、沙良の頬に赤みがさす。免疫がないのか、ぽー

っとなっている彼女に、悠蓮は女性にしては低い声で甘くささやく。
「おまえ、名前は？　オレの弟子にならねえか？　面白いことを教えてやるぜ。いろいろな」
「……い、いろいろって……？」
「老師――――っ！　姉上をたぶらかさないでください!!」
もうなにがなんだかわからない。
「……うん。私、忘れてたかも。師匠いるところに騒動ありって」
「……それにあの双子、悠蓮どのの前だと本当に人格変わるよね。こっちが素なのかな……」
「俺はもう、この倒錯しきった阿呆劇場になにも言う気が起きん……」
男装の麗人が美少女を口説き、美少女と同じ顔の女装少年が必死にそれをやめさせようとする、という珍妙極まる事態は、三人が綺理たちの存在を思い出すまで続いた。

「――というわけで。割と元気そうで安心はしたけど、まだ万全にはほど遠いよね？　補佐役ができるくらいまで回復しそうになかったら、代役を立てられないか検討してもらうけど」
仕切りなおして翔波が継承の儀の件を話すと、沙良はしっかりした面持ちで答えた。
「いいえ、私がお役目を果たします。どの道、補佐役を務める資格のある者は全員毒を受けておりますし。……これでも私は常日頃から体を鍛えておりますので、回復は早いはずです」
「！　姉上、無茶です！」

「奏珠。あなたはあくまで、冬惺さま方と『一時』休戦の身なのでしょう？」
沙良は部屋の隅に控えている奏珠に、努めて感情を殺した声で一線を引いた。
一線――敵味方を区切る線は、厳然として存在している。
いくら今回の空騒の動きに奏珠が関与していなくとも、いくら奏珠に故郷に害なすつもりがなくとも、彼は依然として紅楓方の人間なのだ。敵方である彼には口出しをする権利はない。
黙った奏珠を一瞥して、冬惺が言った。
「悠蓮。俺は里に不安要素を残しておきたくない。休戦協定は承知しているが、継承の儀を行っている間だけでも奏珠を拘束して閉じ込めておきたい」
「なんだよ、冬惺。オレが見張ってるんじゃ信用できねえってのか？」
「もし奏珠が任務として動き出したら、おまえごときでは抑止力にならないと言っている」
冬惺と悠蓮の間で火花が散る。どうなだめたものかと綺理が迷っているうちに、当の奏珠が
ため息混じりに片手を挙げた。
「では睡眠薬をいただければ、私はそれを飲みます。私を一定時間行動不能にしたいなら、そのほうが確実でしょう？――いかさまが心配なら、綺理さまがその薬を調合してください」

夕刻になって『継承の獣』が里の近くに現れ、一時屋敷に緊張が走った。しかし真羅が動いてくれたのか、巨大な影の化け物はすぐに森の中へ進路を変えた。

そして夕食後。綺理は睡眠薬を調合して奏珠に飲ませると、ふと思い立って薬房に戻った。気分を落ち着ける薬草茶を淹れて、翔波の部屋の扉を叩く。

「翔波、寝る前に薬草茶飲まない？　ほら、緊張してなかなか寝付けないと、肝心なときに寝不足になっちゃうでしょ」

盆を手に中に入ると、翔波は笑顔で綺理を迎えた。

「ありがとう。碗は二つある？　一緒に飲もうよ」

「うん。そのつもりでちゃんと持ってきたの。……というかいつもの癖で三人分淹れちゃったけど、よく考えたら冬惺はこの薬草茶好きじゃないのよね。だから半分こして飲みましょ」

小さな卓に向かい合わせに座り、綺理は碗に薬草茶を注いで押しやった。

翔波は熱い茶を少しすすり、そういえば、と軽く首を傾げる。

「君が今朝聞こうとしていたのってなんだい？　ほら、昨日のことで聞きたいことが、って」

「あ、でもあれは、別に重要な相談ってわけじゃないの。また落ち着いてからでいいから」

「綺理が僕になにか相談したいっていうなら、それは僕には重要ごとだよ。今僕の気を散らさないようにって心配してくれているなら、むしろ言って。既に気になっているから」

「……ありがと。それじゃ……でも、本当にすごく個人的なちっちゃいことよ？」

綺理はそう前置きすると、熱い碗を両手で包んだまま翔波を見た。
「あのね、昨日の夜私を寝台に運んで寝支度を調えてくれたのって、冬惺……よね？」
「うん。僕はなにも手伝ってないからそのはずだけど……なに。もしかして、その、なにかされた記憶とか形跡があるとか……？」
片眼鏡の向こうで青銅の瞳が険しくなり、綺理は慌てて首を振った。
「そ、そんなんじゃないの。ただ昨日は私、体を清める元気もなく寝ちゃったから。……外歩きで汚れてたし、汗臭かったんじゃないかな、とか気になっちゃっただけで」
「なんだ、そんなことか。そんなの、全然気にすることないよ」
「……ていうか冬惺は、私に手を出さないし……」
「……」
今朝起きたときは自分の服装に慌てふためき、一瞬妄想の世界に足をつっこみかけたが、冷静になってみれば、寝苦しくないようにという配慮以上のことは何一つ行われていなかった。
「や、もちろん手を出してほしかったってわけじゃないわよ!?　わけじゃないけど……冬惺はなにも意識しないでこういうことできちゃうんだって思ったら、なんか……ね」
綺理は薬草茶を吹き冷ましながら、長いため息をついた。
「でも考えてみたら、このまま婚約して結婚までいっちゃったら、今まで通りの関係じゃいられないでしょ。つまりその……冬惺も私になにもしないってことはないわけで……」

けれど結婚後に冬惺が綺理に触れたとしたら、それは夫婦だからだ。夫婦の義務だから。
『婚約したからといって、心まで相手に捧げなくてはいけないわけじゃない』
記憶の中で空雛が揶揄するように言う。
婚約し、結婚するからといって、冬惺の心が手に入るわけじゃない。そんなことはわかっているつもりだった。だが本当はわかっていなかった。考えずにいようとしていただけだ。
「翔波……やっぱり私、前に言ったの撤回する。前はこのままで十分幸せって言ったけど、女の子として見られないままなりゆきで結婚だけしちゃうのは……やだ」
綺理も十六の乙女として、恋しい相手からの口づけを夢見たことくらいはある。
けれど恋しい相手から、義務を果たす以上の心がない口づけをされるのを想像したら、ひどく苦しかった。相手に一切悪気がないと思うだけに、余計に。
「――なら、告白しちゃったら？」
ぽろりと投げかけられた言葉に、綺理はむせそうになった。
「こ、ここ告白!?　でも、だって、そんな、まだ……」
碗を卓に置き、手をわたわたと振るが、翔波のほうは至って真面目だった。
「異性として意識されていない状態で告白しても、空振りするだけだと思ってる？　逆だよ。思い切って気持ちを伝えてしまうことで、そこから冬惺に異性として意識してもらうんだ」
「……う。で、でも、今までずっとただの幼なじみとしか思ってなかった相手に告白されたっ

て、『なんか唐突に変なこと言い出したけど、どうしちゃったんだろ』くらいにしか思わなくない？　もともとそれなりの雰囲気がないと、どきどきすらしないっていうか……」

「――そんなこと、ないよ」

不意に、翔波の声に力がこもった。またたいた綺理のほうに、彼が少し身を乗り出してくる。

「真剣に、本気の想いを込めて告白すれば、きっと伝わるよ」

「翔波……？」

普段話すときよりも近い距離から、熱を帯びた青銅の瞳にひたと見つめられる。

なんだか目をそらしてはいけない気がしてじっとしていると、卓の上にのせていた綺理の手に、翔波の右手がそっと重ねられた。そのぎごちない指の動きから、緊張が伝わってくる。

彼の唇が、ひたむきな声で、言葉を紡ぐ。

「綺理。――僕は、君が好きだよ。一人の男として、君に恋してる」

呼吸が、止まった。彼の声以外のすべての音が、意識から失せた。

綺理は青銅の瞳に囚われたまま、自身の目を大きく開いた。

（翔、波……）

「僕は君との思い出をみんな覚えてる。君に友達だと言ってもらえて心が震えた。君の笑顔を

見るたびに、君が僕の手を握ってくれるたびに、嬉しくて胸があたたかくなった。君といると楽しくて、君がいないと寂しくて、君のことがもっと知りたくて、いつも君を見つめていた」

翔波はゆっくりと、けれど長年の想いが堰を切ったかのようにとめどなく語る。

言われた意味が頭にしみこむにつれて、綺理は頬が熱くなってくるのを感じた。

(……翔波が、私を)

「そうして君が冬惺に恋をしているんだって気づいたとき、たぶんそのとき、僕は君に恋をした。——冬惺に恋している君に、恋をした」

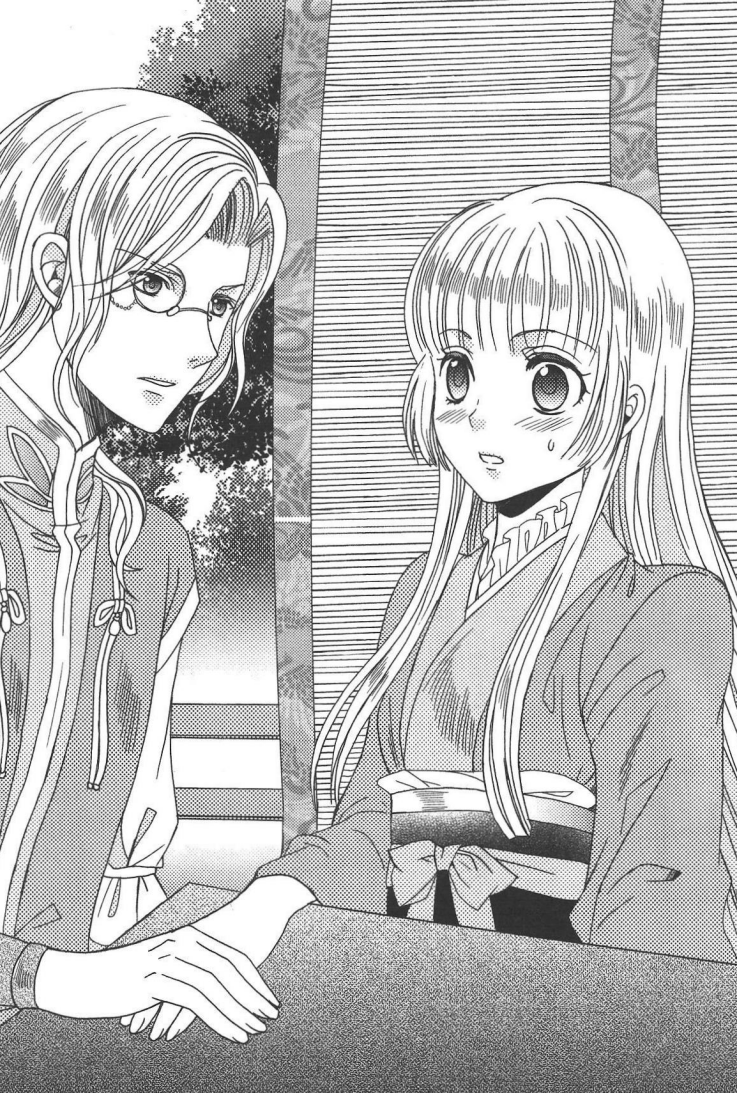
甘さと切なさを秘めたささやきに、心臓が高鳴った。焦がれるようなまなざしから、重ねられた手のひらから、彼の熱が流れ込んできたかのように体が火照る。

「綺理。僕は君に頼られるのが好きだよ。君の役に立てるのが嬉しいよ。頑張っている君を見ると、僕も頑張ろうって元気がわく。君の目に映る僕が立派でありたいと思うから、君への想いで強くなれる気がする。——それは閣下への忠誠とはまた別だ。僕の心の半分は忠誠として閣下に捧げているけど、もう半分は、綺理、君に捧げたい。……君に、奪われている」

安易に一番大切と言われるより、冬惺を引き合いに出されたほうが本気のほどが伝わってくる。自分に向けられる真摯な想いが胸にあふれそうになり、鼓動が静めようとも静まらない。

「綺理。——僕の想いは、君を困惑させるだけかな」

沈黙したら肯定になってしまう問いかけに、頭で考えるより先に首を横に振っていた。



「そ、そんなことないけど。でもあの、今までそんな風に思ったことなかったから、びっくりしちゃって、びっくりしちゃって……」

（『なにも知らないで恋愛相談とか恋路の応援をさせちゃってごめんね』？　違うよね。翔波は私にそう考えてほしくないから、頼られたいとか役に立ちたいとか言ってくれたんだよね。でも『私は冬惺が好きなの』なんて、もっと今さらすぎるし……。そ、それにいつから？　いつ頃から翔波は、私のことそんな風に……）

綺理は、翔波との思い出が目まぐるしく浮かぶ頭で、答える言葉を必死で探す。

――と。

「どきどきした？　『今までずっとただの幼なじみとしか思ってなかった相手からの告白』」

重ねられていた手が離れ、呪縛が解けた。

甘い空気が霧散する。え、と視線を上げれば、翔波がにこにこ笑顔でこちらを見ていた。

（ええと、つまり……幼なじみからの告白でどきどきするかどうかの、実験？）

綺理は『告白』の直前の会話を思い出し、ぱたっと卓に突っ伏した。

「なんだ、そういうこと!?　もう、びっくりしたー。どきどきしたに決まってるでしょ！　すっごく驚いたし、私、男の人に告白されたの初めてだったのよ？」

「あれ、昨日空騅将軍に言い寄られたんじゃなかったっけ？」

「……あ、そういえば？　でもあんなの告白のうちに入らないもん。どきどきしなかったし」

「ふうん。じゃあ僕の告白実験は告白のうちに入れてもらえたんだ。そんなにどきどきしてもらえたとは光栄だね。僕もけっこう捨てたものじゃないのかな」

いつも通りのあっけらかんとした調子で言われ、恨めしげに彼を見上げる。

「本当にそうよー。もし冬惺のこと好きじゃなかったら、私、絶対にぐらっときてたもん」

「あっはっは。じゃあ綺理も、こんな感じであの恋愛音痴鈍感馬鹿をぐらっとこさせなきゃ」

綺理はつられて笑った。力がわき上がるのを感じ、身を起こす。

「うん、ありがと！　それじゃ私も、勇気出して告白してみる」

「その意気。それじゃ、いつにする？　二人きりの状況作りその他もろもろ、協力するよ？」

そうとなると悩む。どうせなら最高に素敵な場面で告白したいと思うのが乙女心だが、あまり引き延ばしても決意がしぼむ。次の新年祭では遅すぎる。となると――。

「……ねえ、翔波。昔、夢雪草の種を蒔いたところあるでしょ。玉造の里に着いたら、あの神木のところで冬惺に告白しようと思うんだけど……いい？」

おそるおそる問うと、翔波が目をぱちくりさせた。

「そりゃ、うまく花が咲いてたらすごくいい状況だと思うけど……なんで僕に許可を？」

「だって、あそこは三人での思い出の場所だったでしょ。それなのに私と冬惺が二人だけで行っちゃったら、翔波が嫌じゃないかと思って」

翔波は綺理をまじまじと見つめると、ふっと瞳をやわらかくした。

「気持ちは嬉しいけど、せっかくいいと思う場所があったんだから、僕のことは気にしないで二人で行ってきなよ。僕は、僕の気持ちが君たちの仲を妨げてしまうのが一番嫌だから」
「……ん、そっか。じゃあ玉造の里に着いたら、婚約式を挙げる前に冬惺を誘ってみる！」
綺理は胸の前で手のひらをぱちんと合わせると、勢いよく立ち上がった。
「うん、頑張れ。それじゃ花期に間に合わせるためにも、早くここでの騒動を解決して玉造の里に向かわないとね。僕も頑張るよ」
そうして、おやすみと言い交わして彼の部屋を出るとき、綺理は振り返って微笑んだ。
「翔波、本当にありがとね。すごく勇気をもらったし……嘘の『告白』でも、嬉しかったよ」

ぱたんと扉が閉じられたあと、翔波は椅子に沈み込んでかすかに笑んだ。
「嘘でも嬉しかった、かあ……」
目を閉じてその言葉を宝物のようにつぶやくと、少し置いて苦笑する。
「――真羅、その辺にいるんだろ。出てきなよ」
言って目を開ければ案の定だ。卓の上に、ひょうたん水筒を背負った子狐がお座りしている。
子狐真羅は水筒を下ろすと、どこか気遣わしげな翡翠の瞳で翔波を仰いだ。
「……従者。君は、嘘は言っていないだろう？」

ああやっぱりこの大淵妖は誤魔化せない。翔波は肯定の代わりに、また苦笑する。

――そう。翔波はあの『告白』を実験とは言っても、嘘とは一言も言っていない。

「君がキリと少年を両想いにしようとする本当の理由は……それなのかね？」

「……うん」

もう真羅相手になら隠す必要はないのだと思ったら、翔波は素直にうなずいていた。

主人の婚約者に横恋慕――なんて、当人たちにはもちろん、ほかの誰にも言えやしない。けれど人の世のしがらみの外にいる真羅になら、明かしてしまってもいい気がした。

ぽつぽつと、秘めていた想いを吐露する。

「綺理は冬惺を一途に想っていて、冬惺も綺理のことを誰よりも大切にしている。本来ならもうあの二人はくっついて、僕もすっぱりあきらめがついていたはずなんだ」

それなのに冬惺が綺理へ寄せる想いの種類は、いまだに曖昧だ。

それでは翔波がすっきりしない。身を引くからには、翔波が綺理に寄せる想い以上に、冬惺が綺理を愛しく想っていなければ納得がいかない。

「……だからさっさと両想いになって、誰かがつけ入る隙なんてなくしてほしいんだよ。じゃないと僕の気持ちが、いつまでたっても宙ぶらりんなままだから」

たわむれに真羅の尻尾をいじってもよけられないのは、真羅なりの気遣いなのか。調子に乗ってふさふさ尻尾を堪能しまくっていると、子狐真羅が首を傾げた。

「だが君は……それであの二人のそばにいて、辛くはないのかね？」

翔波はきょとんとして、「それはないんだ」と否定する。

「あの二人がいい雰囲気になっているのを見て、嬉しくなるのは本当。僕は冬惺以外の男に綺理を取られたくないし、綺理以外の女性にも冬惺を取られたくない。綺理が告白してうまくいったら、僕は誰よりも喜ぶよ。……まあ、真羅には一杯付き合ってもらうかもしれないけど」

「ふむ。私でよければ、祝杯でない一杯に付き合おう」

子狐が真面目くさってうなずくのを見たら、なんだか心が軽くなった。

それに、と翔波は胸中で独り言ちる。

一生伝えるつもりのなかった想いを、『告白』をしていたあの間だけは伝えることができた。

そしてあのとき、あの時間は、綺理は確かに翔波のものだったのだ。その瞳に映っていたのは翔波で、彼女の火照りも鼓動も、恥じらうような仕草も、みんな翔波一人のものだった。

（……可愛かったなあ）

甘い夢のような時間を思い出して、つかの間微笑む。

そうして翔波は、確かな決意を胸に刻んで、薬草茶をあおった。

『君の目に映る僕が立派でありたいと思うから、君への想いで強くなれる気がする』

（――当主継承の試練がどんなものであろうと、立派に果たしてみせる）

七章　そして、大いなる理の狭間の戸は開き

月の祭祀場の前の広場は、たいまつで明々と照らされていた。

たいまつの数だけ数えれば大人数でやってきたように見えるが、この場にいるのは次期当主たる翔波と補佐役の沙良、それに冬惺と綺理だけである。護衛に同行していた五人の紺装束の里人は、闇に紛れるようにして森に散り、どこかで周囲を警戒しているらしい。

正装姿の沙良は、翔波たち三人を洞窟の前まで案内すると立ち止まった。

「――これより先は、次期当主と私以外は進むことまかりなりません。外でお待ちください」

「それは、奥で待ち伏せされている危険性を考慮した上での禁止事項か？」

「はい。秘儀ですし、余人がいると儀式が歪んでしまいますので。もし待ち伏せがあれば気配でわかりますから、秘儀を始める前に引き返してきます」

敵の狙いが月氷澄の鏡の横取りなら、儀式を滞りなく行わせたいのは向こうも同じだ。すぐには妨害は入らない。沙良はそう言いたいらしく、冬惺も仕方なさそうに引き下がる。

翔波は二人の幼なじみに安心させるように笑み、力強く言った。

「大丈夫。無事に終えて戻ってくるよ。どっちかと言うと、心配なのはそのあとか、待機してる君たちのほうだろ。君たちこそ、いつ襲撃されるかわからないんだから気をつけなよ？」

（……とは言ったものの、乾ノ術が使えない時間帯なのは痛いよなあ）

二人の激励を受けて洞窟に入った翔波は、沙良と共に歩きながら密かにため息をついた。太陽の出ていない時間、武装を解かれたように心もとない気分になるのは乾術師の常だ。

少し奥へ行くと、冬惺の言っていた通り、二つの境界石が門のように置かれていた。

その間に張られた縄に、沙良は手にしたたいまつを近づけ……無造作に焼き切った。

「進みましょう、翔波さま」

「いや、ちょっと、こんな縄の越え方でいいのかい!?　前々から思っていたけど、君って大雑把だよね？　それとも今のやり方が正しいと思っていいの？」

「いいはずです。こう教わってきましたから」

沙良はさっさと先へ進んでいった。翔波は念のため火を踏み消してからあとを追う。

境界縄から先へ行くと、洞窟の壁に人の手で整えられた形跡があるのが見られた。通風孔もところどころに設けられており、かなり奥が深そうである。

「……それより沙良。君さ、具合は大丈夫なのかい？　相変わらず顔色がよくないけど……」

翔波が問うと、沙良はくすりと笑った。白装束の裳裾を翻し、こちらを振り返る。

「この顔色は化粧ですから、あなたなどに心配されることはありませんよ。鏡作の翔波」

共に歩いていた補佐役の雰囲気がからりと変わり、翔波は息をのんだ。
嘲るような表情。棘を含んだ口調。声色を使わなくなって、微妙に低くなった声――。
「――君、奏珠のほう!?」
「無論。姉上の体調が思わしくなかったので、無理やり交替させてもらいました」
でも屋敷を出る前に、奏珠が薬で寝入っているのを確認したのに――と言いかけて、翔波は気づいた。この双子は、睡眠薬を飲んだ時点で既に入れ替わっていたのだ。完全に騙された。
「……女装も化粧も、あんなに嫌がっていたくせに」
「人に玩具にされるのが嫌なのと、無意味な女装をして悦に入る趣味がないだけです」
悔しまぎれの翔波の言葉に、奏珠は肩をすくめる。
「ご心配なく。休戦協定は有効ですし、今の私は鏡作の民として動いていますから」
「それにしてもよく沙良が協力した……って、まさか沙良は、君を逃がすつもりで？」
ここで入れ替わっておけば、奏珠には継承の儀のあと逃亡する隙が手に入る。だがそうなれば、罪人を逃がしたかどで沙良の罪を問わないわけにはいかなくなる。
「ええ。ですが私に逃亡の意思はない。だからこうして正体を明かしたんです。……私は逃げませんから、姉上には咎めがいかないようにしてください」
互いのためなら自己犠牲も厭わない双子の様に、翔波は歩きながら眉をひそめた。
「……あのさ、確か君たちって僕の一歳上だよね。ということは、鏡作が白桜方になったとき

まだ八歳だろ。それからずっと会ってなかったにしちゃ、ずいぶん仲いいんじゃないかい？」

沈黙が下りた。二人の足音とたいまつの燃える音だけが、暗く長い洞窟に響く。

「――つまらない話をしましょうか」

不意に奏珠が口を開いた。彼は翔波の少し前を行きながら、淡々と続ける。

「鏡作家が間者を育てていたというのは、前に言いましたね。私と姉上も、幼い頃から一緒に修行をさせられてきました。ですが六歳になったとき、一人は里に、一人は鏡作家当主に付き従って里と紅楓王家の離宮を行き来することになったんです。そのとき私のほうが当主付きになったのは、本当に偶然。――ですがそれで、私と姉上の命運は分かれました」

翔波ははっとした。その原因は鏡作が白桜方になったことに他ならない。つまり次期当主たる翔波が、白桜の冬惶を主人に選んだこと――紅楓方を敵に選んだことだ。

「鏡作家がほぼ全滅し、唯一の生き残りが寝返ったとの報が入ったとき、私は紅楓方の陣営にいました。紅楓方の動きは素早かった。鏡作公配下のほかの者は捕らえられ、里の情報を吐かされて殺されました。……空雕将軍が里の事情に通じて襲撃を仕掛けてこられたのは、そのためでしょうね。見逃され、紅楓王家に拾ってもらえたのは私だけです。まだ子供でしたから」

翔波は四肢がすっと冷たくなるのを感じながら、奏珠の話に耳を傾ける。

「姉上は、身内と離れただ一人紅楓方に残された私を不憫に思い、私と運命が逆であればと後ろめたく思っているんです。だからなのかもしれませんが、私が時折密かに会いに行っても、

姉上は私を双子の弟としてあたたかく迎えてくれました。それが私と姉上の関係です」

（……ああ、それでか）

奏珠は、翔波の選択の代償を、鏡作の民の内で誰よりも間近に見たのだ。それに双子の姉と運命が分かれたのも、今回里が紅楓方に襲われることとなったのも、翔波の選択ゆえだ。

「……確かに君には、僕を裏切り者と罵る権利がある」

「殊勝でけっこう。ですが私があなたを嫌うのは、白桜方に寝返ったからではありません。次期当主として民の運命を左右しておきながら、冬惺公の従者に甘んじて小者面をしていたからです。――だから私は、あなたに当主の資格があるかどうか、継承の儀を見届けに来た」

奏珠が肩ごしに翔波を睨む。けれど翔波はたじろがずにその瞳を見返した。

以前奏珠が翔波を殺そうとしたことを考えると、鏡作家が断絶してもほかの者が当主位を継ぐことはできるのだろう。空騒とて、奏珠の行動でそう気づいたからこそ、神宝の横取りを企んだのだ。つまり神宝を手にする資格は血筋に拠らない。翔波でなくてもいい。――だけど。

「僕は閣下の従者であることと、鏡作家の当主になることは矛盾しないと思っている。……前に王宮で話したとき、閣下への忠誠を宣言したのは撤回しない。でも里や当主位をどうでもいいと言ったのは撤回するよ。僕は真の当主になる。だからそれを、君に見届けてほしい」

奏珠は答えなかった。ただ前を向いて、闇の奥を指し示した。

「――継承の試練の場、月の祭祀場です」

そこは、まだ洞窟の中だというのが信じられないほど広々とした空間だった。
人の造形か、自然の造形か、あるいは神の造形か。床面から大小の石柱がじかにそそり立ち、いく本も並んでいる様は、地上にある陽の祭祀場を彷彿とさせる。
そんな神秘的な広間の様子がはっきりと見えるのは、翔波たちが足を踏み入れたと同時に銀色の光の球が宙に生まれたからだ。光球は蛍のように飛び交いながら、あたりを照らす。
「なんだ、この光……。乾ノ術の光に似てるけど……」
「試練が始まるしるしだそうです。これを持っていなさい」
「？　月氷澄の鏡と……なんで榊の枝？」
翔波は渡された背負い袋を開けて、首を傾げる。
だが返答はなかった。奏珠がなにかに気づいたように顔を上げ、鋭く叫ぶ。
「――来ます！」
なにが、と問う必要はなかった。皮膚がざわりと粟立ち、翔波は石柱の影が広間の中央に吸い寄せられていくのを見た。
覚えのある光景。影が凝り、四つ足の巨大な獣となってゆっくりと立ち上がる。
「『継承の獣』――！」

慄然とした翔波に、奏珠も驚きを隠せぬ面持ちでつぶやく。
「場に行けば試練を与えるものが現れる、とは、こういうことだったんですね。だからあれの呼び名は『継承の獣』……。――あの化け物を倒すことこそが、継承の試練です！」
（な……っ!?　そんな馬鹿な――！）
これまで考えていた前提が一気に崩れ去る。これでは順番が滅茶苦茶だ。当主になって初めて、化け物を封じるすべが手に入るのではなかったのか！
「あれを倒すって、どうやってさ!?」
翔波の悲鳴じみた叫びに、奏珠が緊迫した声で応じる。
「榊の枝で『試練を与えるもの』を刺し、その望みを叶えれば、鏡に封印できると聞いています！」
「鏡に封印？　望みって？」
聞き返したとき、化け物の赤い瞳がこちらを映した。むせぶような声が、その喉から漏れる。
「名ヲ……。我ガ名ヲ、呼べ。――正シキ我ガ名ヲ呼べ！」
そして『継承の獣』は、月氷澄の鏡を持つ翔波目がけて跳躍した。

「護国大将軍閣下。黒衣の襲撃者が四名、祭祀場に近づいたので追い払いました」
「四名か。うちの一人が手負いだな？　ならばそれで、双鏡院に現れた奴らと数が合う」
木の下闇からかけられた声に、冬惺は振り返らずに応じた。
「はい、閣下。空雛将軍の手の者はそれですべてと思われます。私の四人の部下をそれぞれにつけて追わせておりますが、引き返させますか？」
声の主は、かつて沙良と共に翔波を里に連れて行こうとした紺装束の大柄な男だ。彼は冬惺の指示を尊重するよう、葉厳から命令を受けているらしい。
「……いや。せっかく敵がおびき出されてくれたのだから、このまま追いつめろ。おまえも掩護に回れ。掩護が不要なら、空雛を祭祀場に近づかせないよう獣道の向こうで警戒を続けろ」
「御意に」
男は茂みをわずかに騒がせただけで、静かに森の中へ消えていく。
この洞窟前の広場からわざと護衛を遠ざける指示に、そばに控える綺理がこちらを見る。冬惺は無言で彼女にうなずき返した。
（――これで、空雛一人をこの場におびき出せる）
鷹居の空雛といえば、翔波と同じ正三位乾術師のはずだ。彼とまともに戦おうと思ったら、彼が乾ノ術を使えない夜のうちのほうがいい。
そしてこうして誘いをかければ、確実に空雛は乗ってくる。こちらの戦力が分散しているう

ちに洞窟の外を制圧し、翔波が出てきたところを待ち構えて神宝を奪おうと考えるはずだ。
（移動中に奇襲を警戒して神経をすり減らすより、ここで決着をつけたほうがましだ）
綺理は夜明け前の空を油断なくうかがっている。鷹に用心するのは彼女に任せ、冬惺は周囲の森と背後の斜面に神経を集中させた。
待つ時間はそう長くはなかった。
不意に篝火の炎が揺らぎ、右手の茂みががさりと揺れる。
隣で綺理がはっと剣を構え、右に向き直る。――だが。
（――違う！）
左だ、と直感し、冬惺はそちらに向かって抜刀した。
瞬間、火花が散り、鋭い金属音が鼓膜を打つ。
「……前回の意趣返しのつもりか、空騅」
左方から振り下ろされた刀を太刀で受けた冬惺は、既視感のある状況に低くうなった。
前に冬惺が彼と刃を合わせたのも、まさにこの場所だった。違うのは、不意打ちを仕掛けたのが今度は空騅のほうであること。
「嬉しい限りだ、白桜の。これで君が呆気なく斬り捨てられていたら、興ざめだったからな」
左の木立から忍び寄っていた空騅が、鍔で迫ったまま本当に嬉しそうに言う。
冬惺の背後で綺理が「空騅将軍!?」と叫んだ。彼女の向かっていた茂みからは、鳥の飛び立

つ音。陽動をさせられるほど賢い鷹とは、確かに神と冠するだけのことはある。

「綺理は鷹に集中していろ」

短く後ろに指示を出すと、冬惺は空騅の刀を弾いた。相手が刀を戻すよりも早く、一歩踏み込んで斜め下から切っ先をはね上げる。

目を瞠って後ろに跳んだ空騅に、冬惺は間をおかずに再び斬り込んだ。受け流されるのは予想のうち。切っ先が横に流れたのを利用して、そのまま突きの一手に転じる。

「――っと、これは……空羽！」

前髪を数本散らした一撃に、空騅は横に跳びながら鷹の名を呼んだ。

「右上から来るわ！」

冬惺もまた、綺理の警告を聞いて横に跳ぶ。

鋭い羽音がして、冬惺と空騅の間を鷹がかすめた。鷹が上空にはばたくのを音で聞き、二人は得物を構えてまた向かい合う。

「これは君を過小評価していたかな。十も年下の相手に剣術で押されるとは思わなかった」

「その手の台詞は負けたときまでとっておけ。敗北を油断のせいにできなくなるぞ」

「はは、やっぱり君はいいな。興ざめとは無縁だ。君のお相手は朔秋殿下にも譲れない」

「俺に言わせれば、おまえも朔秋も方向性が違うだけの変態だ……」

冬惺を憎み、執着しているらしい紅楓家当主の名に、冬惺はげんなりした顔になる。



「うーん、殿下と同列にされると複雑だ。私は純粋に君との勝負を楽しんでいるだけなのに」
「神宝の横取りという不純な動機で来た奴がなにを言う」
「ああ、やはり君は気づくか。狩占祭のときも、君のせいで計画が崩れたしな。まあそれで玉造の姫が生き残ったのは、今となっては望外の幸いだが……」
今夏の綺理暗殺未遂事件の黒幕も自分だとあっさり暴露した空騅に、冬惺は琥珀の瞳に剣呑な光を宿らせた。空騅の視線から綺理を隠すように、じりじりと移動する。
「それで空騅、いつまで時間稼ぎをしているつもりだ？　休憩はもう十分だろう」
ずばりと言った冬惺に、空騅は薄紫の瞳を細めた。
「君のほうから私を求めてくれるとは光栄だ。では君と姫君、私と空羽。ちょうど二対二でいることだし、存分に戦おうか。賞品は神宝、不足はない。――いざ！」
その声を合図に、冬惺と空騅は同時に地を蹴り、白刃を閃かせた。

うなりを上げて襲いかかってきた化け物の前足を、翔波は飛びのいてかわした。
石柱の陰に転がり込み、ひとまず月氷澄の鏡を懐にしまう。
（化け物の封印は当主継承の秘儀の際に新たにしている……って、こういうことだったのか！

だけどそれじゃ秘術は？　神宝は？　鏡に封印って、いったいどうなっているんだ！）

思考を整理しようとする間に、化け物が奏珠のほうを向く。翔波は舌打ちして石柱の陰から飛び出した。これは自分の試練なのだ。補佐役を危険な目に遭わせるわけにはいかない！

「僕はこっちだ！『継承の獣』！」

「違ゥ……。ソレハ我ガ名ニ非ズ！　我ガ真ノ名ヲ呼べ――！」

化け物が吠え、標的を翔波に変える。翔波は化け物の鉤爪に片袖を裂かれたものの、すんでのところでよけた。よけながら、手にした榊の枝で前足を薙ぐ。

枝の触れたところで、化け物の足が黒いかけらになって散じる。

（本当だ、効く！――けど、これじゃ埒が明かない！）

冬惺が太刀で斬ったときと同じだ。すぐに影が集まって、化け物は再生してしまう。

（名前を当てないときりがないってことか？　でも名前なんて聞いたこと――っ、うわ！）

化け物に踏み潰されかけ、翔波は危うく側転してその場を逃れた。猫に追われる鼠のように、石柱の陰を移動して広間を回りながら、化け物の猛攻をかわしていく。

かつて紅楓の朔秋と戦ったときと似た状況。けれど今回は乾ノ術も飛び道具も使えない。一振りの榊の枝だけを武器に、苦手な接近戦とわけのわからない名前当てだ。

「……寂、シイ」

混乱する翔波の耳に、ふと化け物のささやきがすべり入った。

「寂シイ……。ナゼ、我ヲ置イテイク。ナゼ、我ガ名ヲ呼ンデクレヌ……」

（この化け物、いったい……？）

友の不在を嘆くような声音に、翔波の頭に疑問が浮かぶ。

『死霊、生き霊、物の精。魂と呼ばれるものたちが、ここでは仮初めの姿を得ることがある』

ちかっと、脳裏でなにかがまたたいた気がした。翔波はその閃きを追うように、考えをめぐらせる。考えろ、考えろ、こんなとき冬惺ならどう考える。もう一度最初から考え直せ。

（ひょっとして、すべては逆――？）

唐突に降りてきたその考えに、翔波は頭の芯が痺れるような衝撃を味わった。

すべては、逆だったのではないだろうか。

神宝を得ることで、秘術を会得して化け物を封印できるようになるのではない。

化け物を封印することで鏡が神宝になり、秘術を使えるようになるのではないか？

（紋を刻むまでは、鏡は代替可能なただの鏡。なら月氷澄の鏡の本質は――この化け物！）

「危ない、後ろ！」

自分の思考に沈みかけていた翔波は、その声に慌てて飛びのいた。頬に風を感じ、化け物の前足が翔波の脇で空を切る。奏珠が声をかけてくれなかったら危なかった。

「だからあなたはみっともないんです！　手は貸しませんよ。呆けている暇があったら、自力で化け物をあしらって謎を解いてください！」

「言われなくても！」

翔波はむっと叫び返すと、自分に振り下ろされる化け物の足目がけて、榊の枝を突き上げる。

「おまえは物の精――月氷澄の鏡の精だ！」

榊の枝に貫かれ、頭上で化け物の足が散じる。化け物は後退すると、高らかに吠えた。

「然リ！　サレド其ハ我ガ性ニシテ、名ニ非ズ。我ガ名ヲ呼ベ――！」

では『月氷澄』が名前ではないにせよ、第一段階は間違っていないのだ。足を再生させて襲ってくる化け物をかわしながら、翔波はまた情報のかけらを猛然と組み合わせる。

『翔波、鏡作家のおまえなら解けるはずだ。これは最大の手がかりだぞ』

（考えろ。考えればわかる名前だってことだ。まったく荒唐無稽な名前じゃない。手がかりはそろっているはず。あれは月氷澄の鏡に宿るもので――、っ！）

そのとき、翔波の頭にある考えが天啓のように浮かんだ。

月氷澄の鏡は、月なのだ。

『継承の獣』は、獣なのだ。

とても、とても単純なことだった。『継承の獣』の性質は影。目は赤く、寂しいと嘆く。

だが答えを言いかけたところで、翔波は口ごもった。

（待った。それには異名が多すぎる。いったいどれが、これの名前なんだ？）

勘で決めては駄目だ。代々の鏡作家当主が解いてきた謎だというのなら、決め手があるはず

だ。手がかりは——そうだ。月氷澄の鏡について、沙良はなんと言っていた？

『ちなみにこの月氷澄の鏡が、乾術師の身分証の原型となったらしいです』

翔波ははたと懐の月氷澄の鏡を探った。乾術師の鏡には必ず階級を示す丸玉がつく。なのにその原型のはずのこれに、玉がないのはおかしい。

今の月氷澄の鏡には玉が欠け、宿っていたはずの魂も抜け、紋がないから不完全。

——ならばその欠けたものすべてが、翔波の目前に迫る『継承の獣』の本質だ！

「よけなさい、鏡作の翔波！」

視界の外から奏珠が叫んだが、翔波はよけなかった。答えがわかった途端、頭の奥が冴え渡った。化け物の動きがひどくゆっくりに見える。

背後の石柱を蹴って、翔波は高く跳んだ。手には榊の枝。

榊の枝を『継承の獣』の頭に突き下ろしながら、その名を叫ぶ。

月の影の獣、月に棲むという伝説のある獣の名を——。

「——玉兎!!」

満開の桜がいっせいに散るように、化け物の体がほどけた。巨体が黒い花びらとなって散る。

吹き荒れる花びらの嵐に、翔波はつい目をつぶった。

そのまま片膝をついて着地すると、嬉しげな少女の声が鼓膜を震わせる。
「然り！　ようやく我が名を呼んでくれたのう。やれ、何年ぶりのことか。おお、今度の主は若人なのじゃな。おぬし、名はなんという？」
そろそろと目を開ければ、眼前に小さな少女がふわふわと浮かんでいた。
身長は鳩くらいしかないが、きちんと十二、三歳の少女の姿をしている。人形のように綺麗な顔で、吊った瞳は赤い。純白の長い髪の間からは白いうさぎの耳が生えている。天女のような古風な装束を身にまとい、月のうさぎだからなのか、小さな餅つきの杵を背負っていた。
翔波がぽかんとしていると、少女がその餅つき杵で翔波の頭をぺしっと叩いた。痛い。夢じゃない。
「……僕は、鏡作の翔波……です。君、いえ、あなたが月氷澄の鏡の精？」
「そうじゃ。おぬしが言い当てた通り、玉兎という。長らく主が不在で寂しゅうてな。我は主がおらぬと鏡を離れ、寂しさが凝るとあの影の獣となってさまよい出てしまうのじゃ」
うさぎは、寂しがりやだという俗信がある。この玉兎もそうらしいが、続けて「今回『継承の獣』が試練の場で暴れたのも当主不在が長引いたせい」と明かされ、翔波はめまいがしそうになった。代々の当主の試練では、化け物がおとなしく回答を待ってくれていたらしい。
「主よ。おぬしが名を呼んでくれたから、我はまた鏡に宿ろう。が、その前におぬしの当主継承を済まさねばな。――岩戸を開き、鏡作の魂を喚ばねば」

玉兎が指さしたほうを見ると、確かに広間の片隅に岩戸らしき物があった。しかし。
「魂を、喚ぶって……？」
「鏡作の地には常夜の国へ通じる岩屋があり、時折死霊が出てくることがあると。そう聞きませんでしたか？　あれがその岩屋の戸。継承の儀とは、秘儀によって鏡作の御祖の魂を喚び出し、当主として適格か判定を受ける儀式でもあるそうです。いわばこれが第二の試練」
奏珠が翔波のもとに歩み寄ってきた。彼は玉兎の姿には驚いていたが、魂を喚ぶ秘儀の存在については承知していたらしい。意地悪く口の端を上げて付け加える。
「もし不適格であれば御祖の魂に体を乗っ取られる、とも聞いていますよ」
「黙りゃ、補佐役。我が主になら、あれはそのようなことはせぬわ」
玉兎は奏珠の頭を、これまた餅つき杵でぽこんと叩き、翔波に向き直った。
「では翔波。鏡作の最たる秘儀、――異世より魂を喚ぶ儀を始めるぞ」

榊の枝に月氷澄の鏡の紐を結びつけ、閉ざされた岩戸の前に立つ。
翔波が鏡をぶら下げた枝をかざすと、奏珠がなにやら聞いたことのない呪文をぶつぶつ唱えはじめた。それに呼応するように、玉兎の体が淡い白銀の光に包まれる。
「我は今は眠りし乾ノ神の持物。異世の岩戸の鍵として、ここに理の狭間の戸を開かん」

真羅が太刀に憑くときのように、玉兎は光となって月氷澄の鏡に吸い込まれていく。
玉兎が宿るなり、鏡の裏面に精緻な文様が浮かび上がった。
紐の先には魂のこもった証として銀の玉が生まれる。表を見れば、曇り一つなかった鏡面に月と同じ模様の影が現れていた。
（月の影の紋……。これが当主の証の紋ってことか）
それは厳粛な儀式だった。鏡と玉の掛けられた榊の枝を、大いなる岩戸の前に掲げて祈る。暗き岩屋に隠れし魂を喚ぶために――。
やがて岩戸が静かに開き、隙間から銀の光が漏れ出してきた。
その光と共に、半分体の透けた人影がゆっくりと歩み出てくる。銀の髪に青銅の瞳、古代の女王の装束に身を包んだ、穏和な面差しの女性だ。
（そういえば鏡作家の御祖は、女性か）
魂だけの女性を見つめて、翔波は冷静にそんなことを思う。
恐れはなかった。死霊という言葉から想像するおどろおどろしさは目の前の女性からは感じられないし、もうこの鏡作の地ではなにが起きてもおかしくないという気になっていた。
女性は翔波ににこりと微笑むと、先に奏珠のほうへすべり寄った。
「私を喚んだのは継承の儀のためですね。生き霊と違って地上に体のない私は、器なしでは話す間も保ちません。しばし体を貸してくださるなら、『鏡作姫、宿れ』と唱えてください」

依代。それが、継承の儀に補佐役が必要な理由なのだろう。奏珠が「鏡作姫さま、お宿りください」とうやうやしく言うと、女性の姿が奏珠の中に消えた。

奏珠の体がびくりと跳ねる。彼がゆるゆると翔波に向き直ったとき、既にその表情は別人のものになっていた。おっとりとした笑みを浮かべ、翔波から榊の枝を受け取る。

「この奏珠という子の記憶を、頼んで少しのぞかせてもらいました。――鏡作の翔波。あなたが当主位を望むのはなにゆえです？　ただ化け物を封じるためならば、ここで継承の儀を中断してももう玉兎は暴れません。それ以上のものを望むなら、それは……力？」

試されているのだと感じ、翔波は自分の本心を探るようにじっと考えた。

「……力は、欲しいです。もし僕に奏珠や、鏡作のみんなのことをちゃんと抱え込めるだけの力があったら、こんな風にはしないですんだんじゃないかって思うことがあるから」

奏珠だって鏡作の民なのだ。翔波が彼の運命を抱え込めずに、取りこぼしてしまっただけで。

「ですが、当主位はあくまで当主位として継承したいと思っています。僕の行動は、僕がどう思おうと既に鏡作を率いる者の行動として見なされていますから。だったら立場から目を背けるより、はっきりと当主になって責任を抱えてしまったほうがいい」

ここまでは過去を悔やむがゆえの決意。ここからは、未来に対する決意だ。

翔波は毅然と顔を上げ、奏珠に宿った己の先祖をまっすぐに見すえる。

「そうして僕が当主と認められて、僕の意思が鏡作の意思だと堂々と言えるようになれば、僕

の閣下への忠誠が今以上の意味を持つ。僕の忠誠が白桜方の不信から鏡作を守るし、閣下にも古の大家の忠誠という強力な手駒を与えることになる。――次期当主である僕の選択で敵味方を裏返してしまったのなら、僕は当主として白桜方の中に鏡作の居場所を作りたい」

言い切ると、鏡作の祖はふっと目許をやわらげた。榊の枝から鏡を外し、翔波に手渡す。

「あなたはあなたなりに、当主位についてしっかり考えているのですね。あなたの意志が固いなら、私は今に生きる人の思いを尊重しましょう。あなたを真に当主と認めるかは、あなたの民次第ですが、私はあなたに祝いを与えます。――鏡の秘術の、継承を」

翔波はまたたいた。秘術。そういえば秘術は、化け物を封印する術ではなかったのだ。

「鏡作の翔波。あなたは月の鏡の秘術がどんなものか、わかりますか？」

謎かけに、翔波は双鏡院でのことを思い描いた。すべての情報のかけらが、ぴたりとはまる。思いついた答えを口にすると、鏡作の祖は「正解です」と微笑んだ。

「あなたには資格があります。あなたに秘術を託しましょう」

そう言って鏡作の祖が翔波の額に手を伸ばす。思わず翔波が目をつぶると、触れられた指先から頭の中に直接知識が流れ込んできた。

記憶を植えつけられる、というのか。まともに会得しようと思ったら何年もかかりそうな術の奥義が、じかに脳裏に刻み込まれていく。その中で、翔波はぼんやりと思った。

（これが……月の鏡の秘術……）

鋼の打ち合う音が幾度も響く広場で、綺理は必死で鷹の影を目で追っていた。

「真後ろから狙ってる！」

鷹の予備動作から次の動きを察し、叫ぶ。

手練れの者と斬り結びながら、空を舞う鷹の動きにも目を配るなど、いくら冬惺でも不可能だ。冬惺は綺理の警告を頼りに空雖から距離を取り、鷹の攻撃から身をかわす。

（あの鷹がいるから……！）

綺理の目にも、剣術の腕は冬惺のほうが上だ。一対一ならとうに冬惺が勝っていただろう。ただ冬惺が空雖を追いつめるたびに鷹が邪魔に入るので、なかなか決着がつかないのだ。

綺理は、未明の空を旋回する鷹を睨んだ。

鷹は主からそう命令でもされているのか、綺理が篝火のそばを離れても決して襲ってはこない。つまり飛び道具の使えない綺理には、鷹を攻撃する手段がない。

（空雖将軍をなんとかするほうが先？　でも私が迂闊に介入する隙は、二人にも鷹にも……）

だが考えている暇はなかった。二人の戦いに決定的な変化が訪れる。

「！」

冬惺が空雛の刀に斬撃を叩き込んだ瞬間、空雛が自ら柄を離したのだ。
空雛の刀が弾き飛ばされる。
しかし冬惺のほうも、勢いあまって太刀が大振りになった。呼吸が乱れる。――その隙に、空雛が回し蹴りを繰り出す！
「冬惺！」
吹っ飛ばされた冬惺はすぐさま受け身を取ったが、空雛は彼のもとに一気に距離を詰めた。
空雛が冬惺の手をしたたかに蹴り上げ、今度は冬惺の太刀が跳ね飛ばされる。
「ああ、体術なら私のほうが上だな。これで決まりだ」
冬惺の反応速度よりもわずかに速く、空雛が身を沈める。目にも留まらぬ速さで足払いがかけられ、冬惺は背中から地面に叩きつけられた。
すかさず空雛が冬惺にのしかかって動きを封じ、刀の鞘で首を押さえる。
「王手だ。姫君も動かないでください。でないと彼の首、へし折りますよ」
「――っ」
まさに空雛に斬りかかろうとしていた綺理は、びくりと足を止めた。
（冬惺……！）
顔面から血の気が引く。――けれどそのとき、冬惺の琥珀の瞳がなにかを伝えるように綺理を見た。視線が絡む。彼は空雛に押さえつけられたまま、ある方向に目をやる。

その目の動きと意味に気づけたのは、綺理だけだった。綺理が冬惺の意をくんで密かに構える一方、空騅は冬惺を見下ろして言う。

「君と姫君の連携より、私と空羽の連携のほうが上だったということかな。敗北の感想は？」

「まだ詰んでいない」

それが「王手だ」に対する返答だと察したのだろう。空騅が眉をひそめた。

冬惺は鞘に喉元を押さえられたまま、にやりと笑う。

「俺にはまだ、最強の手駒が残っている」

「なに――」

空騅がまばたきしたのと、冬惺が視線を彼の背後にやったのはほぼ同時。

「――やれ、翔波!!」

「――！」

視線の先が祭祀場の洞窟だと悟った空騅は、振り返ることで時間を無駄にはしなかった。冬惺の上から弾かれたように飛びのく。

そしてその判断の速さゆえに、彼は罠にかかった。

はったりだ。

振り返ってさえいれば、翔波が祭祀場から戻っていないことは一目瞭然だった。

だがもう遅い。綺理は既に地を蹴っていた。走りながら懐から薬の包みを出し、空騅のそば

のたいまつに投げる！

「なっ……！」

ある種の金属薬を投げこまれて、たいまつの炎が大きく膨れあがる。

さすがの空騅も予想外だったのだろう。彼は炎をかわそうとして、完全に体勢を崩した。

そこに、冬惺が迫る。彼の手にはいつの間にか太刀が戻っていた。驚愕に目を見開いた空騅に、白刃を振り下ろす！

「が……はっ……」

鮮血が噴き出した。肩口からざっくりと傷を負った空騅は、よろめくように後退する。

冬惺はもう一太刀浴びせようとしたが、その寸前で鷹が矢のように両者の間に入った。鷹が羽ばたき、冬惺の視界を隠す間に、空騅は右肩を押さえて広場の端まで下がる。

「……は、ここまでか……。しまったな……、気の利いた負け惜しみが思いつかない」

彼は脂汗を浮かべながら、口の端を持ち上げた。

「私の負けだ。だが……運命が許せば、いつかまた戦おう」

未練を残すように言って、空騅はふらつきながら森の中に逃げていく。

綺理と冬惺は彼に追いすがろうとして――、

すぐにその足を止めたのは、今度は鷹のためではなかった。

（――!?）

ずん、と音を立てて地面が揺れたのだ。
たたらを踏んだ二人の肌を、不気味な風が撫ぜる。ぞっとして振り返ると、洞窟のほうからなにか禍々しい気配をはらんだ風が流れてきた。
（なに……？　あの中でなにが起こっているの？）
綺理はざわざわと鳥肌が立つのを感じ、立ちすくむ。冬惺はそんな綺理を背にかばうと、先ほど木立の間から太刀を投げ渡してくれた大淵妖の名をつぶやいた。
「おい……真羅。なんなんだ、あれは」
真羅がそばの木の上から身を躍らせ、二人と洞窟の間に降り立つ。
しかし妖王の分身たる真羅の横顔にも、今回は余裕の色が一切見られなかった。彼は翡翠の瞳を限界まで見開き、切羽詰まった表情で唇をわななかせる。
綺理は、真羅の声が恐怖を帯びるのを初めて聞いた。
「そんな……！　万宵、君が来るのか。これではもう……っ。――キリ、トウセイ、逃げたまえ！　夜の果てまで逃げて、火雷明王を呼んで私を――」
そして次の刹那、それは起こった。

地の底から響くような揺れがあたりを襲ったとき、粛然たる儀式は中断された。
「な……っ！　秘儀が、歪んでいる……!?」
鏡作の祖が愕然とした声を上げる。
翔波がよろめきながら目を開くと、岩戸からこぼれていた銀の光が消えていた。代わりにどろりとした嫌な重みのある湿風が、岩戸の隙間から漏れ出てくる。
なにが起きているかわからないながらも、不吉な予感が翔波の背筋を冷やした。
「あの、秘儀が歪んでいるとは――？」
「祭祀場に別の術が施されていたのです！　秘儀が捻じ曲げられ、招魂の儀式が私以外の魂をも喚ぶものに変えられています。――この世ならぬ場所から、なにか悪しきものの魂が喚び出されてしまったのです！」
翔波がかろうじて最後の言葉の意味を理解した瞬間――、
岩戸から浅葱色の光がほとばしり、洞窟の外へと奔った。

洞窟から飛び出した浅葱色の光の塊が、真羅をのんだ。
「――――！」

言葉にならない絶叫が彼の喉からあふれ、童子の体が雷撃に打たれたようにはねる。

「真羅……っ!?」

綺理たちの視線の先で、真羅の姿が陽炎のように揺らいだ。淡い浅葱色の光を身にまとわせたまま、彼の体がゆらりと成長していく。

十歳ほどの童子から、二十代半ばの青年の姿へ。身長が伸びるにつれて、着ている物も童装束から月草の襲の装束に変わる。なによりもその雰囲気が、がらりと変わる。

凄絶な美貌に、触れれば切れそうなほど冷たい表情が浮かぶ。彼の放つ凄まじい威圧感と、直視したくない恐ろしい予感に、綺理は我知らず冬惺に寄り添った。

「真、羅……？」

名を呼ぶ冬惺の声もかすれる。

翡翠の瞳がこちらを向き、嘲るように細められた。

「違うよ、私はもう真羅ではないのだよ。名乗らないとわからないかね？《契約者》諸君」

真羅と同じ口調で、真羅を大人にしたような声で、彼は決定的な言葉を言う。

「私は『万の宵を統べる者』万宵。――真羅の本体、淵海の妖王だ」

衝撃はなかった。彼の姿が変わったときから、予想はしていた。



ただ、認めたくなかった。悪い夢だと思いたかった。

「どう、して……」

「淵海からこの地上に、魂だけ喚び出してもらったのだよ。祭祀場にちょっとした小細工をさせて、招魂の秘儀を歪めてね。――そうすれば魂は体へと向かう。この分身の体へと」

真羅の体に乗り移った万宵が、優雅な仕草で胸に手を当てた。

綺理は彼の言葉を呆然と反芻する。

継承の秘儀とは魂を喚ぶ儀式だったのか。ではそれを歪めたのは――祭祀場に小細工とやらを仕掛けたのは、空騅に違いない。空騅はそのために毒を使って継承の儀を延期させ、事前に祭祀場の場所を知ろうとしたのだ。しかし一方で彼には、この事態を想定している節はなかった。ならば万宵の意を受けて彼を騙した者がいる。それはかつて紅楓の朔秋を操っていた大淵妖の刹利なのか、それとも。

(だけど……だけど、そんなことより真羅は?)

「――おまえがそいつの体に憑依したというなら、真羅は?」

冬惺も同じことを考えていたのだろう。硬い声で問うた彼に、万宵はあっさりと答えた。

「もういない」

あっさりしすぎた答えに、綺理は数秒その意味が理解できなかった。

追って意味が浸透してきた頭に、万宵の声が耳障りに響く。

「私がこの体を乗っ取ったときに、できそこないの分身は消えたのだよ。分身は本体に抗えない。真羅の魂はこの私の魂に塗り替えられた。君たちに心を動かされた真羅は、もういない」

真羅は、もういない。

真っ白になった綺理の脳裏に、真羅との思い出が浮かんでは消える。

「嘘だ。――真理を網羅する者、真羅。憑りつけ！」

冬惺が太刀を構えて叫ぶ。が、応えはなかった。眼前の大淵妖の姿は小揺るぎもしない。

万宵がからかうように言う。

「無駄だよ。それにもし私が君の太刀に憑いたとして、君はそれでなにを斬る気なのだね？」

言葉に詰まった冬惺のもとに、万宵はとん、と地を蹴って迫った。

冬惺はとっさに相手を斬り払おうとしたが、万宵は白刃をするりとかわして彼の間合いに踏み込んだ。鍔のあたりをつかんで太刀を押さえ、ぐっと顔を近づけて冬惺の耳元でささやく。

「少年、君は子供だな。信じたいものだけを信じる。真羅が私の中に残っていると信じたがるから、今も太刀筋がぶれた。そんな曇った眼では、君はなにも斬れまいよ」

万宵が右手のひらを冬惺の胸に当て、浅葱色の光を放つ。

「――！」

水流に押し流されるように、冬惺の体が後方に吹っ飛ばされた。冬惺の手からもぎ離された太刀を、万宵は湿ノ力の光を帯びた手で無造作にへし折る。

「冬惺……っ、――！」

彼に駆け寄ろうとした綺理の手首を、万宵が後ろから捕らえた。綺理はぐいと引き寄せられて体勢を崩し、背中から万宵の胸に倒れかかる。頭上で、声が。

「安心したまえ、キリ。少年を傷つけてはいないよ。大事な《契約者》には危害は加えない」

言葉の言い回しは真羅そのものなのに、嘲笑を含んだ口調は彼とはまったく違う。

（真羅は、いない……。――っ、それならこれは！）

重く湿った気が肌に絡み、綺理は一気に現実感を取り戻した。

北瑛島を淵海に沈めんとする妖王。

彼が、地上に解き放たれてしまったのだ。真羅の体と、その強大な力を得て。

真羅は火雷明王を招請しろと言ったが、まだ夜は明けていない。空が白みはじめただけだ。太陽が昇るまでは降神術は使えない。いかなる乾ノ術も使えない。

――人には、この妖王を止めるすべがない。

どっと、冷や汗が噴き出る。綺理は慌てて万宵から離れようとしたが、その前に浅葱色の光の縄が体に絡みついた。動けない。

万宵が背後から綺理の剣を取り上げ、あっけなく二つに折る。火雷明王の依代とする剣を。

さらに万宵の冷たい指が綺理の頬をなぞり、頤を持ち上げた。

綺理は彼の顔を逆向きに仰がされる形になる。翡翠の瞳がこちらを見下ろし、なぶるような

ささやきが降ってくる。
「だが君は泣かせてみたい。かつてこの体を潤した君の涙を、私も味わってみたい」
「やっ……」
綺理がぞっとして瞳を歪ませたとき、万宵が顔を上げた。
「――綺理から離れろ！」
冬惺が折れた綺理の剣を拾い、万宵に斬りかかる。
万宵は綺理を解放すると、後ろに跳んで白刃をかわした。
「必死だな、少年は。必死ついでに、夜明けまで私から逃げ回って乾ノ神衆を招請してみるかね？　どうせ逃げ切れまいが、少しくらいなら時間をあげよう。せいぜい遠くに行きたまえ」
くつくつと喉を震わせて、万宵は大きく跳躍する。彼が高台の大岩の頂にふわりと降り立つのを見て、綺理たちは『時間』の意味を悟った。さっと蒼白になる。
「やはり地上に生身の体があるといい……。かすかでも湿ノ神の息吹を感じられる。この手で我らの神を取り戻すために動ける。――この手で地上を、淵海に沈められる」
青年姿の妖王は、鏡作の里を見下ろして嗤った。
見せつけるように掲げた両腕の先で、湿ノ力が浅葱色の光となって渦を巻く。
朝日は、まだ昇らない。

日の出を待つ薄暗い空の下――。

朝霧が立ち込める屋敷の前庭には、当主の帰還を待つ鏡作の里人たちが集っていた。彼らは月の祭祀場のほうから湧き起こった異様な気配に、裏の山を見上げる。

「あれは……いったい、なにごとだ……？」

「継承の儀でなにが起こったのだ？　翔波さまは？　閣下方は、ご無事なのか……？」

岩山の上では暗雲が立ち込め、不気味な浅葱色の光がとぐろを巻いている。湿り気を帯びた風がねっとりと吹き下りてきて、里人の間に怖気が走った。

「まさか、淵妖!?　だがこんな強大な淵妖など、聞いたことがない！」

「終わりだ……。鏡作の里の終わり……」

あるいは、世の終わり。

一人のつぶやきに、そんな不吉な文句が全員の脳裏を駆け巡る。

肌を打つ強烈な圧迫感に、人々はのまれたようにすくんだ。

彼らの凍りついた瞳に、浅葱色の光が大蛇のようにうごめくのが映る。大蛇がゆっくりととぐろを解き、その鎌首がこちらを向く。

そして光の大蛇が、里目がけて奔る――。

その、寸前で。

「――僕の里をやらせるものか!!」

巨大な銀の光の壁が、湿ノ力の大蛇をぐるりと囲んだ。

時が止まったように大蛇の動きが止まる。遠目にも、万宵が驚いたのがわかった。

（今のは――！）

綺理と冬惺がはっと声のほうを向くと、洞窟の入り口に銀髪の少年の姿があった。

「翔波！」

「遅くなってすみません、閣下！　当主位と、秘術を継承してきました！」

翔波は手にした鏡を光の大蛇に向けたまま、続いて洞窟から出てきた補佐役に叫ぶ。

「奏珠！　あれは僕らがなんとかする！　里に戻って、みんなを双鏡院に避難させてくれ！」

「はい！」

沙良、否、奏珠は補佐役の白装束をまたたく間に脱ぎ捨てた。下に着ていた身軽な紺装束姿で、矢のように里へと駆けていく。

翔波はきっと頭上の大蛇と万宵を見上げた。浅葱色の光の大蛇が消えるにつれて、銀の光も彼の掲げる鏡に吸い込まれていく。

そのとき初めて、綺理はその鏡に月の影の紋が浮かんでいることに気づいた。

「それが月氷澄の鏡？　じゃあ、今のが当主の秘術!?」
翔波はうなずいた。同時に片眼鏡に覆われた右目を銀に変え、照破の力で万宵を見る。
「え？　あれって――真羅!?」
「今は違う、というべきだろうな。妖王万宵の魂が真羅に憑依している」
冬惺の即答に、翔波は嫌な予感が当たったと言いたげに顔を強張らせた。だが冬惺の声が存外に落ち着いていたせいだろう。彼は取り乱すことなく冬惺の次の言葉を待つ。
冬惺は万宵をまっすぐに睨み上げ、はっきりと言った。
「妖王の魂を追い出して、真羅を元に戻す。火雷明王の助けがあれば可能なはずだ。翔波、今の術で日の出までしのげるか？」
綺理ははっとした。冬惺は真羅の魂が消えたとは思っていないのだ。万宵になにを言われようと、真羅の魂があの妖王の中に残っていることを、彼は一度たりとも疑っていない。
その迷いのなさに、綺理の心も晴れた。
（そうよ、分身が本体に抗えないなんて嘘！　真羅はずっと本体の妖王に抗ってきたんじゃない。私も真羅を信じる。あの真羅が、こんな簡単に本体の心に引きずられるわけない！）
翔波も決然と顎を引いた。
「――わかった。日の出までは僕がなんとか抑えてみせる。綺理、そのあとはお願い」
いつものように三人で目を見交わすと、翔波は月氷澄の鏡を万宵に向けて構える。

「今は眠りし乾ノ神の宝、天の鏡のその写し身よ――」
詠唱に応じて、鏡が輝きだした。鏡の紐についていた銀の玉がすいと離れ、うさぎの耳を持つ小さな少女となって翔波の肩口にふわりと浮かぶ。
「歪みの鏡の理で、禍つ風を凍らせよ！」
鏡面に浮かんでいた月の紋がぐにゃりと歪み、澄んだ光がほとばしる！
瞠目した万宵を閉じ込めるように、彼のまわりに銀の光の帯が走った。
光の輪が完成した瞬間、万宵の動きが凍りついたように止まる。彼がまさにこちらに放とうとしていた浅葱色の光球さえ、その揺らめきをぴたりと止める。
翔波を中心にあたりが冷え込み、水気を含んで重かった空気がふっと軽くなってきた。
――いわばそれは、湿ノ力を凍らせる術。
（！　月の鏡……歪みの鏡の理って、そういうこと!?）
双鏡院での謎かけの記憶が、鏡についての知識が、綺理の脳裏にどっと押し寄せる。
太陽から火を採る鏡と対になるのは、月から水を採る鏡だ。
凹型に歪んだ鏡を月夜の晩に置いておけば、澄んだ月の露が採れる。つまり、空気中の水が鏡の面に冷やされて露と固まる。
双鏡院に祀られていたのも、本来は陽鳥の鏡とそうした月の鏡だったのだろう。
そして太陽から火を採ることが乾ノ術の極意なら、月から水を採る――湿ノ力を冷やし固め

ることは、秘術の極意だ。だから神宝の名は『月氷澄』であり、『歪みの鏡』なのだ！

（当主になる人は、これに気づかないといけなかったんだ。だから里についてすぐ、沙良が双鏡院に翔波を案内して謎かけを……！）

綺理は、綺麗につながった事実にしばし呆然とした。

だが秘術を行使して万宵の動きを封じている翔波の顔には、余裕の色はない。

翔波の額に汗が玉となって浮かび、人ならぬ小さな少女が緊迫した声で言う。

「主よ。あれは恐ろしいものじゃ。我の力を超えておる。今あれを完全に凍らせることができているのが、おかしいくらいなのじゃ。――我もおぬしの力も、長くはもたぬぞ」

「わかってる。だけどあと少し……あと少しで夜が明けるんだ」

その『あと少し』は、今までで最も長く感じられた。

綺理たちがいるのは山の上のほうの広場で、朝日が昇ればすぐに日が射すはず。万宵の力を封じているおかげで、妖雲も散った。なのに太陽はなかなか姿を見せない。

空はだんだんと白んでいくが、万宵もじわじわと氷の呪縛から放たれつつある。

長い長い『あと少し』の後――。

東天に希望の光が見えたのと、万宵の右手から浅葱色の光が放たれたのは同時だった。

（！）

ぎくりとした綺理と翔波の前に、しかし、冬惺がすぐさま立ちはだかる。彼はいつの間にか

拾っていた空雛の刀で、浅葱色の光を薙ぎ払った。
「大丈夫だ。おまえたちを守るくらいの力はある。落ち着いて、火雷明王を呼べ」
綺理はほっとして、冬惺の後ろでしっかりと直立した。東の果てから射す一条の光に向けて、右手を伸ばす。
「――帰命したてまつる。天の灯明より分かたれし、金色の翼にて舞える者、雷霆の咆哮を従えし乾ノ眷属に」
秘術がどんどんほころびてきているのだろう。冬惺が湿ノ力を叩き斬るときの、玻璃を砕くような音が間断なく耳を打つ。
「謹んで願わくは、真赤き日輪のかけらを鎧い、万雷を紡ぎし灼熱の剣をとり――」
地面の泥化が進み、ずぶずぶと足が沈んでいくが、火雷明王さえ呼べば元に戻ると割り切る。
「天の雷窟より降臨したまえ！」
綺理は右手を振り下ろし、舌に馴染んだその名を叫ぶ。
「――大天火雷金翅明王！」
旭光よりもなおまばゆい、二色の火炎の螺旋が眼前に顕現した。
紅の炎は、長軀を包む鎧と熱風になびく長い髪に。金色の炎は、燃えるような瞳と背に広がる大きな翼に――。炎の柱が、瞬時に青年姿の乾ノ神衆に変わる。
「我が姫、此度は――、っ！」

火雷明王は降臨するや、万宵の姿を認めて金の双眸を瞠った。
「泥人形。おぬし、なぜそのような姿に……」
「……来たのかね、乾ノ神の飼い鳥」
万宵は冷めた目で火雷明王を見下ろした。彼を囲う銀の光はかろうじて輪の形を保っているが、もはや彼をその場にとどめているだけで、力や動きを封じる役は果たしていない。
万宵が綺理たちに放った浅葱色の光球を、火雷明王は右腕の籠手で受けた。ジュッという音が上がり、火雷明王の瞳がさらに見開かれる。
「おぬし、よもや淵海の妖王か……!? 本体に引きずられて堕ちたか——いや、まだ完全にはのまれていないな。おぬしが真に妖王と化しておれば、この程度の力しか感じぬはずはない。……真羅の魂が中から力を抑えているのか」
そのつぶやきに、綺理は弾かれたように万宵を見た。
万宵は無表情だ。かつて真羅と火雷明王が対峙したときのような、余裕な態度はない。
そうだ。真羅が以前見せた力の片鱗は、こんなものではなかった。もっと圧倒的だった。もし万宵が彼の力と体を完全に乗っ取っていたなら、綺理たちには火雷明王を招請するまでしのぐことなどできなかったはずだ。
ならば万宵が嘘をついたのはなぜ。真羅が消えたと思わせておかないと、綺理たちが真羅を呼び戻してしまうと危惧したからではないだろうか？

綺理は冬惺の自信の源を悟った。いまだ戸惑っている様子の火雷明王に向かって、叫ぶ。
「火雷明王！　真羅は今、万宵に憑依されているだけなんです。万宵の力を抑えていていただけませんか？――その間に私たちが、真羅を元に戻しますから！」
火雷明王は数度またたき、ぐっと顎を引く。
「――我が姫の意とあらば」
まさにそのとき、万宵を囲んでいた光の輪が決壊した。
秘術が解け、銀の光がかき消える。ぐったりしていた神宝の精の少女が月氷澄の鏡に吸い込まれ、翔波自身も気力が途切れたようにがくりと膝をついた。
だが破れた呪縛の代わりに、火雷明王が光の矢のように万宵へと翔けた。
「……厄介な雛鳥が」
万宵が憎々しげに顔を歪め、浅葱色の光をまとわりつかせた腕を上げる。
一瞬後、綺理たちの頭上で、火雷明王と湿ノ力の奔流が激突した。
轟音が大気を震わせる。
綺理は、細く開けた視界の中で、火雷明王が光の奔流を突き破って万宵に迫るのを見た。蘇芳色の鎧の青年と、月草の装束の青年がもみ合い、もろ共にこの洞窟前の広場に落下してくる。
今度は眼前で、金と浅葱色の光がぶつかり合う。
「――！」

強い余波を間近で浴びて、綺理たち三人は広場の端まで吹っ飛ばされた。
冬惺のそばにいた綺理は、寸前で彼に抱きかかえられて衝撃を免れたが、翔波は泥と化しつつある地面に叩き伏せられる。
「翔波！」
「……平、気。――淵海より吹き来る風は禍つ風、今吹き返せ天の水無風！」
湿ノ力を払う乾ノ術でその場の泥化を食い止め、三人はよろよろと身を起こした。
視線の先では、火雷明王が万宵の両手首をつかんで向かい合っていた。
火雷明王は相手を捕らえたまま天空に舞い上がろうというのか、金炎の翼を大きく広げている。だがその翼には浅葱色の光が蛇のように絡みつき、動きを封じていた。
互いに相手を捕らえて膠着状態になっているように見えるが、地上で力の制御がきかない火雷明王は自分から乾ノ力を放とうとはしない。ただ、万宵の攻撃をその身で受け止めているだけだ。浅葱色の光に力を削られ、金炎の翼がじわじわとむしられていく。
ゴゥ、と乾風と湿風の渦が湧き起こった。
旋風の中で細かい稲妻が走っては消え、金色の羽毛が舞う。
叩きつけられる力の波動に、綺理たちは立ち上がることができなかった。二人のほうを向いているだけでも、風圧で呼吸がしにくい。うまく声が出せずに口が空回りする。
「しん……ら……っ」

綺理の声はたやすく風にかき消され、届かない。
何度その名を呼ぼうとも、風のうなりと周囲の木々のざわめきにのみこまれる。
そのとき、凛とした声が、吹き荒れる風を割って響いた。
「――真理を網羅する者、真羅！」
冬惺だ。
彼は、綺理と翔波をかばって風の面に向かいながら、誰よりも揺るぎない声で叫ぶ。
「俺の声に応えろ！　おまえに心を与えた俺たちの声に、応えろ――！」
――風が、わずかに弱まった気がした。

《契約者》の叫びは、魂の宿る勾玉にじかに響いた。
体の主導権だけでなく、聴覚やすべての感覚を本体に乗っ取られていた真羅にも、その声は届いた。朦朧としかけていた自我が、急に鮮明になる。
（――トウセイ、君なのだね）
泥の底のような闇の中で、再び叫びがこだまする。
「馬鹿子狐が！　俺たちに心を動かされたというなら、もう一度動かされてみろ！」
もう一度、どころではない。あの三人の子供たちは、真羅を味方と信じてくれたときからず

っと、真羅の心を動かしっぱなしだ。それこそ万宵が警戒し、同時に興味を抱くほどに。

「真羅！　元に戻って！　万宵なんかに体を渡しちゃ駄目！」

「火雷明王も頑張っているんだ。君が戻らなくてどうするんだよ、真羅！」

「うかうか体を乗っ取られたままでいるな！　自分の体くらい、根性で取り戻せ！」

根性で取り戻せると信じている声だ。真羅を、信じている声だ。

無茶を言う。だけどその言葉を信じてみようか、と思ったら、不意に気がついた。

（誰かが……火雷明王が、外から万宵を抑え込んでいる？）

今までは自分の力を抑制するだけで精一杯だったが、このまま火雷明王が万宵の相手をしてくれるなら少しは余裕ができそうだ。それに万宵の意識も火雷明王に傾き、真羅の心を塗り替えようとする本体の重圧も薄らいでいる。――この隙を突けば、いけるかもしれない。

真羅は気力を振り絞り、万宵の意識を押しのけようとした。すると万宵もまた真羅の意識に手を伸ばし、一つの体の中で魂と魂がせめぎ合う。

〈真羅。何度抗おうが、君の抵抗に終わりはないと言っただろう？　君が力を抑えている間に雛鳥がこの体を滅ぼしたとしても、私の魂は無傷で淵海の本体に還るだけ。たとえ命を賭そうとも、君に私は倒せない。すべては君があきらめるのが早いか遅いかだけの問題だ〉

終わりはない。倒せない。早くあきらめろ。そうすれば楽になれる――。万宵は安らかな絶望を突きつけるように言う。

けれどそこに、確かな声が響く。
「真羅！　約束したそばからいなくなるなんて薄情じゃないか。君がいなくなったら、僕は誰と一杯やればいいんだよ！　君しかいないんだよ！」
（……ショウハ、君も世話が焼ける）
真羅は魂だけで笑んだ。あれを約束だと思ったのは自分だけではなかったらしい。
〈しかしだね、真羅。戻ってどうするのだね？　ここで君が体を取り戻しても、《調停者》たちは君を恐れて滅ぼすよ。すべての約束は果たされない。君は滅びを望まれる〉
万宵の声に憐れみが混じる。
そうかもしれない。真羅自身、自分が変わってしまうのが恐ろしい。だけど。
（――万宵。それでも私は戻りたい。この体を、取り戻したいのだよ）
心は、とうの昔に決まっている。
『私に心を与えた君たちが、私の滅びを望むなら、きっと私は抗うまいよ』
『君たちが望む限り、私は君たちと共に在るよ』
真羅は《契約者》の望みに、仲間の声に応えるのだ。
魂を震わす、あの声に。
「お願い、真羅！――私たちのところに帰ってきて!!」

「……出て行きたまえ！　万宵――っ！」

妖王の分身が絶叫し、その体から浅葱色の光の塊が飛び出した。

光の塊はどこへやら飛び去り、火雷明王の翼を縛っていた光の蛇も消える。それと共に、彼の輪郭が溶けるように揺らいだ。

「！　真羅!?」

万宵が憑りついたときと逆だ。綺理たちが見守る前で、青年姿の大淵妖が縮んでいく。体は小さく、面差しは幼く、まとう物も濃色の童装束に。両手首を火雷明王に捕らえられたまま、彼は童子の姿に――真羅に戻る。

「おぬし、妖王の魂を弾き出したか……」

翼がぼろぼろに傷つき、全身に裂傷を負った火雷明王が、安堵の息をついた。彼が手を離すと、真羅はふっと浅葱色の光を消してその場にくずおれる。

「……すまないね、雛鳥。君の世話になるとは……」

「真羅！」

綺理たちが急いで駆け寄ると、翡翠の瞳が三人を映して和んだ。綺理は、力が抜けたようにへたりこんでいる真羅のもとに膝をつき、小柄な童子の体を抱きしめる。

「よかった！　真羅が帰ってきてくれて、本当によかった……！」



真羅は綺理の腕に身を預けたまま微笑んだ。そばに立つ冬惺と翔波を見上げ、眉を下げる。

「……人間は、こういうときなんと言うものなのかね？」

苦笑混じりの質問は、謝罪の文句を問うたものだ。真羅が謝罪しようとしているのだと冬惺は察したが、相手の想定内の台詞を言わされるのも癪なので、翔波と目配せしあう。

「さあ……。なんだろうね、冬惺？」

「どうだろうな。『ただいま』じゃないか？」

冬惺たちがわざと棒読みで答えると、真羅は虚をつかれたような顔になった。それから淡く笑い、荒れた広場の真ん中で、朝の光を浴びながら言った。

「――ただいま、みんな」

八章　二人だけの約束

朝霧の薄く残る屋敷の前庭では、里中の人々が整然と翔波たちの帰還を待っていた。
里に戻った三人に、葉厳が代表して深々とお辞儀をする。
「――皆さま方がご無事で、なによりでした」
葉厳の後ろに並ぶ里人たちが、無言で同じ礼をとる。
その静けさと、葬式じみた厳粛な雰囲気に、翔波はひやりとした。
「……葉厳どの。もしや里の者になにか……？」
思わず硬い声で問うと、葉厳は背筋を伸ばして首を横に振った。
「いいえ。翔波さまが祭祀場に現れた大淵妖を封じ、里をお守りくださったおかげで、みな無事です。里の者一同、欠けることなくお出迎えにあがっております」
見回せば、確かに毒や怪我で安静にしていたはずの者たちまで出揃っている。睡眠薬が切れて目覚めたらしい沙良や、祭祀場の護衛を務めていた紺装束の五人の姿もあった。
空雛の手の者を追っていた彼らは、結局全員標的に自害されたり、激戦の果てに致命傷を与えてしまったりしたらしい。生かして捕らえることはできなかった旨、護衛の代表が謝罪する。
「いや、みんな無事ならそれでいいんだけど……」

ではこの硬い空気はなんなのだ。翔波が戸惑っていると、後ろに控える綺理と冬惺が、里人たちの死角から肘でつついてきた。

「間抜け。おまえ、月の祭祀場になにをしに行ってきたんだ」

「え？　あ、当主継承か」

うっかり、とても間抜けなつぶやきを漏らすと、唯一聞こえたであろう葉厳が微笑んだ。

「翔波さまにおかれては、継承の儀をつつがなく終えられたとのこと、お喜び申し上げます。当主継承にあたっての翔波さまのご決意共々、奏珠より聞き及んでおります」

「え、奏珠からって……」

目をぱちくりさせた翔波のもとに、横合いから奏珠がやってきた。

「あなたが鏡作の御祖に言った決意ですよ。依代になっている間も、私にはずっと意識がありましたから」

「君、聞いてたの!?」

なまじ記憶力がいいだけに自分の台詞を正確に思い出してしまい、翔波は顔を引きつらせた。そうと知っていたら絶対に奏珠の名は出さなかったのに、と決まり悪さに暴れたくなる。

けれど葉厳は、真面目な顔で翔波に向かった。

「正直に申しましょう。我々は初め、翔波さまには『継承の獣』を封じていただく以上のことを期待しておりませんでした。けれどあなたは我々の想像とは違い、当主としての気構えをし

っかりと持ち、未熟ながらも当主の器を示された。――あなたは大器になりましょう」
翔波は頬が熱くなるのを感じた。付け焼き刃の気構えを持ち上げないでくださいと否定したくなるが、集う里人たちの誇らしげな顔を見て、堂々としていたほうがいいと思い直す。
当主の証を、と葉厳にささやかれ、懐から神宝を出す。
翔波は鏡を手に少し迷い、意を決して顔を上げた。相変わらず気の利いた演説は思いつかないけれど、もう足は震えない。全員に聞こえるように、腹から声を出す。
「――みんな。僕が法的に鏡作家領を継ぐのはまだ先のことだし、僕自身、当主としてなにができるか模索中の身だ。だけど今、これだけは誓うよ。僕は、僕の民を必ず守る。――この鏡にかけて」
月氷澄の鏡を掲げると、当主の紋の刻まれた鏡面が、旭光に燦然と輝いた。
感嘆の息が人々の間で漏れる。葉厳がうやうやしくひざまずき、誓いの言葉を述べた。
「翔波さま。我々はあなたを、鏡作を守り導く真の当主と見受けます。あなたの意思こそ、鏡作の意思。我ら佐鏡もあなたに従い、あなたを支えるために在りましょう。――新当主、翔波さまに心からの忠誠を誓います」
ほかの里人たちも次々にひざまずき、頭を垂れていく。
「――新たなる鏡に忠誠を！」
「――鏡作家当主、翔波さまに忠誠を！」

（……！）

心からの喜びが伝わってくる声のうねりに、翔波は胸を詰まらせた。

半人前の自分に忠誠を捧げてくれた人たちをぐるりと見回すと、最後に奏珠と目が合う。

里の者でまだ立っているのは、奏珠一人だけだった。――その彼が、膝を折る。

（――え？）

言葉はなかった。

誓言はなく、奏珠はただ静かにひざまずいて翔波に頭を垂れた。

（奏珠――）

翔波に当主としての資格があるか見届ける。そう言った彼の、これが答えだ。

不意に翔波は、身の内から熱い思いが湧き上がるのを感じた。力が欲しいと願ったのは、なんのためだった？　奏珠が生きていると知って嬉しかったのは、やり直せるかもしれないと思ったからではないのか？

「――お願いがあります、冬惺公閣下。この間者は鏡作の民です。彼の処遇は、鏡作家当主たるこの私に任せてもらえませんか」

言葉はするりと口をついて出た。奏珠がかすかに身を震わせる。

「いいだろう。護国大将軍たる俺の権限をもって、おまえに任せる」

心得たように笑んだ主人に、礼を言う。翔波はその場の全員が耳をそばだててうかがう中、

奏珠に歩み寄った。

言うべきことに、迷いはなかった。

「――奏珠。僕に仕えないか？　紅楓王家ではなく、鏡作家当主のこの僕に」

奏珠が弾かれたように顔を上げる。人々の中にいた沙良も、はっと腰を浮かせた。

呆然とこちらを見上げる奏珠に、翔波は続ける。

「もちろん君が紅楓方の間者として動いていたことは、なかったことにはできないよ。だけど……もし君が二重間者として紅楓方に潜り込んでくれたらすごく助かるし、そうやって功績を挙げてくれれば、君を味方に取り込んだことを対外的にも納得させられるから」

「ですが私は、かつて綺理さまを暗殺しようと――」

言いかけた奏珠は、綺理が翔波の勧誘にぱっと顔を輝かせているのを見て言葉を変えた。

「……っ、私は紅楓方であることに関係なく、あなたを殺そうとしたんですよ！」

「いや、今でも僕を殺したいなら無理には誘わないけど……」

翔波が気圧されてぼそぼそと答えると、奏珠は深々とため息をついた。

「……やはりあなたは馬鹿です。この先、あなたに馬鹿と言える臣下がいないと心配です」

彼はそう言って、懐から出した短刀の刃を後ろ髪の房に当てた。

誓いの証に長い黒髪を切り、再び翔波の前に頭を垂れる。

「――これより先あなたにお仕えすることを、どうかお許しください」

朝日が昇ってもなお暗い密生した草木の陰に、血の跡が点々と続く。

「……っ、く……」

ふらつきながら森を歩いていた空雛は、大きく息を吐いて膝をついた。異形の獣の形の石に背を預け、右肩を押さえてうめく。

「白桜の若将軍も、やってくれる……」

傷口からは、じわじわと血がにじみ続けている。少しばかり血を流しすぎて、体が重い。

（私も欲をかきすぎたな。今回は神宝の奪取に集中すべきだったか）

――名将の誉れを兄に妬まれ、国外に飛ばされたせいで、自分のいない間に紅楓方は大敗。そうしてこの一年、亡命生活を余儀なくされ、思ったより鬱屈していたのかもしれない。だが好敵手との対面にこだわったせいで、本来の目的を果たせなかったのではざまはない。

（神宝と秘術が手に入れば、狩占祭での失敗を補うに十分な手土産になったものを……）

秘伝書を奪って、神宝や継承の儀の詳細を始めとした鏡作の知識を得る。その後、用済みになった鏡作の里を滅ぼし、横取りした神宝と秘術を持ち帰る。そうすれば紅楓王家は、古の大家の後継として――瑛国を統べる正当な存在として、白桜王家に優る権威を得られる――。

そんな目論見はあえなく崩れた。紅楓の朔秋を傀儡の王にして実権を握るには、この手で彼に天下を取らせなくてはならないのに。

（二兎を追った結果がこの大怪我とはな。だが……今回の件はおかしかった）

空騅は荒い呼吸を整えながら、顔をしかめた。

どうも、何者かに騙されて利用された気がする。自分は鏡作の秘術を継承するために、秘儀を歪める術が施されているという呪具を祭祀場に仕掛けたのだ。それなのに秘術の知識がこちらに流れ込んでくることはなく、代わりに現れたのが――。

そのとき、強い羽音が空騅の鼓膜を打った。

「！　空羽。よかった、君は無事だったか」

そばの枝に舞い降りた心強い鷹の姿に、空騅は口元をゆるめた。こちらに寄ってきた鷹に左手を伸ばし、苦笑混じりに話しかける。

「私はこのざまだ。頼む、空羽。もう全滅している可能性もあるが、味方を捜して――」

鷹の脚の重みを革手袋越しに感じたところで、空騅は言葉を切った。

はっと鷹の目をのぞきこみ、次の瞬間、渾身の力で鷹を振り払う！

ばさばさと驚いたように羽ばたき、枝に戻った鷹を、空騅はきつく睨み上げる。

「――おまえ、空羽ではないな。中にいるのはいったいなんだ？」

はたから見れば、鳥を相手に一人芝居でもしているような光景。だが空騅が強い口調で言い

放つと、鷹のくちばしからくつくつと笑い声が漏れた。
「よくぞ見破ったね、鷹を据える空の帥の者。そうだよ、私は君の鷹ではないのだよ」
人語をしゃべり出した鷹に、空駼はぐっと声を低くする。
「たとえ体は空羽でも、私が相棒を見誤ることはない。おまえはいったい、何者だ……？」
誰何に、鷹は枝の上で一度翼をはためかせる。
直後、鷹の全身から浅葱色の光が放たれ、異様な圧迫感が空駼を襲った。異質かつ、恐ろしく強大な存在の気配に、空駼は首筋の毛がぞっと逆立つのを感じた。
「まさかおまえは、あのあと祭祀場に現れた……」
境界石に背を押し付けるようににじり下がった彼に、鷹は枝の上から傲然と名乗る。
「そのとおりだよ。――私は世界の淵源の海の、そのまた深淵より来たりし大淵妖、『万の宵を統べる者』万宵だ」
「……っ、大淵妖!?」
「そして同時に、君の救い手でもある。深手を負ったね、鷹将軍」
万宵は空駼の右肩から斜めに走る創傷を見て、歌うように続ける。
「放っておけば君は死ぬ。たとえここでは死なずとも、君の利き腕はここで死ぬ。薬師の業では助からないが、私の奇しき業では救えるよ。生きたいならば乞いたまえ。私に助けを乞いたまえ。私の名を呼び、ただ一言、『憑りつけ』と願いを言いたまえ」

「……おまえは私に、《契約》を持ちかけているのか……？」

空騅は革手袋の内側で手のひらがじっとりと汗ばむのを感じた。体が空羽では、乾ノ術を放つわけにはいかない。いや、そうでなくとも正三位の乾ノ術で対抗できる相手とは思えない。

「いいや。《契約》は大淵妖が地上で体を保つすべ。魂だけ喚び出された私には、《契約》は必要ないのだよ。私は君と手を組みたいだけだ。手を組む相手を、助けたいだけだ」

絶対者のまなざしで見下ろす万宵に、空騅ははっ、と投げやりな息をついた。

「……選択肢はなさそうだな。ならば助けてもらうとしよう。――万の宵を統べる者、万宵。憑りつけ」

鷹が嗤った。鷹の体から浅葱色の光が離れ、まっすぐに空騅の胸に吸い込まれる。

「――！」

空騅の体がひときわ大きくはねた。雷撃に打たれたように目を見開き、四肢を突っ張らせる。不気味な浅葱色の光が彼の体を包み、その光の中で傷が急速に癒えていく。

やがて光が収束し、彼はゆっくりと身を起こした。口元に笑みが浮かび、血の気の戻った唇が別人の口調で言葉を紡ぐ。

「……ふむ。やはりこの体は使い勝手がよさそうだね。少し荒療治をしすぎたが……、っ！」

唐突に、薄紫の瞳が凍りついた。体の調子を確かめるように握ったり開いたりしていた手がびくりと強張り、ゆるゆると拳の形を作る。

「出て行け」

空雖の口がはっきりとその四音を発音した途端、彼の体から浅葱色の光が引きはがされた。弾かれた光は鷹の中に戻り、立ち上がった空雖がそちらに剣呑な目を向ける。

「私の相棒からも出て行け、化け物」

再び鷹に憑いた万宵は、興がるように言う。

「賞賛しよう。いくら乾術師は乗っ取りにくいとはいえ、気合いで私を弾き出すとはたいした人間だ。先ほど私を見破ったことといい、気に入った！　それに今、君の心をのぞかせてもらったが、どうやら君の狙うものは私の狙うものの近くにあるようだ。――どうだね、鷹将軍。今度こそ本当に私と手を組まないかね？　私の利害に合う限り、君の野望を手伝うよ」

一瞬また強烈な威圧感を放った万宵に、空雖は虚勢を保つように口の端を上げる。

「空羽を乗っ取った化け物と手を組めと？」

「君が体をくれないからだよ。それに空羽は器。名前のおかげで、器にするによく馴染む」

鷹の黄色い瞳の中で、翡翠色の光がちらつく。空雖はその光を探るように見つめ、その果てに口を開いた。

「――いいだろう。今しばらくはおまえと手を組もう。だがいずれ、空羽は返してもらう」

嚙み付くような宣言に、万宵は楽しそうに笑った。

「交渉成立のようだね。よろしく、鷹将軍。今日から私が君の相棒だ」

ばさりと舞い降りてきた鷹を左手に据えて、空雛は薄紫の瞳を細めた。
自分を騙し、利用した黒幕がこの大淵妖なのなら、一方的に利用されるのは不愉快だ。
「よろしく、化け物。――せいぜい仲良く利用しあおうか」

『――キリ。大事な話があるのでね、また雛鳥を呼んでくれたまえ』
その日の午後のことだ。念入りに人払いをした離れの棟の一室で、綺理たち三人と火雷明王は黙って真羅の告白を聞いていた。
「――というわけでね、私が万宵に乗っ取られる危機は前々からあったのだよ」
真羅はいつもの童子姿で隅の小卓に腰かけ、今まで隠していたことを淡々と白状する。
これまでに何度も万宵から精神干渉を受けていたこと。それにより鏡作の秘儀が招魂の儀式であることも忘れさせられていたため、今回の万宵の企みを見抜けなかったこと。そして今後も、真羅が万宵に乗っ取られる危険性は決してなくならないこと――。
「万宵の魂はまだ地上にいるのだよ。万宵は私から弾き出されるとき、既に別の器に憑りつこうと考えていた。結局なにに憑りついたかまではわからないが、もしその器が近づけば……万宵と魂の糸で結ばれている私は、また今回のように乗り移られることになる」

次はどうなるかわからない、と匂わせた真羅に、綺理は部屋の気温がすっと下がったような錯覚を覚えた。

真羅が、硬い表情で聞いていた面々を見回して言う。

「万宵に乗っ取られてからでは遅いのでね、私は《調停者》としての君たちに裁定を任せたいのだよ。――私を滅ぼすかどうか」

（――――！）

とうに覚悟を決めた声音に、綺理は胸をつかれた。

きっと真羅は、綺理たちが彼を滅ぼす道を選んだら、「そうだね、私もそれをおすすめするよ」と優しく穏やかな顔で言うのだろう。火雷明王を先に呼ばせたこと自体が、真羅本人の選択を物語っている。

けれど綺理には、彼を斬れない。だって今目の前にいるのは、真羅なのだ。いつか乗っ取られるかもしれないけれど、それは今ではない。今彼を滅ぼさなくてはならない理由はない。

――ただ、感情だけで結論を下すには、懸かっているものが重すぎる。

火雷明王は光の射し入る窓辺で、翼を消して腕を組んだまま微動だにしない。彼は綺理たちの誰かが答えないうちはなにも意見しないつもりなのだろう。

綺理も翔波もなにも言えずに凍りつく中、冬惺のため息が部屋に響いた。

彼は場違いなほどいつも通りの口調で言う。

「だったら話は簡単だ。解決法など一つだろう」
そして冬惺は、全員が息を詰めて見守る前で、あっさりとその『選択』を口にした。
「おまえが万宵を乗っ取ればいい」
ぽかん、と真羅が口を開けた。
誰もが唖然とする中、冬惺だけが当然という顔をしている。
「……少年。それは無理だ。分身は本体には抗えない。分身が本体を乗っ取ることなど、不可能なのだよ」
「子狐。おまえ、実はただの阿呆だろう」
冬惺は言下に断言し、自信満々に続けた。
「本体と別の心を持ったおまえがいる時点で、分身が本体に抗えないなどというのは絶対の理ではないと証明されている。しかもおまえ自身がさっき言っただろう。万宵がおまえから弾き出されたとき、なにを考えていたのかを。それがわかったのはなぜだ？　おまえが万宵の意識に干渉できたからじゃないのか？」
それは、分身が本体の意識に干渉することも可能だという証左だ。
（じゃあ、それじゃ……！）

「おまえが妖王の本体になってしまえば、それですべて解決だ。地上に上がってくる淵妖をひたすら撃退し続けるのでは果てがない。だが元を絶ってしまえば、戦いは終わる」

冬惺の示した希望に、綺理は目の前が急に明るくなって見えた。

冬惺が不敵に笑い、呆然としている真羅に指を突きつける。

「おまえがいなくなったら、その根本的な解決策がなくなる。おまえの存在は切り札だ。俺は切り札をむざむざ失う気などないね。――俺たちに裁定を任せたというなら、文句は言うな」

（冬惺！）

綺理と翔波も顔をほころばせ、力強くうなずいた。

それが、綺理たち三人の下した結論だった。

「君たちは――」

真羅は絶句し、やがて大きく息を吐いて火雷明王に目をやる。

「……雛鳥。ならばせめて、君だけは約束してくれたまえ。私が万宵に乗っ取られそうだと判断したら、そのときはきちんと滅ぼしてくれると。――そうすれば私は、これからも安心してキリたちのそばにいられるから」

付け加えられた一言に火雷明王は目を瞠り、それから誓約するような真摯な声で応えた。

「――承知した」

奏珠は里の者が全快するのを見届けてから紅楓家領へ向かうといい、悠蓮は里の恩人としてしばらく周辺で薬種採集をさせてもらってからまた放浪の旅に出るという。

綺理たちは彼らに先駆けて、継承の儀の翌日、里を発つことにした。

『弟をありがとうございます。あの子は必ずや、翔波さまのために手柄を立てるでしょう』

沙良は見送りに出た者たちの先頭で、見送りに来なかった奏珠の代わりに言った。

『冬惺さまと綺理さまも、本当にありがとうございました。これからも鏡作家当主をよろしくお願いします。……お二方なら、いつまた鏡作の里に来られても歓迎いたします』

それは、よそ者を寄せつけぬ里の、最上級の融和の辞だ。

『ありがとう。沙良、またね！』

綺理が嬉しくなって別れ際に手を振ると、沙良はお辞儀しかけたところで動きを止めた。はにかむように笑い、おずおずと手を振り返す。

『――また』

綺理たち三人が鏡作の里に滞在していたのは、長く感じても日数にすれば五日のことだ。翔波の里帰りを兼ねたものと思えば、不審がられるほどの長居ではない。

里での事件もふもとの町には伝わっていなかったので、三人は下屋敷に逗留する玉造家の一行と、なにごともなかったように合流することができた。

隠れ里の様子を興味津々に聞きたがる侍女もいたが、そこは秘密多き鏡作の里のこと。謎めいた笑みを浮かべて「それは言えない約束なの」と言えば、すぐに引き下がってくれる。

その代わりしつこく聞かれたのは、別のことだった。

「姫さま。私たちの渾身の力作の『注意書き』、お役に立つ機会はありましたか？」

「あるわけないでしょ――！　だいたいこんな破廉恥なもの、読めませんってば！」

少し見てしまった部分はあるし、そのときの記憶も抹消できていないのだが、そこは乙女として否定しておく。綺理が巻文を突っ返すと、筆頭執筆者の梨英は残念顔になった。

「最後まで読まれなかったんですか？　最後のほうは、女性のほうからさりげなく逢瀬に誘う方法その他もろもろ、殿方をぐらっとこさせる初々しくもけなげな台詞集まで、明日から役立つ実践向き指南満載の大盤振る舞いでしたのに」

「……」

「嘘です。ですが姫さまがご所望なら、今度はそちらの路線で書きます。お楽しみに」

突っ返す手をつい止めてしまった綺理は、にやにや笑顔で見守る侍女一同に真っ赤になった。

梨英の胸に巻文を押し付け、力の限りに叫ぶ。
「だっ、だから私は読まないってば――!!」

侍女たちとそんなやり取りをした翌日のこと――。
再び玉造の里に向けて出立した一行の中で、綺理はちょっぴり後悔していた。
（……やっぱり、さりげなく逢瀬に誘う方法くらいは知りたかったかも……）
馬を並べる冬惺を、横目でちらと見やる。
――涼やかな秋の風が吹きぬける、昼下がりの山道でのことだ。
鏡作家領から玉造家領へと抜けるこの道は、整備された大街道とは違い、屋形車で通ると振動が激しい。そこで綺理は侍女たちと離れて馬に乗って進んでいたのだが、そのうち家人たちまで周囲から遠ざかりはじめ、気づけば綺理と冬惺が並んで行く形になっていたのだ。
（実際に誘うのは玉造の里に着いてからとしても……。私が冬惺と二人きりで出かけようって言っても不自然じゃないように、今のうちに下地を作っておいたほうがいいよね？）
『玉造の里に着いたら、婚約式の前に冬惺に告白する』
そう決めたのはいいが、どうやって目当ての場所に冬惺を誘い出すかが問題だった。なにか

らなにまで翔波に頼るのも依存しすぎなので、自分から切り出そうと思っているのだが、これが意外に難しい。

（いくらなんでも、直球で『二人きりで夢雪草を見たいの』なんて言うのはね。どうして二人きりじゃないと駄目なのか、面と向かって聞き返されたらその場で終わりそうだし……）

しかし『二人じゃないとできない話があるの』では、夕方から屋敷の外に呼び出す必然性がない。『大事な話があるから』と手紙で呼び出しても、超自然的方向音痴の冬惺では一人では指定場所にたどりつけない。

（そうだ。それなら今のうちに別の場所に二人で出かけようって話にしておいて、そのときになったらその場所から『ちょうど近くだし』って神木のところに誘ってみるとか！）

「――そういえば、綺理。夢雪草の花期には間に合いそうなのか？」

（っ!?）

考えこんでいるさなかに冬惺がその話題を出したので、綺理は仰天した。

心を読まれたかと心臓をばくばくさせながら答える。

「う、うん。たぶん大丈夫。玉造の里に着いたら、あの場所に生えているか確かめないとね」

答えてから、自分の大失敗に気づいた。

綺理は笑顔のまま硬直し、脳内で盛大に絶叫する。

（わあああああ、私の馬鹿――！　今ここでその話に持っていったら、『じゃあ翔波と三人で確

かめに行こう』って約束する羽目になるでしょ！　いきなり告白計画が崩れちゃう――！）

翔波がそばにいれば助け舟を出してくれただろうが、今は家人たちの気遣いのせいで綺理たちのまわりには誰もいない。たとえ綺理が視線で助けを求めても、翔波は近づきにくいだろう。

だがあきらめて話の流れに任せようとしたとき、冬惺の口から予想外の台詞が出た。

「綺理。その花だが……、二人で見に行かないか？」

「――え!?」

思わず頓狂な声を上げると、冬惺は綺理が乗り気でないと思ったのか言葉を濁した。

「結局あの花がきちんと根付いたかどうか、はっきりしないわけだからな。三人で見に行く前に、一度確認に行くのも悪くないだろう。……それとも二人では嫌か？」

綺理はぽかんとして、次いでものすごい勢いで首を横に振る。

「ううん！　そ、そうよね。期待しておいてもし全然夢雪草が生えてなかったら、翔波ががっかりするもんね。先にふ、二人で確認しに行きましょ！」

だしに使ってごめんね、と内心翔波に謝りながら、綺理はこの降ってわいた幸運に全力でしがみついた。

冬惺は綺理の勢いに目をしばたたかせ、それから息をつく。

「……確認と、実は婚約式の前におまえと二人きりで話したいことがあるんだ。いいか？」

（二人きりで、話――？）

先ほど考えていたことをそっくりそのままなぞるような台詞に、綺理の心臓がとくんとはねた。変な期待をしちゃいけないと思いながらも、とくとくと鼓動が速まる。

「あ……あの、話って……？」

「そのときになったら話す。……ああ、いや、そんなに身構えるような緊迫した話じゃないから」

心なしか、冬惺が動揺している気がする。まるで、二人で会う約束を無事に取り付けられてほっとしているような――。

「えっと……実は、私も冬惺に話があるの。わ、私も……そのときになったら話すから」

小声で言うと、冬惺は「そうか」とどこか緊張したような返事をした。

いつもと同じ距離で馬を並べているのに、いつもと違うやりとり。なんだか気恥ずかしくてどちらからともなく前を向き、二人はしばし黙りこくったまま馬を進める。

その沈黙と緊張が決して悪いものには感じられず、綺理は火照った顔を上げた。冷たい秋風が頬を撫ぜるのを心地よく思いながら、期待と予感を胸に道の先を見つめる。

（――玉造の里に、着いたら）

鏡作家領と玉造家領の境の切り通しを、婚約式に向かう行列がしずしずと通過していく。
その様を、鷹を連れた一人の男が断崖の上から見下ろしていた。
男の左手にとまる鷹から、くつくつという笑声と人語が漏れる。
「鏡の次は玉。君の次なる狙いは、玉造というわけかね？」
「そうだ。不服か？」
「いいや。玉造の里は私にとっても運命の地なのだよ。君があの地で一波乱起こしてくれるのが楽しみだ。私もぜひ、その宴に参加したい――」
楽しそうに笑う鷹に、男は口元を笑みの形に歪めた。薄紫の瞳を北天に向け、左腕を勢いよく振って鷹を空へ放つ。
蒼天に、一羽の鷹が舞い上がる。
玉造の里へと向かって――。

あとがき

こんにちは。今回、あまりの筆の進まなさに、「原稿落とすかも」という言葉が頭の中を廻っていた薙野ゆいらです。

執筆が難航したのは、主に鳥好きの新キャラと、勝手に動いては出番をもぎ取りにくる双子の片割れのせい。どちらも書いていて楽しかったんですが、それと「書きやすい」はまったく別物だったんですねー……（遠い目）。

本書が予定月に発売できたのは、全面的に担当様のおかげだと思っております。

電話のたびに泣き言だらけだった私をなだめたりすかしたり、どうにか脱稿までこぎつけさせてくださった担当様には、頭が下がる思いです。下がるどころか、土下座したい勢いです。本当に、原稿が遅くてすみませんでした……っ！

というわけで、改めまして。

『金蘭の王国』第三巻、「月満ちる鏡の里へ」をお届けします。

サブタイトルの通り（？）、メインは翔波です。翔波が幼なじみ三人組の一人として面目躍如、の巻です。表紙でも彼が恰好よく決めてくれています！　本文でも恰好よく決めているか

どうかは……読み手の皆様にお任せします。とりあえず彼、頑張ってはいます。

そして方々から「鈍すぎるわ！」とつっこまれてきた冬惺も、とうとう今回、恋愛沙汰に疎いままではいられなくなってきました。それぞれが恋愛事で悩んだり吹っ切れたり勇気を出したり本音を言ったり言わなかったり……と、水面下で変化のあった巻かなあと思います。

さらに敵サイドも本格的に登場したことで、ラブ的にも物語的にも次で山を迎えます。お久しぶりなあの人にも、また出てきてもらいたいところ。

さてさて。今回あとがきが三ページもあるのでなにを書こうか迷ったのですが、せっかくなので作中の名前について少し。

本シリーズは漢字圏ファンタジーにつき、固有名詞が漢字。おかげで毎回ネーミングに悩んでいます。特にキャラ名は、音も字面も綺麗で、読みやすくて、そのキャラのイメージに合って、ついでになにかしらの意味を込められたらいいな……などと欲張ってしまうので、毎度毎度、漢和辞典と睨めっこすることになります。

そんな中、一番さっくりと名前が決まったのは、実は妖王コンビ。二人で一組になる名前がいいなと考えていたら、ぱっと思いついたのがあれだったというわけで……。

まあ、その、そんな感じで、今巻でも「二人合わせて××××かい！」とつっこみを入れていただければ幸いです。

ちなみに火雷明王こと大天火雷金翅明王は、「金翅鳥」の別名を持つ天部（仏教守護神）と、降魔の剣を持ち火炎の中に立つ不動明王から取りました。火雷明王が作中でしょっちゅう鳥呼ばわりされているのは、名前の時点で決まっていた運命のようなものです。

イラストレーターの香坂ゆう様。いつも素敵なイラストをありがとうございます！

執筆に詰まっていたときに担当女史が私の鼻先にぶら下げたニンジンは、「原稿が上がれば香坂さんがイラストを描いてくれますよ！」でした。そして表紙のラフ画をいただいたときには、綺理の可愛らしさに見事にノックアウトされました！　可愛い！　そしてラブい！

担当女史を始め、各関係者の皆様。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした……！　次はもっと早く原稿を上げられるようにします！

そしてなにより、本書をお手に取ってくださった読者の皆様に心からの感謝を。

次の巻でもお目にかかれれば幸いです。

薙野ゆいら

BEANS BUNKO

「金蘭の王国 月満ちる鏡の里へ」の感想をお寄せください。
おたよりのあて先
〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3
角川書店ビーンズ文庫編集部気付
「薙野ゆいら」先生・「香坂ゆう」先生
また、編集部へのご意見ご希望は、同じ住所で「ビーンズ文庫編集部」
までお寄せください。

金蘭の王国
月満ちる鏡の里へ
薙野ゆいら

角川ビーンズ文庫 BB62-6 15874

平成21年9月1日 初版発行

発行者――井上伸一郎
発行所――株式会社角川書店
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/編集(03)3238-8506
〒102-8078
発売元――株式会社角川グループパブリッシング
東京都千代田区富士見2-13-3
電話/営業(03)3238-8521
〒102-8177
http://www.kadokawa.co.jp
印刷所――暁印刷 製本所――BBC
装幀者――micro fish

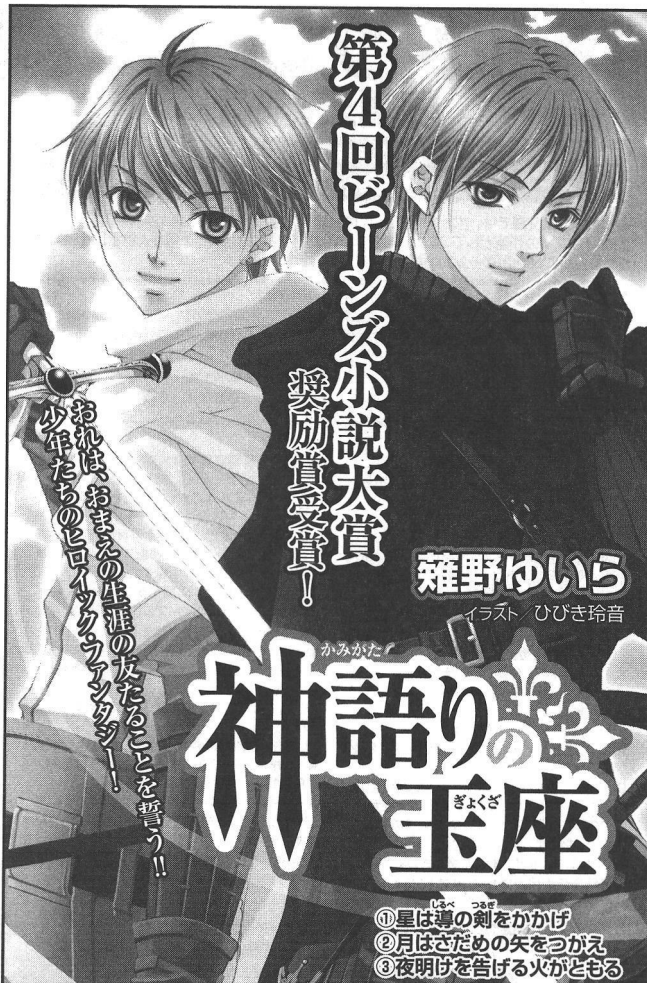
本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁本は角川グループ受注センター読者係にお送りください。
送料は小社負担でお取り替えいたします。

ISBN978-4-04-452706-8 C0193 定価はカバーに明記してあります。

©Yuira NAGINO 2009 Printed in Japan


薙野ゆいら
イラスト／香坂ゆう
この王国は、大切な人たちは、わたしが守る!!
豪華絢爛アジアン・ファンタジー!
金蘭の王国
①君とはじまりの約束を　②恋の嵐は王宮に吹いて
③月満ちる鏡の里へ
大貴族の姫君・綺理は、親の決めた婚約者・冬惺のことがひそかに気になっているのだが、全然意識されていないのが悩みの種。そんな中、王国では淵妖と呼ばれる妖の被害が続出。綺理は冬惺たちと共に淵妖退治のために奮闘する――!!

●角川ビーンズ文庫●


第4回ビーンズ小説大賞
奨励賞受賞！
おれは、おまえの生涯の友たることを誓う!!
少年たちのヒロイック・ファンタジー！
雁野ゆいら
イラスト　ひびき玲音
神語りの玉座
①星は導の剣をかかげ
②月はさだめの矢をつがえ
③夜明けを告げる火がともる

●角川ビーンズ文庫●

第9回 角川ビーンズ小説大賞
原稿大募集!

大賞 正賞のトロフィーならびに副賞300万円と応募原稿出版時の印税

角川ビーンズ文庫では、ヤングアダルト小説の新しい書き手を募集いたします。
ビーンズ文庫の作家として、また、次世代のヤングアダルト小説界を担う人材として世に送り出すために、「角川ビーンズ小説大賞」を設置します。

【募集作品】
エンターテインメント性の強い、ファンタジックなストーリー。ただし、未発表のものに限ります。受賞作はビーンズ文庫で刊行いたします。

【応募資格】
年齢・プロアマ不問。

【原稿枚数】
400字詰め原稿用紙換算で150枚以上300枚以内

【応募締切】2010年3月31日(当日消印有効)

【発　　表】2010年12月発表(予定)

【審査員】(敬称略、順不同)
あさのあつこ　椹野道流　由羅カイリ

【応募の際の注意事項】
規定違反の作品は審査の対象となりません。

■原稿のはじめに表紙を付けて、以下の3項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 原稿枚数(ワープロ原稿の場合は400字詰め原稿用紙換算による枚数も必ず併記)

■2枚目に以下の7項目を記入してください。
① 作品タイトル(フリガナ)
② ペンネーム(フリガナ)
③ 氏名(フリガナ)
④ 郵便番号、住所(フリガナ)
⑤ 電話番号、メールアドレス
⑥ 年齢
⑦ 略歴(文学賞応募歴含む)

■1200字程度(原稿用紙3枚)のあらすじを添付してください。

■原稿には必ず通し番号を入れ、右上をバインダークリップでとじること。原稿が厚くなる場合は、2～3冊に分冊してもかまいません。その場合、必ず1つの封筒に入れてください。ひもやホチキスでとじるのは不可です。(台紙付きの400字詰め原稿用紙使用の場合は、原稿を1枚ずつ切り離してからとじてください)

■ワープロ原稿が望ましい。ワープロ原稿の場合は必ずフロッピーディスクまたはCD-R(ワープロ専用機の場合はファイル形式をテキストに限定。パソコンの場合はファイル形式をテキスト、MS Word、一太郎に限定)を添付し、そのラベルにタイトルとペンネームを明記すること。プリントアウトは必ずA4判の用紙で1ページにつき40字×30行の書式で印刷すること。ただし、400字詰め原稿用紙にワープロ印刷は不可。感熱紙は字が読めなくなるので使用しないこと。

■手書き原稿の場合は、A4判の400字詰め原稿用紙を使用。鉛筆書きは不可です。(原稿は1枚1枚切りはなしてください)

・同じ作品による他の文学賞への二重応募は認められません。
・入選作の出版権、映像化権を含む二次的利用権(著作権法第27条及び第28条の権利を含む)は角川書店に帰属します。
・応募原稿及びフロッピーディスクまたはCD-Rは返却いたしません。必要な方はコピーを取ってからご応募ください。
・ご提供いただきました個人情報は、選考および結果通知のために利用いたします。

【原稿の送り先】〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3
(株)角川書店ビーンズ文庫編集部「第9回角川ビーンズ小説大賞」係
※なお、電話によるお問い合わせは受け付けできませんのでご遠慮ください。

9784044527068

ISBN978-4-04-452706-8
C0193 ¥476E

定価：本体476円（税別）

1920193004762

BEANS BUNKO

金蘭の王国
月満ちる鏡の里へ

薙野ゆいら

ついに正式な婚約式を行うことになった綺理と冬悝。だが相変わらず恋愛音痴な冬悝相手に、「もう幼なじみの『好き』でもいいかなって…」と笑う綺理を見ると、冬悝の従者・翔波は心穏やかでない。そんな中、化け物に襲われる鏡作の里人が、助けを求めやって来る。化け物を封印するため翔波は、神宝「月氷澄の鏡」継承の儀にのぞむことに。その裏では、敵の若き名将・空雖の影がちらついていて!?